

フィールドワーク人間科学

よみがえる コミュニティ

杉万俊夫 編著

自らが住むコミュニティをみつめ、いきいきした地域をつくる。

- 先駆的な住民自治の社会システムをめざす過疎地域——鳥取県智頭町
- 医療関係者と住民がスクラムを組んでつくった地域医療——京都市西陣
- 震災をバネに始まったNGO・NPOによるまちづくり——神戸市・西宮市

貴重な実例をもって、「人間科学のフィールドワークとは何か」を主張する。

ミネルヴァ書房

フィールドワーク人間科学
よみがえるコミュニティ

杉万俊夫 編著

ミネルヴァ書房

まえがき

本書は、2種類の読者を想定している。1つは、人文・社会科学の領域におけるフィールドワーク（現場研究）に関心を持つ読者、もう1つは、地域づくり（まちづくり・村づくり）、コミュニティの活性化などに興味を持つ読者である。

(1) フィールドワークに関心を持つ読者に

本書は、自然科学的フィールドワークに対する、もう1つのフィールドワークのあり方——人間科学的フィールドワーク——を、その実例とともに主張する。ここで、自然科学的フィールドワークとは、フィールドの現象を、あくまでも外部者としてのスタンスを維持しながら観察するフィールドワークのことを指している。それに対して、人間科学的フィールドワークは、研究者が、決してフィールドの現象の外部者ではありえないこと、すなわち、研究者が望むと望まざるとにかかわらず、研究者とフィールドの現象の間には、相互作用が生じてしまうことを前提にしたフィールドワークである。さらに、積極的な意味合いを込めるならば、研究者とフィールドの人々の共同実践として進行するフィールドワークと言ってもいいだろう。

翻って考えるならば、研究者が、フィールドの現象と相互作用的關係を作り出してしまうのが避け難いことは、従来からも、少なからず認められていた。しかし、フィールドワークの成果が発表される段になると、その相互作用的關係は、極力、背景に隠され、あたかも、透明人間の研究者が観察したかのように報告されてきた——そのような相互作用的關係は、研究者の胸の内におさめられ、研究の裏話としてしか語られなかった。ましてや、研究者とフィールドの人々が、特定の価値観や目的意識を共有し、自覚的に共同実践を遂行したことを明示的に報告するなど、科学論文たることを放棄するに等しかった。

もっと、のびのびと、自らに正直にやれないものか——もちろん、透徹した言説化という科学の営みとして。そのためには、自然科学とは異なる、もう1つの科学的スタンスを認め、そのあり方を研ぎ澄ましていかねばならない。幸い、もう1つの科学的スタンスを構想する時機は熟しつつある。すなわち、われわれは、共同主観性論、社会構成主義、オートポイエーシス論、内部観測論、社会学的身体論など、哲学的、思想的、理論的な追い風の中にいる。

言うまでもなく、もう1つの科学——人間科学——に基づくスタンスが確立されてから、個別の研究（フィールドワークも含めて）がスタートするわけではない。個別研究をやりながら、同時並行的に、自らが拠って立つ人間科学のあり方をも問い続けていかねばならない。本書も、そのような試みの中間報告である。第1章では、人間科学的フィールドワークのあり方を、自然科学的フィールドワークと対比させつつ論じた。それに続く第2-4章は、人間科学的フィールドワークのあり方を模索しつつ行われた個別研究の実例である。

(2) 地域づくり、コミュニティの活性化に興味を持つ読者に

本書のテーマは、住民主導の地域づくり（まちづくり・村づくり）である。すなわち、住民が問題意識、危機意識を持ち、自らの地域を見つめ、自らの地域を変革していくプロセスをとりあげる。本書では、住民主導の地域づくり、コミュニティづくりの事例を3つ紹介する。いずれの事例も、何らかの危機——過疎、貧困、震災——をバネに始まった、コミュニティをよみがえらせる物語である。

地域づくりやコミュニティの活性化に興味を持つ読者は、第2、3、4章のいずれから読み始めていただいても結構である。なお、第1章の第4節は、第2-4章への序文である。

まず、第2章では、過疎をバネにして始まり、今、住民自治の社会システムを創造しつつある事例を紹介する。それは、鳥取県八頭郡智頭町において、たった2人から始まり、今や、全住民を巻き込みつつある地域活性化の物語である。第4節は理論的な考察であり、必ずしも読みやすい内容ではないので、と

ばしていただいてもかまわない。

次に、第3章は、戦後の貧困をバネにして始まり、他の地域に先駆けて、高齢者のための地域医療を構築した事例である。それは、京都市西陣において、医療関係者と住民が同じ目線に立って展開した、住民による住民のための地域医療システム構築の物語である。

最後に、第4章は、未曾有の災害、阪神大震災をバネにして始まり、今、ボランティア社会を構築しようとする事例である。それは、被災地において災害救援に特化したNPOを育む物語、および、多くのボランティア団体をサポートしながら、ボランティアを含む市民社会を構想する物語である。

本書は、本書に登場する多くの方々と私たち執筆者の共同作品である。それらの方々との共同実践に携われたことを幸せに思うとともに、心より感謝の意を表したい。また、ミネルヴァ書房の寺内一郎氏からは、第2-4章について、第1章で述べた人間科学的フィールドワークの立場に立った上での厳しい貴重なコメントをいただいた。私にとって、自らの研究が出版社の人によって鍛えられた初めての経験だった。

本書のいくつかの節は、オリジナル論文・著書に加筆修正を加えたものである。そのオリジナル論文・著書は、次のとおり。

・第2章第1節

杉万俊夫 1997 「過疎地域の活性化——グループ・ダイナミックスと土木計画学の出会い」(「実験社会心理学研究」, 37巻2号, 216-222頁)。

・第2章第2節

日本・地域と科学の出会い館 1997 「ひまわりシステムのまちづくり——進化する社会システム」はる書房。

・第2章第4節

森 永壽 1997 「過疎地域活性化における規範形成プロセス——鳥取県八頭郡智頭町の活性化運動13年」(「実験社会心理学研究」, 37巻2号, 250-264頁)。

・第3章第2節

孫 治斌 1998 「住民運動としての地域医療——京都「西陣健康会」の50年」(「実

験社会心理学研究], 38巻2号, 215-225頁)。

早川一光 1998 「住民の中へ, 住民と共に——町衆の医療」(「実験社会心理学研究」, 38巻2号, 205-214頁)。

・第4章第1節

渥美公秀 1998 「ボランティア社会の行方」(「組織科学」, 31巻3号, 27-35頁)。

渥美公秀・加藤謙介・鈴木勇・渡邊としえ 1999 「災害ボランティア組織の活動展開——日本災害救援ボランティアネットワークの5年」(神戸大学「震災研究会」(編)「阪神大震災研究4 大震災5年の歳月」, 神戸新聞総合出版センター, 357-374頁)。

渡邊としえ 2000 「地域社会における5年目の試み——「地域防災とは言わない地域防災」の実践とその集団力学的考察」(「実験社会心理学研究」, 39巻2号, 188-196頁)。

なお, 「実験社会心理学研究」は, 日本グループ・ダイナミックス学会(ホームページ <http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jgda/index.html>) の学会誌である。

また, 各章のフィールドで立ちあげられているホームページは, 次のとおり。

・第2章(智頭町活性化プロジェクト集団: CCPT)

<http://www.hi.h.kyoto-u.ac.jp/users/chizu/>

このホームページには, 智頭町活性化プロジェクト集団が, 10年間(1989-98年)にわたって出版した「CCPT活動実践提言書」(全10冊)が掲載されている。

・第4章第1節(日本災害救援ボランティアネットワーク: NVNAD)

<http://www.nvnad.or.jp/>

・第4章第2節(市民活動センター・神戸)

<http://www.dodirect.com/kiroku/>

・編者(杉万俊夫)が行なったフィールドワークや理論的考察については, 次のホームページを参照されたい。

<http://www.users.kudpc.kyoto-u.ac.jp/~c54175/>

2000年3月

杉万俊夫

目 次

まえがき	i
第 1 章 人間科学のフィールドワーク	1
第 1 節 2つのフィールドワーク	1
1 そつとありのままを	1
2 そつとありのままを見ようとしても	6
3 どこがちがうか——観察者と観察対象の関係	10
第 2 節 自然科学と人間科学	11
1 自然科学の基本	11
2 もう1つの科学——人間科学	12
第 3 節 人間科学のフィールドワーク	16
1 ローカルな共同の実践	16
2 1次モードと2次モード	18
3 目的と価値観	20
4 ローカルからインターローカルへ	21
5 研究者の役割——理論	22
第 4 節 フィールドワークの実例——第 2, 3, 4 章の序文	23
第 2 章 住民自治の社会システムをめざして	29
第 1 節 過疎問題とは	29
1 過疎問題の変遷——「貧しさの中の過疎」 から「豊かさの中の過疎」へ	29
2 行政統計に見る過疎地域の現状	31
第 2 節 智頭町におけるフィールドワーク	33
1 智頭町	33
2 私と智頭（その1）——出会い	34

3	たった2人から始まった——活性化運動の推移(1984—94年)……	38
4	私と智頭(その2)——サポーターの1人に……	64
5	行政との融合(1994—96年)……	67
6	私と智頭(その3)——集落の中に……	84
7	ゼロ分のイチ村おこし運動……	89
8	私と智頭(その4)——理論……	93
第3節	概念を共有する——智頭での対話……	94
第4節	理論的考察……	126
1	規範形成の理論……	126
2	活性化運動における規範形成プロセス……	132
第3章	住民による地域医療をめざして……	149
第1節	西陣との出会い……	149
第2節	住民運動としての地域医療——京都「西陣健康会」の50年……	154
1	1950年代——医療にかかれぬ人々に医療を……	154
2	1960年代——自分たちの健康は自分たちで守る……	161
3	1970年代——高齢者医療の先駆け……	166
4	1980年代——成熟、そして苦難……	168
5	1990年代——原点を見つめ、第2ラウンドへ……	170
6	西陣の50年をふりかえって——役柄の物象化……	172
第3節	「公設・住民営」の地域医療をめざして……	175
第4章	ボランティア社会をめざして……	183
第1節	被災地での5年間——日本災害救援ボランティアネットワークの 経緯と理論的整理……(渥美公秀・渡邊としえ)……	183
1	日本災害救援ボランティアネットワークの活動経緯……	185
2	研究者がその時々が発した言説……	203
3	ボランティア社会に向けて……	215
第2節	NPOは時代をひらくか?……(実吉 威)……	222
1	変化するボランティア像——非日常から日常へ……	223

2	新しいボランティア	226
3	NPOがセクターを形成すること	234

第1章 人間科学のフィールドワーク

杉万俊夫

本章では、まず、自然科学的フィールドワークと人間科学的フィールドワークの例を紹介し（第1節）、自然科学と人間科学の基本的スタンスの違いを明確にする（第2節）。その上で、人間科学のフィールドワークは、①当事者と研究者によるローカルな共同実践であること、②その共同実践では、1次モード、2次モードという2つのモードが繰り返されること、③そこには特定の目的と価値観が存在すること、④ローカル（局所的）な共同実践は、実践記録と理論の抽象化によって、他のローカルな共同実践へと伝播し、インター・ローカルな共同実践へと拡大しうること、⑤共同実践における研究者の貢献は理論であることを述べる（第3節）。最後の第4節は、具体的なフィールドワークの実例を紹介する第2-4章への序文である。

第1節 2つのフィールドワーク

1 そととありのままを

まず、対照的なフィールドワークの例を2つ紹介しよう。

最初の例は、心理学の代表的ジャーナルの1つ、*Psychological Review* 誌に掲載されたフィールドワーク（Yamori, 1998）である。この研究のフィールドは、非常に身近なフィールドである。読者の中には、今日、これと似たフィー

ルドに身を置いた人がいるかもしれない。

フィールドは、JR大阪駅前にある横断歩道。長さ27m、幅16m。1回の歩行者横断時間は70秒。おそらく、西日本では、最も歩行者数が多い横断歩道のひとつであろう。朝のピーク時、8時30分前後には、1回の横断で、約300人が横断する。

観察者は、この横断歩道のすぐ横に立つビルの30階にある1室にカメラを持ち込み、横断歩道がすっぽりレンズにおさまる窓ぎわに、カメラを設置した。なにしろ、地上30階、カメラに気づく歩行者などいるはずがない。2秒ごとの自動シャッターで撮影。36枚どりのフィルムを使えば、1回の横断時間70秒が、ちょうどフィルム1本におさまる。撮影した横断回数は、200回に及んだ。

実は、この撮影の後に、膨大な手作業が行われている。1回の横断に登場するすべての歩行者に識別番号を与え、歩行者1人1人が、35枚の写真のそれぞれで、どの位置にいるかをパソコンに入力していくという作業である。これには、デジタイザーという入力機器が使用されている。デジタイザーとは、ボールペンのようなポインターで、平板上の任意の点を押すと、その点の座標（X座標とY座標）を読み取り、パソコンに送り込む装置である。平板上の所定の位置に写真を置き、すべての歩行者について、識別番号を入力しては位置をポインティングする、という作業を繰り返す。この作業を、35枚分の写真について行い、やっと、横断1回分のデータ入力が終わる。

図1-1を見ていただきたい。この図は、2秒間の歩行者の動きを示している。多くの小さな矩形が描かれているが、その1つ1つが、歩行者1人が2秒間に歩いた空間を示している。白い矩形は、左から右に向かって歩く歩行者、黒い矩形は、右から左に向かって歩く歩行者を示している。

図1-1を見ると、白い人流の帯、黒い人流の帯が、たがいちがいに、計5本形成されているのがわかる。この帯状構造こそ、本フィールドワークのテーマである。帯状構造は、毎回の横断で、常に発生するわけではない。では、どのような条件下で、どのようなメカニズムで、帯状構造は形成されるのか——これらの点をめぐって、徹底的な分析がなされていく。

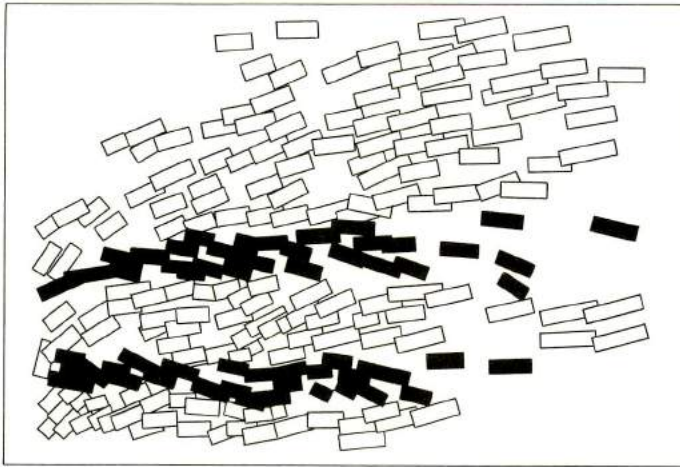


図1-1 2秒間の歩行者の動き
 白い矩形—左から右に向かって歩く歩行者
 黒い矩形—右から左に向かって歩く歩行者

分析の第1歩は、带状構造がどの程度形成されているかを計量することである。研究者は、視察（目で見た結果）とよく対応する指標（帯化指標）を考案した。指標算出の詳細は省略するが、この指標が0.3以上だと、視察でも带状構造がはっきり見てとれる。0.1以下だと、带状構造は見てとれない。

図1-2は、ある横断について、帯化指標と（横断歩道上にいる）歩行者数の推移をグラフ化したものである。途中の5時点については、歩行者の2秒間の歩行状況も示してある。これを見ると、信号が青になって約30秒経過し、歩行者数がピークになった時点で、はっきりした带状構造が形成されたことがわかる。しかし、仮に、図1-2とほぼ同数の歩行者が横断しても、带状構造が形成されないこともある。図1-3は、带状構造が形成されなかった例である。

図1-4は、40回の横断を、歩行者総数と（ピーク時の）帯化指標でプロットしたものである。これを見ると、歩行者総数が100人を下回ると、带状構造ができないことがわかる。また、歩行者総数が100人を上回っても、带状構造ができる場合、できない場合、ほぼ50%ずつである。

研究者は、以上のフィールドワークで観察された带状構造の形成メカニズム

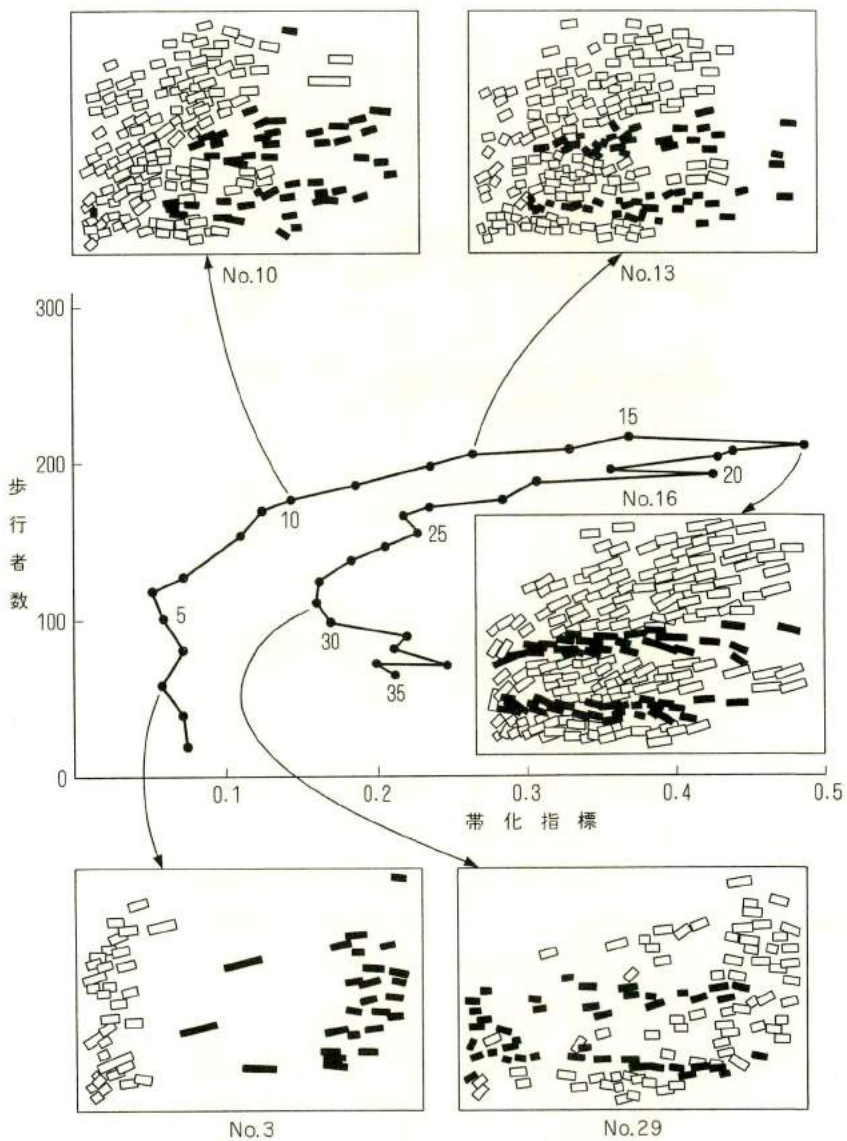


図1-2 帯化指標と歩行者数の推移
(帯状構造が形成された場合)

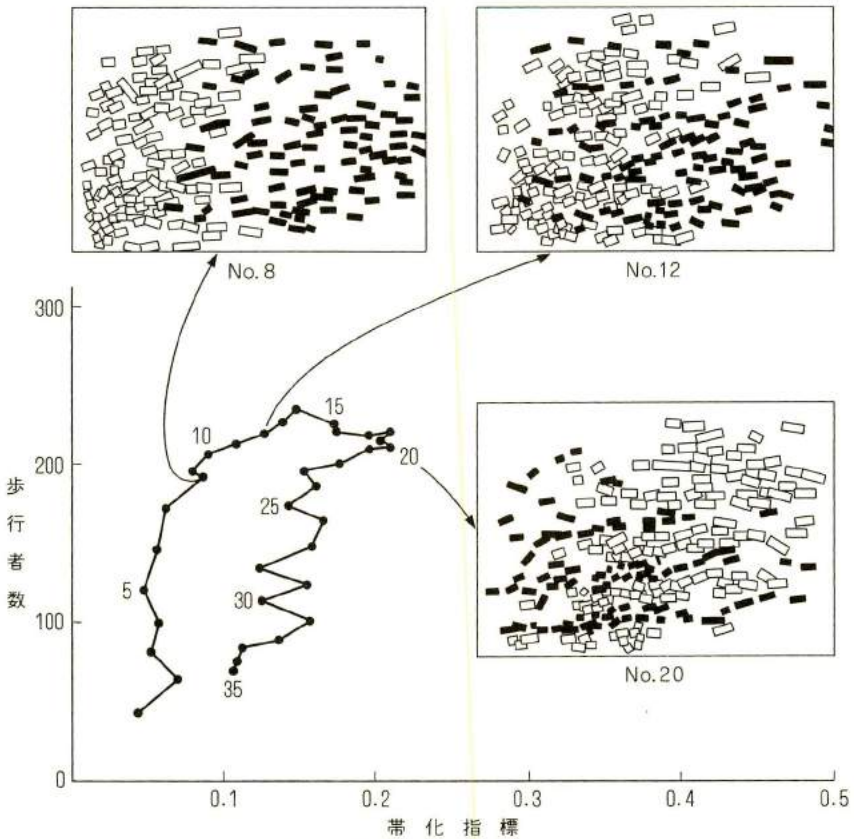


図1-3 帯化指標と歩行者数の推移
(帯状構造が形成されなかった場合)

を調べるために、コンピューター・シミュレーションへと踏み込んでいった。そのシミュレーションでは、歩行者群集の大域的状態（帯化指標と歩行者数）と、歩行者個人の歩行行動の間に動的相互規定関係（マクロ-マイクロ・リンク）を想定したモデルが採用されている。このシミュレーションは、比較的少数のパラメータによって、観察結果をみごとに再現している。

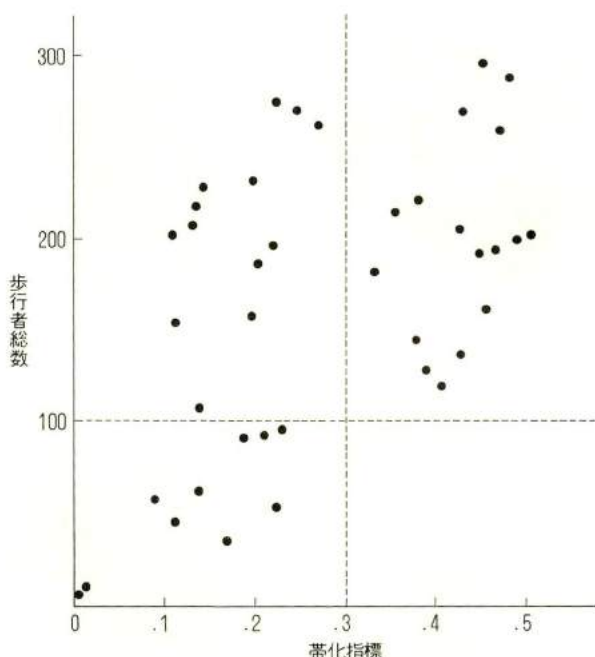


図1-4 歩行者総数と（ピーク時の）帯化指標の関係

2 そつとありのままを見ようとしても

次のフィールドワークの例は、がらりと変わって、アフリカ、スーダンにおけるフィールドワークである。

スーダンは、アフリカ最大の面積2,505,813平方キロ（日本の6倍以上）を有し、人口約2,500万（1990年推定）の国である。南の隣国ウガンダから流れ込む白ナイルと、東の隣国エチオピアから流れ込む青ナイルは、スーダンの首都ハルツーム市内で合流、北の隣国エジプトを経て、地中海に注ぐ。

1980年代半ば以来、スーダンは、自国および隣国（とりわけ、エチオピア）における干ばつ、飢饉、そして、内戦のために発生した、大量の難民を抱えている。その数は、1991年の時点で、約350万と推定され、それ以降も増加の一途をたどっている。難民の多くは、首都ハルツーム周辺に設置された難民キャン

ブに、泥の家をつくり、国外・国内からの非政府組織（NGO）の救援をも受けながら、なんとか生きのびている。

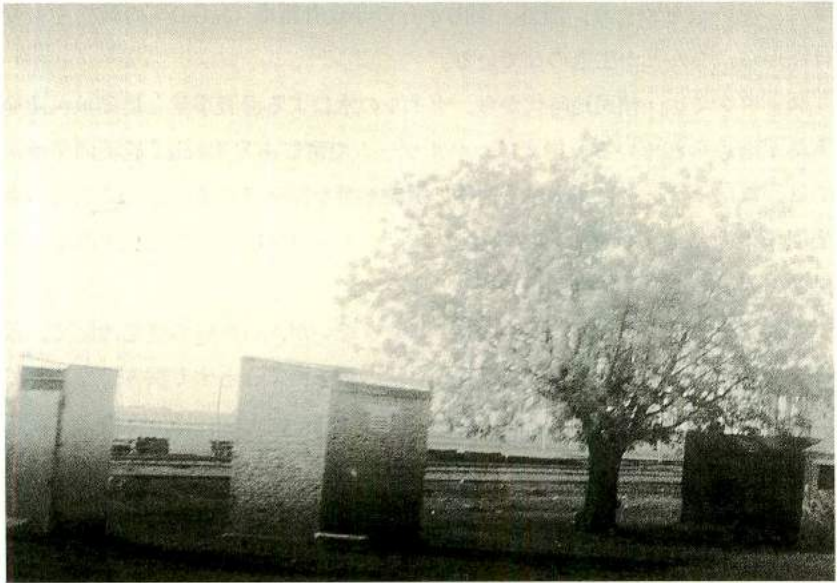
スーダンでは、植民地時代から、ナイルの水による灌漑事業と農業地区開発事業が進められている。例えば、ハルツームの南にある Gezira 農業開発地区では、ほぼオランダに相当する面積の農業地帯が開発されている。これらの農業開発地区には、多数の農場経営者（テナント）が存在し、農場経営者は、労働者を雇用して、農業を営んでいる。

大量の難民に比べれば、ごく一握りにすぎないが、これらの農業地区で、難民を農業労働者として雇用し、難民に自活の道を開こうとする試みがなされている。次に紹介するフィールドワーク（Gaim Kibreab, 1990）は、そのような農業労働者となった難民の生活実態を調べるために行われたものである。このフィールドワークを行なった研究者自身、もとは、難民の1人であった。

この研究者は、難民の生活実態を調べつつ、自らの研究方法についても考察を加えている。まず、この研究者は、難民たちの中に入るにつれて、自分と研究対象の関係に変化が生じたことを述べている。

「研究を開始した当初、私は、難民労働者やテナントを、あくまでもデータ・ソース（情報源）として利用することばかり考えていた。しかし、次第に、それではいけないことに気づかされた——彼らは、前もって準備してきた調査項目への回答者ではないのだ、彼ら自身が重要と考えていること、それについて耳を傾けねばならない、と。実際、彼らが自主的に提起してくる問題は、私の研究に大きなインパクトを与えた。それは、彼らのコミュニティを理解する上で、不可欠の情報であった。」

しかし、このような方針転換は、研究者に、新たな問題を突きつけた。すなわち、研究対象から得られる情報の信憑性をめぐる問題である。とりわけ、自活への道が困難で、救援組織への依存度が高い地区では、難民は、自らの苦境を、周到に誇張させる傾向があった。従来から、生活実態調査の多くは、救援組織が救援プログラムを開始するための事前調査として実施されてきた。救援組織は、事前調査に基づいて、困窮度が高い難民への救援を優先する。生活実態調査に訪れる人物は、救援組織の人間であり、救援を得るには、自らの窮状



スーダンの

を誇張して伝えねばならない——難民が、そう思うのは当然であった。研究者は、次のような経験を紹介している。

「私は、スーダン東部にある農業地区で働く部族の長老に会いに行った。彼は、いたって健康であり、私とうちとけ、貴重な話を披露してくれた。しかし、話の途中、あるNGOの女性スタッフが、私を探して、部屋に入ってきた。すると、どうしたのか、その長老は、突然、病人になってしまった。女性スタッフは、どこが悪いのか、彼に尋ねた。すると、彼は、自分がいかに貧しい暮らしをしているか、また、自分の病気がいかに絶望的な病気であるかを、せつせつと訴えたのであった。

その3日後、私は、話の続きを聴こうと、再び、長老の家を訪れた。そのとき、なぜ、3日前、突然、病人になったのかを尋ねた。彼は、実にあっさりと、こう答えた——『どうせ、おれたちに未来なんてないのさ。そんなおれたちを助ける物好きなんて、いやしない。おれたちの言うことを聴いてくれるやつなんて、どこにいないんだ。たまに救援物資とかにあずかる奴がいるが、それは、もう、どうしようもない病気の奴だけさ。あいつら（救援組織の人）が面倒をみるのは、もう手遅れの連中だけだ。どうして、おれが、手遅れになるまで、待たなくっちゃいけないんだ。手遅れになる前に助かるのが、なぜ、悪いんだ。そりゃ、手遅れになれば、アラ-



農業開発地区

が助けて下さるのかもしれない。でも、なあ、おれは、今、助けてほしいんだ。兄弟よ、わかるかい。おれは、あいつらにわかる言葉で話ただけなのさ。』

このように、研究対象（難民労働者たち）が、研究者を、救援活動に携わる組織の関係者、あるいは、その依頼を受けた調査者とみなしたならば、決して、「ありのまま」の姿を語ろうとはしない。研究者は、いかなる救援組織とも関係のないことを、難民に理解してもらわねばならなかった。

「ある農業開発地区の難民リーダーに、調査への協力を依頼したときのことである。リーダーたちは、研究に協力すれば、自分たちにどのような恩恵があるのかを尋ねた。私は、『何もない』と答えた。すると、意外なことに、リーダーの1人が、こう言った。『あなたが、そう言わなかったら、かえって、私たちは、がっかりしたでしょう。ここには、調査の目的で多くの人がやってきます。そして、彼らは、調査に協力すれば、どんなにいいことがあるかを、山ほど並べたてます。でも、何かいいことがあったためしなど、一度もありません。』（中略）

私の実態調査が、純粋な学術研究であることを、彼らに理解してもらわねばならない。しかし、それは容易なことではなかった。私は、彼らと同じ国の出身者であ

り、彼らと同じ言語を話すこともできる。しかし、その言語には、「学術研究」を的確に表現する言葉がない。そこで、私は、窮余の一策、次のように説明した。『この実態調査が首尾よく完了した暁には、学位という称号をもらえるのです。』この説明によって、彼らの多くは、私が、いかなる救援組織とも無関係であることを理解してくれた。そして、匿名性さえ保証されるならば、調査に協力してもよいと言ってくれた。(中略)

一応、調査に協力してくれることになった対象者でも、彼らから、ありのままの情報を引き出すのは容易ではなかった。さっさと終わればいいのに、と顔に書いてある対象者もいた。まじめに質問に応じようとしない対象者もいた。別れぎわに、こんなセリフをはいた老人もいた。『息子よ、鶏を何羽持っているかとか、ヤギは何匹、ラクダは何匹とか、そんなくだらない質問をするより他に、何かすることはあるのか？家族の誰が水くみにいきますか、だって。私がかくみにいこうが、妻がかくみにいこうが、それがどうだっていうんだ。おまえは、教育を受けた人間だろう。もっと時間の使いみちを考えろよ。』

3 どこがちがうか——観察者と観察対象の関係

以上の2つのフィールドワークには、観察者と観察対象の関係において、大きな違いがある。前者の横断歩道におけるフィールドワークでは、観察者と観察対象（歩行者群集）の間に、明確な一線が引かれ、観察対象は一線の向こう側に据えられ、観察者は一線のこちら側から観察している。したがって、観察者と観察対象の間に、いかなる相互作用も生じない。観察者は、観察対象の動きに何ら干渉することなく、観察対象の動きを、ありのまま観察している。このような観察者のスタンスは、自然科学において求められるスタンスである。

一方、後者、スーダンの難民労働者に関するフィールドワークには、観察者と観察対象（難民労働者）の間に、一線を引きたくても引けない状況を見ることができ。まず、研究者は、調査項目——対象者について調査すべき事項——それ自体が、対象者が発するセリフによって与えられることに気づく。そのようなセリフを得るには、対象者との相互作用が不可欠である。

さらに、研究者は、そのセリフが、相手（質問者）に応じて大きく異なることにも気づかされる。少なくとも、自分がNGO関係者だと思われた日には、

「どうしようもなく苦しいんだ」というセリフしか返ってこない。そこで、研究者は、「ありのまま」の自分を披瀝する。しかし、ありのままの自分を披瀝した研究者に対して、彼らが発したセリフが、果たして、彼らの「ありのまま」の姿を語っているのだろうか。そのセリフでさえ、研究者という人物に協力するためのセリフではないのか。そこには、協力を求める—協力するという相互作用が進行してしまう。その協力をめぐる相互作用の持続もまた、決して容易ではない。

本章では、このような現象——研究者と対象の間に一線を引くことのできない現象——には、自然科学とは異なる、もう1つの科学が必要になることを主張する。その、もう1つの科学こそ、人間科学である。では、人間科学とは、いかなる科学か。それを述べるためには、まずもって、自然科学の基本を再確認しておかねばならない。

第2節 自然科学と人間科学

1 自然科学の基本

自然科学が対象とする事実は、次に述べる2つの特徴を持っている。それらは、自然科学を研究する者にとって、あるいは、自然科学を学ぶ者にとって、あまりにも自明の特徴である。

第1に、自然科学が対象とする事実は、自然科学が発見する前から存在していた事実である。ただ、発見される前は、だれも、その事実を知らなかっただけのことである。だれも知らなかったけれども、実は、存在していた事実を発見すること、これが、自然科学の発見である。例えば、DNAの二重らせん構造は、1953年、ワトソンとクリックという2人の生理学者によって発見された。しかし、DNAは、ずっと昔から、二重らせん構造をしていたのだ。ただ、人間が、それを知らなかっただけの話である。その、だれも知らなかった、しかし、存在していた事実が、ワトソンとクリックによって発見されたわけである。

第2に、自然科学が対象とする事実は、その事実が発見され、広く知られるようになったからといって、その事実自体が変化してしまうことなどありえない。つまり、事実が発見されたがために、事実が事実でなくなるといったことはありえない。DNAの二重らせん構造が発見され、教科書に書かれるようになったからといって、急に、DNAが三重らせん構造や四重らせん構造に変化してしまうなど、もはや、悪い冗談としか言いようがない。

このように、自然科学は、人が知ろうと知るまいと存在している事実を対象にする。言いかえれば、人が知る知らないとは無関係に存在している、自然のあるがままの姿、本来の姿こそ、自然科学にとっての事実である。

自然のあるがままの姿、本来の姿を発見しようとするならば、その、あるがままの姿を壊さないよう注意しながら観察する必要がある。もちろん、観察対象に、ある程度の操作を加えることもある——観察対象に測定機器を装着した上で観察する、観察対象に実験的操作を施した上で観察する、など。しかし、いかに操作を加える場合にも、その操作は必要最小限の操作に限られる。測定機器の装着によって、本来の姿が変化してしまうような事態、必要以上の実験的操作によって、本来の（変化の）姿が歪曲されてしまうような事態は、慎重に回避されねばならない。ましてや、観察者の願望によって観察結果が左右されることなど、あってはならないことである。

こうして、自然科学では、観察対象と観察者の間には、明確に一線が引かれることになる。そして、観察対象を一線の向こう側に据え、観察者は、一線のこちら側から、自らの主観をまじえることなく観察しなければならない。これが、自然科学における観察の基本である。前節の横断歩道の観察は、この基本を忠実に守っている。

2 もう1つの科学——人間科学

自然科学が、われわれの知的世界を豊かにしたことは、改めて言うまでもない。自然科学は、われわれが知らなかった、しかし、存在していた事実を、次々に発見してきたし、今後も発見しつづけるだろう。

しかし、先に述べた自然科学の基本が通用しない現象もある。つまり、観察者と観察対象の間に一線を引いて、両者を分離することが不可能な現象である。そのような現象では、観察者が好むと好まざるとにかかわらず、観察者と観察対象の間に相互作用が生じてしまう。言いかえれば、観察者と観察対象による共同実践が進行してしまうのである。

前節で紹介した、スーダンにおけるフィールドワークは、まさに、研究者と研究対象による共同実践である。なにしろ、何も言わなければ、「援助—被援助」の共同実践が進行してしまう。研究者は、自らの実態調査が学術研究であることを訴え、「学術研究の推進—それに対する協力」という共同実践に持ち込もうとする。しかし、現実に行進したのは、「無益だが無害でもある不可解な行為—それに対する協力」という共同実践であった。

このような現象では、観察者が手にする事実も、共同実践を成立基盤とする。事実は、共同実践の中で生まれ、生まれた事実は、共同実践の対象となる。言いかえれば、事実は、共同実践の当事者（研究者と研究対象）にとっての事実である。その意味で、事実は、当事者たちが、その事実を知っているからこそ、事実となる。この点において、当事者が知ろうが知るまいが存在する、自然科学の事実とは、決定的に異なっている。

もう一度、スーダンでのフィールドワークを見てみよう。もし、「援助—被援助」の共同実践が進行してしまうと、極限的な貧困と病状という事実が生まれてしまう——研究者が目撃した、NGOスタッフにとっての事実のように。そうかといって、「無益無害の不可解な行為とそれに対する協力」という共同実践から生まれた事実が、ありのままの事実——研究者や研究対象が知る前から存在していた事実——とは限らない。確かに、NGOスタッフが手にした事実ほど、意図的な歪曲はなされていないだろう。しかし、難民の中だけでの実践、あるいは、難民の家族内部での実践から生み出される事実とは、かなり異なる事実であると考えの方が自然であろう。

観察者と観察対象の間に一線など引けない現象、したがって、両者の間に共同実践が進行してしまう現象は少なくない。例えば、経済予測について考え

てみよう。観察者（経済学者）は、観察対象（国民の経済活動）を観察し、その実態を把握し、経済動向を予測する。ここで、仮に、ある経済学者が、今後、景気は悪くなると予測したとしよう。また、その予測が、マスコミで広く報じられたとしよう。

1つの可能性として、企業は、景気の悪化による消費の冷え込みをみこして、早々、生産を抑制、一方、消費者の方も、所得が増えない、あるいは、減少することをみこして、財布のひもをひきしめるかもしれない。そうすれば、実際に、景気は悪くなる。予想が当たったわけである。しかし、予想的中は、観察者の実態把握や、予想の根拠が正しかったことを意味しない。観察者（経済学者）の予測を観察対象（国民の経済活動）が知る（織り込み済みとする）ことによって、観察対象が、予測の方向に変化し、その結果、予測が的中してしまったにすぎない。このような現象を、社会学者マートンは、「予言の自己成就」と呼んでいる。

逆の可能性もある。企業は、景気の悪化による消費の冷え込みを恐れ、生産コストの削減、製品価格の値下げに努めるかもしれない。もし、多くの企業が製品価格を切り下げ、物価が安くなれば、消費者は購買意欲をそそられ、景気は悪くならないかもしれない。今度は、予測がはずれたわけである。しかし、再び、予測がはずれたのは、観察者の現状把握や、予測の根拠がまちがっていたからとは言えない。先の予測が的中してしまった場合と同じく、観察者（経済学者）の予測を観察対象（国民の経済活動）が知る（織り込み済みとする）ことによって、観察対象の方が変化し、その結果、予測がはずれてしまっただけの話である。

重要なことは、観察者が発見した事実を観察対象が知ると、観察対象が変化してしまうということである。いかに観察者と観察対象の間に一線を引き、両者を分離しようとしても、それは不可能なのだ。このようなことは、自然科学では、まったく想定されていない。人間の遺伝子配列が発見され、その事実を人間が知ることになったとしても、遺伝子配列が変化してしまうことなどありえない。

経済予測の例における観察者と観察対象の間には、単に、両者の間に一線を引けないという関係以上の関係がある。そもそも、観察対象が、予測を聞いて、生産・消費行動を変えるのは、観察対象が予測を求めているからである。経済活動には、予測が必要である。何をどれだけ生産するかを決定するには、市場の動きを予測しなければならない。値のはる商品を、今、買うべきか、もう少し待つべきかを決めようとするれば、これまた、今後の市場価格を予測しなければならない。そして、このような経済予測に対する生産者と消費者のニーズに応じて、経済学者は、今後の経済動向を予測する。

つまり、経済学者（観察者）は、生産者・消費者（観察対象）とともに、経済活動という共同の実践に参加しているのだ。経済学者の予測は、その共同の実践の中で発せられた一言である。日頃の会議（という実践）の中で、ある発言が全員の意見を変えることがあるように、経済活動という共同の実践の中で、経済学者の予測が経済活動を変えても、何ら不思議はない。むしろ、観察者の予測による観察対象の変化は、観察者と観察対象が共同の実践を行なっていることの証拠でさえある。

以上、スーダンのフィールドワークと経済予測を例に引きながら、研究者と研究対象の間に一線を引けない現象——したがって、両者による共同の実践が進行してしまう現象——の存在を指摘した。いわゆる人文・社会科学が取り組んでいる現象の多くは、この種の現象である。しかし、従来、この種の現象に対しても、自然科学のスタンス——研究者と研究対象の間に一線を引くスタンス——で取り組まれることが多かった。その根底には、科学を自然科学と等置する前提があった。

そもそも、科学という営みは、徹底的な言説化へのこだわりにおいて、他の営みから区別される。決して、行間に語らせるのではなく、日常言語、数学その他の記号言語を用いて、徹頭徹尾、言説化していくこと——ここにこそ、科学という営みの特徴がある。そうであれば、一線の向こうの対象を、一線のこちら側から徹底的に言説化していくのは、科学の1つの流儀ではあっても、決して、それのみが科学ではない。

研究者と研究対象との間に一線など引けないこと、研究者と研究対象による共同の実践が進行してしまうことを織り込み済みにした上で行われる言説化もありうるはずである。いや、さらに前向きに、研究対象（当事者）との共同の実践を意図した上で行われる言説化も、あってしかるべきである。そのように、研究対象との共同の実践を前提ないし目的にする言説化の営みを、人間科学と呼ぶことにしよう。

もはや、科学＝自然科学ではない。もう1つの科学、すなわち、人間科学もある。科学＝自然科学＋人間科学である。では、人間科学の現場、とりわけ、人間科学におけるフィールドワークの現場はいかにあるべきか。

第3節 人間科学のフィールドワーク

1 ローカルな共同の実践

人間科学では、事実は、共同の実践の中から生まれ、共同の実践の中に編み込まれていく。人間科学は、共同の実践のための科学である。研究者とフィールドの人々は、共同の実践を行う。したがって、フィールドの人々は、単なる研究（観察）対象ではなく、当事者と呼ぶべきだろう。

研究者と当事者の共同の実践は、必ずしも平坦な道のりではないだろう。双方の主張が食い違い、激しく対立することがあるかもしれない。しかし、対立を経験しながらも、共同の実践が一段落し、当事者と研究者が、実践の記録とそこでの思考を、共同のメッセージとして発信できることもある。この当事者と研究者による共同メッセージこそ、人間科学の知識である。

共同の実践は、特定の時期（時代）に、特定の場所で、特定の人々によって行われる。もちろん、時期の長い短い、場所の広い狭い、人々の多い少ないは、さまざまである。しかし、そのような違いはあっても、共同の実践は、限定された時期に、限定された場所で、限定された人々によって行われる。人間科学の知識は、基本的に、限定された時期と場所における限定された人々による共

同的实践，つまり，ローカル（局所的）な共同の实践の中から生まれる。

一方，自然科学は，すでに存在していたけれども，人間が知らなかった事実を発見する。その事実，場所を超えて，時代を超えて妥当するユニバーサル（普遍的）な事実である。つまり，自然科学は，普遍的事実を探求する科学である。普遍的事実を探求するには，事実についての知識が普遍的に正しいことを，実験や観察によって実証しなければならない。したがって，自然科学の目的は，普遍的事実の「実証」だと言える。それに対して，人間科学の目的は「実践」，共同の实践である。

人間科学の目的が実践であるからといって，データ収集や観察が人間科学にとって不要だなどというわけではない。データ収集や観察は，人間科学にとっても非常に重要である。しかし，人間科学におけるデータ収集や観察は，あくまでも共同の实践のためのものである。それに対して，自然科学におけるデータ収集や観察は，普遍的事実を実証するためのものである。自然科学のデータや観察結果は，場所を超え，時代を超えて妥当する事実（現象）の「標本（サンプル）」である。

人間科学のデータ収集や観察は，ローカルな共同の实践の中で，その共同の实践のために行われる。共同の实践を行おうとすれば，現状をよく観察しなければならないのはもちろんである。必要ならばデータも集めなければならない。現状のみならず，過去のいきさつや歴史について，よく調べてみる必要性も出てくる。あるいは，将来について，予測やシミュレーションを試みる必要がある場合もある。このように，人間科学にとっても，データ収集や観察は重要である。しかし，人間科学のデータ収集や観察は，あくまでも，ローカル（局所的）な現状，過去，将来を把握するためのものである。決して，場所を超えて，時代を超えて妥当する普遍的事実を発見するためのものではない。

自然科学は，現在を理解するに当たって，過去遡及的に「原因」を解明し，その原因の結果として現在を理解する。しかる後に，諸前提の大枠に変化がなければ，過去から現在に至る原因—結果関係を未来に外挿する。この意味で，自然科学は，第一義的には，過去遡及的（バックワード）な性格をもつ。

これに対して、人間科学は、現在を、未来志向的に、「目的因」への通路として位置づける。そして、あくまでも目的因に向かっての運動のために、現状の詳細、および、過去から現在に至った道のりが、社会的に構成される。この意味で、人間科学は、第一義的には、未来志向的（フォワード）、ないし、価値志向的な性格をもつ。われわれが、工学に未来開拓的な性格を感じるのは、工学には、すでにして、人間科学的要素が含まれているからである。工学は、人工物についての自然科学という側面と、人間科学としての側面を併せ持っている。

2 1次モードと2次モード

ローカルな現状、過去、将来を把握し、その把握に基づいて問題解決に取り組む段階を、共同実践の1次モードと呼ぶことにしよう。この1次モードでは、データ収集や観察も必要になる。また、研究者は、さまざまな概念や理論を持ちこむ。

重要なことは、1次モードの共同実践は、必ず、ある前提、しかも、気づかざる前提の上に立った実践である、ということである。「気づかざる」というところが重要である。自分たちが前提にしていることを、徹底的に洗い出し、考えぬいたとしても、考えついた前提のそのまた根底に、必ず、「気づかざる前提」が存在している。言い方を変えれば、気づかざる前提に立たない共同実践など、そもそも不可能である。気づかざる前提に立って初めて、共同実践を行うことが可能になる。

ところが、共同実践が進行するうちに、それまでの実践の根底にあった「気づかざる前提」に気づくことがある。この「気づかざる前提」に気づく段階を2次モードと呼ぶことにしよう。「あっ、そうか。今まで、そういう前提に立っていたのか」と、それまでの（1次モードの）前提に、過去形で気づくモードである。こうして、2次モードを経て、新たなる1次モードに入っていく。

新たなる1次モードでは、現状、過去、将来の把握の仕方が、前の1次モー

ドとは異なってくる。また、前の1次モードで行なった共同実践の意味あいも異なってくる。しかし、今回の1次モードの共同実践もまた、気づかざる前提——もちろん、前回の気づかざる前提とは違うけれども——に立っている。その気づかざる前提に気づくときには、新たなる2次モードに入っていく。

人間科学の現場は、1次モードと2次モードの繰り返し、1次モードと2次モードの連続的交替運動である。この2つのモードの交替運動は、小さな（微視的な）交替運動と大きな（巨視的な）交替運動に分けることができる。まず、微視的な交替運動が、日常的に進行している。小さな気づき、小さな発見は、すべて、1次モード→2次モード→（新たなる）1次モードという交替運動である。もちろん、この場合には、気づかざる前提に気づいたという感覚は伴わないし、気づかざる前提が大きく変化するわけでもない。しかし、いかに小さな変化ではあるにしても、気づかざる前提は、必ず、変化している。特に前提が変化したという感覚はなくとも、現状、過去、将来の事実を徹底的に調べ、実践の対象としていくことによって、実は、気づかざる前提の方も、徐々に変化しているのである。この微視的な交替運動が数多くなされるところに、大きな（巨視的な）交替運動に向けてのエネルギーが蓄積されていく。

大きな（巨視的な）交替運動の場合には、2次モードに入ったとき、まさに、気づかざる前提に気づいた、という感覚が伴う。「そうか、自分たちは、そう思い込んでいたのだな（そういう気づかざる前提に立っていたのだな）」と、目の上の鱗が落ちるような感覚を覚えることもあるだろう。このような大きな交替運動が生じると、それまでの（1次モードの）実践や、その基礎になっていた現状・過去・将来の把握が大きく変化する。

以上、1次モードと2次モードについて述べたことは、人間科学のみならず、自然科学にも当てはまるように見える。確かに、自然科学においても、日ごろの小さな発見、あるいは、新奇な発見をきっかけに、おおもとにある基礎理論（前提）が改訂されてきた。そして、基礎理論が改訂されると、従来の多くの知見が、改訂された基礎理論の上に再編成される。このプロセスは、人間科学について述べた、1次モード→2次モード（基礎理論の改訂）→新たなる1次

モードの交替運動と同じように見える。

しかし、自然科学では、このような基礎理論の改訂を続けることによって、普遍的な事実に接近できるという大前提がある。逆に言うと、普遍的な事実に接近していくためにこそ、基礎理論の改訂がなされるのである。一方、すでに述べたように、人間科学は、普遍的な事実を追求する科学ではない。人間科学は、ローカルな共同実践のための科学である。1次モードの共同実践が、2次モードを経て、新たな1次モードの共同実践に入ることによって、当事者や研究者は、自らの実践や、そのための現状・過去・将来の把握に対して確信を深めていこう。しかし、そのことは、普遍的に妥当する事実（時代や社会を超えて万人に妥当する事実）を手にするを意味しない。

3 目的と価値観

実践には、必ず目的がある。また、実践は、必ず何らかの価値観を前提にしている。そうであれば、実践の中から生まれる人間科学の知識にも、何らかの目的・価値観が前提になっているはずである。さらに言えば、人間科学の知識は、その知識の前提となっている目的や価値を共有する人々の実践にとってこそ、意味ある知識である。

一方、自然科学では、特定の目的や価値観によって知識が影響されるなど、もつてのほかである。医学書に書いてある知識は、いかなる目的や価値観を持つ人にも当てはまる。自然科学は、目的や価値観などとは無関係に存在している事実を取り扱う。

それに対して、人間科学は、目的や価値観と分かちがたく結びついている。したがって、ある人間科学の知識を使うということは、その知識の発信者と目的や価値を共有していくことをも意味する。それだけに、人間科学の知識をつくりだす研究者も、人間科学の知識を使おうとする人々も、自らの目的や価値観を問い続けることが必要である。

先に述べた1次モードと2次モードの交替運動は、目的や価値観についても当てはまる。目的や価値観は、常に自覚されているとは限らない。しかし、私

たちの実践は、必ず、何らかの目的や価値と結びついている。その証拠に、自らの目的や価値観とかげ離れた人に出会うと、ショックを受けたり、場合によっては、感銘を受けたりする。

当事者も、研究者も、自覚することなく、特定の目的や価値観に縛られていることが多い。そのような場合、当事者や研究者に、自分を縛っている目的や価値観を気づかせることも人間科学の役割である。「あっ、そうか、自分（たち）は、そういう目的・価値観に縛られていたのか」、「そうだとしたら、もし、目的や価値観を変えれば、明日に向かって、こういう一手もあるじゃないか」という具合に。

4 ローカルからインターローカルへ

共同の実践は、特定の人物（当事者と研究者）によって、特定の場所、特定の時代（時期）に行われる。このような限られた範囲の人物が、特定の場所で、特定の時代に行なう共同の実践を、ローカル（局所的）な実践と呼んだ。このローカルな共同の実践についての共同メッセージから、人間科学の知識が生まれるのだった。

ローカルな共同の実践についての共同メッセージは、特定の人物、特定の場所、特定の時代に彩られた生々しい実践の記録である。生々しい記録は、それなりに人の心をうつものであるが、同時に、他の場所、他の時代の他の人々の実践に結びつきにくいのも事実である。他の人が参考にしようと思っても、「あの人物だったから、あの場所だったから、あの時代だったから、できたのだ」と思わざるをえない。

そこで、生々しい記録を、ちょっとだけ抽象化してやる必要がある。つまり、ちょっとだけ一般的な概念を使って、直接の当事者ではない人にも理解できるようにするのである。この抽象化の作業も、研究者と当事者が共同して行う。おそらく、研究者の方が、「こういう概念が使えるのではないか」と提案する機会が多いだろう。研究者は、その概念について、かみくだいてかみくだいて、わかりやすく説明しなければならない。また、当事者の方も、決して研究者の

言いなりになってはいけない。自分（たち）の実践が、その概念で的確に表現されるのか、また、その概念で自分（たち）の実践をメッセージにしてよいのか、徹底的に考え、研究者とも議論しなければならない。こうして、当事者と研究者の共同による人間科学の知識が生まれ、発信される。その知識は、特定の人物（たち）が、特定の場所、特定の時代に行った実践、つまり、ローカル（局所的）な実践を、ちょっとだけ抽象化した知識である。

こうして、あるローカルな場所・時代から発信された知識は、抽象化のおかげで、他のローカルな場所・時代に伝播していく。あるローカルな場所・時代から発信された知識は、他のローカルな場所・時代にいる人（たち）によってキャッチされ、実践の参考にされるかもしれない。そうなれば、地点と時点を異にする2つのローカルな場が結びつくことになる。言い換えれば、2つのローカルな場の間にも、共同の関係、共同の実践が生まれるのである。つまり、ローカルな知識が、インター・ローカルな知識になるわけである。こうして、共同の実践の輪が広がっていく。

もちろん、キャッチした知識をそのまま使うとは限らない。批判も結構である。ちょうど、1つのローカルな場所・時代での実践の中に、当事者と研究者の対立があったのと同じように、異なる地点・時点の間の共同の実践にも批判や対立はありうるはずである。むしろ、そのような批判や対立を通じて、批判する側、される側の共同が深まり、ローカルなメッセージ（知識）が、より広範な人々のメッセージ（知識）へと鍛えられていく。

5 研究者の役割——理論

研究者と当事者の共同の実践において、研究者が、研究者として、なすべき貢献は、つまるところ、理論に基づく貢献であろう。理論に基づく貢献を除外すれば、研究者としての貢献と研究者以外の人の貢献に、本質的な違いはないはずである。

ここに言う理論の範囲は広い。個別の現象、個別の実践についての理論もあるだろうし、グランドセオリー、メタ理論の類もあるだろう。また、データ解

析、モデル構成など、研究手法についての理論もあるだろう。また、いかに人間科学的なフィールドワークであっても、自然科学の理論や概念も必要になる。

すでに述べたように、ローカルな共同実践は、1次モードと2次モードの連続的交替運動として進行する。理論は、この交替運動に寄与するものでなければならない。まず、1次モードにおいては、理論には、現状と過去の把握、将来の予測に役立つこと、および、実践の指針や計画を立てることに寄与することが求められる。次に、1次モードにおける「気づかざる前提」を常に問い続け、2次モードへの進展を促進することも求められる。さらには、明示化された「気づかざる前提」に基づいて、先行する1次モードの認識や実践を再定位し、新たな1次モードへの進展に寄与することも求められる。

理論は、ローカルな共同実践の記録や、そこから紡ぎ出された言説を、抽象化、一般化することにも寄与しうる。理論によって抽象化、一般化された記録や言説は、他のローカルな共同実践への伝播力を獲得する。また、どこかの共同実践から発信された抽象的な言説を、自らの共同実践のために具象化するのにも、理論は寄与しうる。こうして、ローカルな共同実践が、インターローカルな共同実践へと拡大する可能性が開かれる。

最後に、人間科学の目的が、当事者と研究者の共同実践だからといって、すべての研究者が、当事者と直接的な共同の関係になければならないなど言っているのではない。むしろ、当事者との距離については、遠近さまざまな研究者が必要である。書斎の理論家も要れば、広い歴史的・空間的視野から理論を展開する研究者も要る。ただ、自然科学の理論家が、どこか末端で、試験管を振って実証する同僚を念頭に置いているのとは対照的に、人間科学における書斎の理論家や広い歴史的・空間的視野に立つ研究者は、どこか末端で、現実の当事者と共同する同僚を念頭に置いておく必要があるだろう。

第4節 フィールドワークの実例——第2, 3, 4章の序文

以上、本章では、人間科学的フィールドワークの5つの特徴として、(1)

当事者と研究者のローカルな共同実践であること、(2) 1次モードと2次モードの交替運動として進展すること、(3) 特定の目的と価値観が存在していること、(4) インターローカルな共同実践へと広がりうること、(5) 理論的貢献が研究者の役割であることを述べた。本章に続く第2, 3, 4章は、そのようなフィールドワークの実例である。

いずれのフィールドワークにも、人間科学的フィールドワークの5つの特徴が現れている。もちろん、個々のフィールドワークに先立って、5つの特徴が、要件として与えられていたわけではない。5つの特徴は、個々のフィールドワークを行いつつ、自らのフィールドワークのあり方を自問自答することを通じて、徐々に、整理されてきたものである。したがって、5つの特徴が、等しく、個々のフィールドワーク(の報告)に反映されているわけではない。しかし、いずれのフィールドワークにおいても、5つの特徴のいくつかは、はっきりと見てとることができるだろう。

まず、第2章は、鳥取県智頭町という過疎地域において地域活性化運動に取り組む当事者と、それに共鳴する研究者によって行われた共同実践の報告である。当事者と研究者の共同実践の報告であるからには、当事者のみならず、研究者、とりわけ、私自身についても記述されなければならない。研究者自身について、どのようなスタイルで記述すればよいのか——正直に言って、これは難しい問題である。この点に関して、第2章では、2つの試みを行った。その1つとして、活性化運動の経緯を紹介した第2節の節々に、私とフィールド／当事者の関係についての記述——「私と智頭(その1-4)」——を挿入した。また、もう1つの試みとして、第3節に、私を含む研究者と当事者の対話場面を収録した。

研究者が提起した概念や理論による、1次モードから2次モードへの移行、とりわけ大きな移行については、次の2カ所に顕著に現われている。第1は、活性化運動の一環として建設されたログハウス村が、地元集落の住民に与えたインパクトを論じた部分(61-64頁)である。そこでは、「総事」という古くからの言葉を掘り起こし、活性化運動の成果が総事として土着化されつつも、そ

の総事自体の変容が促されつつあることを論じた——「新しい総事」は、その後、活性化運動に携わる人たちのポキャブラリになった。第2は、活性化運動の行政への浸透、さらには、十数年におよぶ活性化運動の推移全体を、「贈与と略奪」という理論枠組みで読み解いた部分である。この読み解きは、研究ベースの言説（第4節）になるのみならず、当事者とのディスカッション（第3節）の俎上にものせられた。

智頭でのローカルな共同実践は、確実に、インターローカルな共同実践として広がりつつある。郵便配達職員による独居高齢者のケアシステム、「ひまわりシステム」は、すでに、全国180以上の自治体に導入されている。また、集落単位の住民自治システム、「ゼロ分のイチ村おこし運動」を視察に訪れる関係者も多い。今後は、ローカルな共同実践の産物をインターローカルな実践へと広げる、そのプロセス自体をも研究のテーマにしたい——もちろん、より広範な当事者との共同実践を通じて。

次に、第3章は、「住民による住民のための住民の医療」を展開してきた当事者（医療関係者と住民）との共同実践の報告である。その住民運動としての地域医療は、終戦直後、京都市西陣の貧困の中に誕生し、まさに、医療関係者と住民の固いスクラムによって育まれた。世の動きを、少なくとも10年は先取りするかたちで、高齢者医療や在宅医療にも取り組んだきた。その運動は、今後の地域医療のあり方を考える上で、貴重なメッセージ性を有していた。

しかし、その運動は、衰退の危機に瀕していた。今、来りこし道をメッセージにしておかねば、すべては雲散霧消してしまう。それは、50年にわたって運動にかかわってきた人たちに共通の思いだった。彼らと研究者（私）の共同実践が始まった。住民組織「西陣健康会」の50年をメッセージ化して、発信するという共同実践である。第1節には、研究者自身が、その共同実践に至った事情を述べた。第2節は、まさに、その50年である。「役柄—役殻」概念によって、若干の理論的貢献も試みた。

今、西陣の共同実践は、京都府美山町の共同実践へと受け継がれつつある。美山町では、行政（町役場）が設立した医療施設で、住民参加の医療を行

う「公設・住民営」の新しい地域医療システムがつくられつつある。そのチャレンジは、まだ始まったばかり。多くの障害を乗り越えていかねばならない。西陣の50年——いわば「住民設・住民営」の50年——は、運動論的にも、また、精神的にも、美山のチャレンジにとって大きな糧となっている。しかし、同時に、美山のチャレンジの中で、西陣の50年が相対化される面も出てくるだろう。それは、異なる時代と地域をむすぶインターローカリティであるとともに、西陣50年という大きな1次モードから美山という2次モードへの移行のようにも思われる。

最後の第4章は、1995年1月17日早朝に起こった阪神大震災に端を発するフィールドワークの報告である。テーマは、災害に特化したボランティア団体、さらにはボランティアの存在を前提とする市民社会の構築である。この章は、研究者の文章（第1節）と当事者の文章（第2節）とで構成される。

まず、第1節では、自ら被災した著者（渥美公秀・渡邊としえ）が、震災を契機に設立された、特定非営利活動法人「日本災害救援ボランティアネットワーク」（NVNAD。当時は、西宮ボランティアネットワークNVN）で行ってきた共同の実践の報告である。彼らは、被災者の救援、被災地の復興という目的をもち、5年間にわたって、被災地というローカルな場で当事者と共に実践を行ってきた。第1節には、彼らが、「ボランティアを含んだ災害救援の現場では何が起きているのか」、「平常時には災害ボランティアとしてどんな活動をしていくのか」「そもそもなぜボランティアは災害救援に駆けつけるのか」といった問いを、いわばライブで考えてきた姿が描かれている。

災害救援、災害ボランティアに関する1次モードと2次モードの交替運動についても、現場からの問いと研究者が吐いた言説とを対比させながら記述されている。研究者の役割が、理論的貢献にあることを肝に銘じ、理論的に考えたことを当事者にどのように伝えるか、そのことを日々、歯を食いしばって考え抜いてきた姿がある。

震災直後、著者らは、研究者としてよりも、まず1人の人間として、1人の救援ボランティアとして避難所で活動を始めた。NVNとの出会いにより、研

究者としてなすべきことは何なのかという問いを、突きつけられてきた。もちろん、彼らにのんびりと問うている暇などなかった。とにかく目の前の救援活動をこなしながら、その場その場で、臨機応変に、研究者として考えられることを精一杯考えるだけであった。共同実践は、スムーズに進む場合ばかりではない。被災者・被災地の役に立っているのかと疑問に思い、「もうやめようか」と思うこともあっただろう。しかし、そんな時、いつも彼らの目に浮かんだのは、震災直後の避難所で、けなげに遊んでいた子ども達の姿であったという。何か自分にできることをしていきたい。そんな“思い”が彼らの共同実践を支えてきた。

第2節では、震災からの5年間、試行錯誤に試行錯誤を重ねた当事者（実古威）が、現在の活動、そこに至った道のり、将来に向けての展望を論じる。阪神大震災のとき、全国から駆けつけた大量のボランティアは、実に多くの文章を残していった——救援とは、ボランティア（活動）とは、コミュニティとは、行政とは、等々について。その文章の中には、単なる記録のレベルを越えて、フィールドワークの論文としての価値を有するものも含まれている。

第2節の著者は、震災直後から現地に入り、数多くのボランティアグループをコーディネートする広域ボランティア組織に身を置き、活動を開始した。また、現在に至るまで、神戸を活動拠点に、ボランティアや被災者による震災の記録を収集し続けるかたわら、復興過程にある被災地の推移を発信してきた。その旺盛な発信活動は、情報収集活動やネットワーク活動とあいまって、中間支援組織という重要な機能を育みつつある。

引用文献

Gaim Kibreab 1990 *The Sudan: From subsistence to wage labor: Refugee settlements in the central and eastern regions*. New Jersey: The Red Sea Press.

Yamori, K. 1998 Going with the flow: Micro-macro dynamics in the macro-behavioral patterns of pedestrian crowds. *Psychological Review*, 105(3), 530-557.

なお、人間科学、とりわけ、人間科学としてのグループ・ダイナミックスについてのわかりやすい解説として、

楽学舎（編）2000「看護のための人間科学を求めて」ナカニシヤ出版
がある。「看護のために」とはなっているが、一般の読者にも違和感なく読んで
いただけるはずである。看護場面の例は、理論を理解するためのよい助けになるだろ
う。

第2章 住民自治の社会システムをめざして

杉方俊夫

第1節 過疎問題とは

1 過疎問題の変遷——「貧しさの中の過疎」から「豊かさの中の過疎」へ

わが国の過疎問題は、1960年代から1970年代前半までの高度経済成長期における、農山村から都市への人口流出によってもたらされた。農山村の過疎問題は、都市の過密問題と表裏一体の関係にある。貧しかった社会における大量かつ急速な人口流出は、農山村の生活基盤を崩壊寸前にまで追い込んだ。安達(1973)は、1960年代当時の過疎地域を次のように描写している。

「人口・戸数の急激な減少によって、集落の道路の補修ができなくなり、自動車の乗り入れができなくなったために、月1回の農協購買車で、味噌、醤油などを買いだめしたり、時々不定期にやってくるかつぎ屋から、鮮度の落ちた魚を高い値段で買わざるを得ない。郵便物や新聞も、集落の一番端の家に一括配達しかされない。火事になっても、消防車が入れない。また、農道も悪化するため、集落の耕境が後退する。村財政の窮乏により、小学校の分校の維持が困難になる。———」

このような「貧しさの中の過疎化」は、国土行政の見地からは、都市における産業発展の陰の部分として、いわば必要悪であるかのようにみなされていた。すなわち、「そういうところに住んでいるから浮かばれないのであって、都市に出てくれば、はるかに幸福になれる。高度成長社会とはそういうものだ。」という認識が、行政には支配的であった(安達, 1973)。

1968年、国民経済審議会が、初めて、このような問題を「過疎問題」と命名し、過疎対策の必要性を主張した。それ以降、一連の3つの過疎法が施行された。すなわち、過疎地域対策緊急措置法（1970年公布・施行）、過疎地域振興特別措置法（1980年公布・施行）、過疎地域活性化特別措置法（1990年公布・施行）という3つの過疎法である。これら3つの過疎法は、いずれも10年の時限立法であり、失効する以前の法律を更新するかたちをとってきた。また、これらの過疎法と連動した全国総合開発計画が策定され、実施された。

一連の過疎対策が始まった1970年代は、ガルブレイス（1960）の言う「豊かな社会」が、日本に到来した時期と符合する。豊かな社会とは、ほとんどすべての人にとって、明日のパンを思い思い、明日の寒さを怖れる必要のない社会という意味である。豊かな社会は、1950年代にアメリカ、1960年代に西欧の多くの国々、そして、1970年代にはわが国にも到来した。それは、人類史的に前人未踏の新しい段階であり、その中でいかに生活すべきかを改めて学習しなければならない社会であった。

豊かさは、過疎地域にも浸透していった。現在の過疎問題は、「豊かさの中の過疎問題」なのであり、1960年代の「貧しさの中の過疎問題」とは性質を異にする。確かに、過疎地域の人口は減少し続けるかもしれない。しかし、1960年代に見られたような、最低限の生活基盤すら崩壊するといった悲惨な様相は呈さない。都会の行き過ぎとも言える利便性には及ばないにしても、都会よりもゆったりとした住居に住み、都会とほとんど変わらない電化製品を持ち、必要に応じて、自動車以最寄りの地方都市までショッピングやレジャーに出かけることもできる。このように、過疎地域に残る住民のほとんどにとって、自らの日常生活に関する限り、生計は成り立ち、一応の経済的ゆとりも保証されている。そのような中で、住民たちは、一抹の寂しさと漠然とした不安を感じつつも、日常的には、さほどの衝撃を感じることなく、過疎化が進行していくのである。

2 行政統計に見る過疎地域の現状

ここで、過疎問題の全国的な現状を、いわゆる過疎白書（国土庁，1993）をもとに把握しておこう。まず、行政上の過疎地域の定義について述べねばならない。過疎地域の定義については、上記3つの過疎法ごとに、少しずつ修正が加えられているが、概ね次の3つの基準に基づいて、過疎地域が指定されている。すなわち、①人口の過度の減少、②人口構成の過度の偏り（具体的には、高齢者比率の過度の増加、若年者比率の過度の減少）、③自治体財政力の過度の脆弱性という3つの基準である。

前述の過疎地域活性化特別措置法に基づいて指定されている過疎地域市町村の数は、1992年4月1日現在、市41団体、町774団体、村384団体の計1,199団体であり、この数は、全国の市町村総数の37%に相当する。これら過疎地域市町村の1団体当たりの平均人口は、6,738人で、全国の1市町村当たり平均人口38,187人の約6分の1である。これらの過疎地域においては、高度経済成長が始まった頃である1960年から1990年の30年間に、人口2万人以上の市町村数が114団体から44団体へと約3分の1に減少、一方、人口2千人未満の市町村数は29団体から123団体へと4倍以上に増加している。

過疎地域においては、単に人口が急激に減少したのみならず、著しい高齢化が進行した。すなわち、過疎地域市町村では、15—29歳の若年者が、上記30年間に60.3%減少し、人口全体に占める割合も13.7%となり、全国の21.7%に対しかなり低くなっている。その裏返しとして、65歳以上の高齢者は、上記30年間に81.0%の増加率を示し、人口全体に占める割合も20.6%と、全国の12.0%に対し大幅に高くなっている。この急激な変化は、仮に、1960年に10—14歳の人口が1,000人であったとすると、その人たちが15—19歳となる1965年には552人に減り、20—24歳となる1970年には323人となる計算になり、大半が流出してしまったことになる。厚生省人口問題研究所の推計によれば、全国の高齢者比率が、上に述べた過疎地域における1990年の高齢者比率の水準にほぼ達するのは2008年である。つまり、過疎地域は、全国よりも約18年先行した高齢化社

会になっていると言える。

過疎地域における産業の現状に目を転じてみよう。まず、就業人口についてみると、1970—90年の20年間に、過疎地域では、総人口の減少（20.2%）と歩調を合わせる形で、就業人口も21.1%減少しているが、これは、同じ期間に、全国では就業人口が18.1%増加したのと対照的である。産業別の特徴を見ると、過疎地域においては第1次産業への依存度が高い。言うまでもなく、第1次産業から第2次、第3次産業へのシフトは全国的な趨勢であり、過疎地域といえども、その例外ではない。しかし、1990年の時点で、過疎地域における就業者に占める農業就業人口の割合は23.1%であり、全国の6.4%を大きく上回っている。また、林業就業人口の割合でも、過疎地域1.4%、全国0.2%、漁業就業人口の割合でも、過疎地域2.9%、全国0.6%というように、過疎地域における第1次産業への依存度の相対的高さを示している。

他方、過疎地域でも第2次、第3次産業のウエートが高まりつつあるが、全国のレベルと比べると、なお大きな格差が存在する。実際、1970—90年の20年間に、全国では、第1次産業就業人口が56.4%減少、第2次、第3次産業就業人口が、それぞれ、15.3%、51.0%増加したのに対して、過疎地域では、第1次産業就業人口が、全国とほぼ同じ57.0%減少したにもかかわらず、第2次、第3次産業就業人口は、それぞれ、22.0%、10.6%の増加にとどまっている。これは、過疎地域においては、第1次産業就業人口の減少を、第2次、第3次産業への転換で吸収しきれていないことを物語っている。

1980年代以降、全国の多くの過疎地域において、自らの住む地域を活性化しようとする試みが見られるようになった。活性化運動の内容は多岐にわたっているが、その活動内容によって、直接的な経済効果を意図した活性化運動と、間接的な経済効果は期待されても、直接的には文化、環境といった領域での活動が志向される活性化運動に分けることができる。前者には、企業誘致による産業の振興、観光資源の開発、レクリエーション事業の展開を通じた活性化が含まれる。後者には、伝統産業や伝統芸能の保護育成、音楽活動や演劇活動等の文化活動を通じた活性化が含まれる。

全国で展開されている過疎地域の活性化は、その内容のみならず、活性化を推進する主体によっても分類することができる。まず、地域活性化の主体が行政体である場合と一般住民である場合に分けることができる。一般住民の場合は、さらに、伝統的有力者の場合とそれ以外の住民の場合に分けることができる。これまでの地域活性化運動を通覧すると、行政が活動の推進役になるケースが多いことが、地域リーダーに対するアンケートの約半数が行政職員からの回答であったことからうかがえる（全国町村会・町村研究フォーラム、1993）。これに対して、伝統的有力者ではない一般住民が活性化運動を開始するパターンも増えている。このような住民グループの熱意が、行政や伝統的有力者を動かし、地域の活性化に成功した事例も報告されている（例えば、田村、1987）。

本章では、鳥取県八頭郡智頭町における約15年間にわたる活性化運動を取り上げる。この智頭町における活性化運動は、直接的な経済効果を意図したものではないこと、および、行政でも伝統的有力者でもない一般住民を中心として展開された活動であることを特徴とする。しかし、それまで力を持っていなかった住民グループが、新たな力を持ち、地域を変革することは、いかにして可能となるのだろうか。

第2節 智頭町におけるフィールドワーク

1 智頭町

鳥取県^{やづ}八頭郡^{ちづつ}智頭町は、鳥取県東南部に位置する、人口10,371人、面積22,461ヘクタールの中山間過疎地である（智頭町役場地域開発課、1996）。四方を山に囲まれ、町の中央を流れる千代川^{せんがい}に向かっていくつかの支流が流れ込んでいる。町の95%以上を山林原野が占め、昔から、杉材を中心にした林業が大規模に行われてきた。しかし、1960年代に著しく進行した農山村から都市部への人口流出に加え、折からの木材不況も重なり、林業は見る間に衰え、町の活力は著しく低下していった。この結果、1955年には15,000人近くあった町の人口



図2-1 智頭町の位置

も、およそ40年の間に、10,000人へと、およそ3分の2に減ってしまった。

2 私と智頭(その1) —— 出会い

「まさにミラクル。2人の好対照なリーダーがいて——」ふとしたきっかけで1年前から共同研究を始めた岡田憲夫先生の熱っぽい言葉に動かされるまま、1992年11月7日、後輩の車で智頭町に入った。しかも、智頭町でもっとも山深いところにある集落、八河谷集落やこうだに。冷たい小雨まじりの風。掲示板の地図を見ようと車から降り立った身体が、思わず震え上がった。その掲示板が、「杉の木村」という地域活性化のモニュメントとして創出されたログハウス村の入り口だとわかったのは、翌年(1993年)夏のことだった。

合宿セミナーのようなものとは聞いていた。いざ、杉の木村の現地に着くと、もう真っ暗な中、数人の人がトーテムポールを彫っていた。何か異様な光景だった。しばし時間が経って、もうもうと煙が立ち込め、大勢の人が肩を寄せ合って座っているログハウスに案内された。皆、酒を飲みながら、料理をつまみ



山で囲まれた智頭町，谷筋にそって集落が開けている

ながら，わいわい議論していた。部屋の中央にある炉で，おいしそうな牛肉を焼いては，皆にふるまっている人がいた。私も，すぐに，ご相伴にあずかった。その人物が，岡田先生から聞いた「2人の好対照なリーダー」の1人，寺谷篤氏だった——「そうか，先日来のファックスの主は，この人だったのか」。

会が終わりにさしかかった頃，全員がぐるりと円座に座った。寺谷氏の司会で，1人1人が立ち上がり，自らの思うところを発言した。なぜこの塾に参加したのか，塾で学んだこと，経験したこと，日ごろ考えていること，など。私も何かしゃべったはずだが，まったく覚えていない——多分，つきなみな挨拶でもしたのだろう。驚いたことに，参加者20数人のうち，半数は，大学の研究者やプロの地域プランナーだった。残る半数は，寺谷氏と行動を共にしている，あるいは，その行動に関心をもつ智頭町在住者や町外からの参加者であった。一応のエンディングの後も，深夜まで議論が続いた。私も，何人かの人と話をした。「こうやって，都会から先生たちが来てくれ，ひざを突き合わせて話ができる。こんな楽しいことはない」という青年の言葉が耳に残った。宿泊用の



杉の木村の溪流

ログハウスで布団に入ったのは、2時をまわっていた。

翌日は、3日間の塾の最終日だった。眠い目をこすりながら、杉の木村の中央にあるログハウスに行くと、もう朝食が始まっていた。このパンは、自分たちが訪問した南小国町（熊本県）の人たちが焼いて送ってくれたという解説や、おかずの山菜の話の聞きながら、朝食をご馳走になった。

朝食が終わると、鳥大^{とりだい}ハウスという名のログハウスに集合して、最終日のスケジュールが始まった。鳥取大学の教官有志の出資によって建てられたログハウスだそう。ある地域プランナーが講師を務めた。話の詳細は、もう忘れてしまったが、なかなかおもしろい話だった。しかし、もっとおもしろかったのは、研究者や地域プランナーのような先生の役割にある人間と、それ以外の生徒の役割にある人間が、まったく同じ目線に立っていること、いや、ややもすると、両者の役割が逆転しているかのように思える瞬間さえあることだった。しかし、実は、そのような瞬間は、意図的な試みだった——その試みが、「先生徒（=先生+生徒）」という言葉で呼ばれ、自覚的になされていたことを、翌年の塾で知った。話を聞いているうちに、今年の塾のテーマが「憩住」であることがわかった——もちろん、その意味するところは、皆目わからなかった。いよいよ閉会というとき、翌春4月の「耕読会」の講師をしてほしいと依頼された。耕読会とは、講師が選定した本を読み、講師を中心にディスカッションする会で、年4回開催されているらしい。何のことやらよくわからなかったが、熱意と迫力におされて引き受けてしまった。

以上が、私が初めて智頭に足を踏み入れたときの話である。都市部で育った私にとって、それは、自分が研究者であることを意識しつつ田舎を訪れた初めての経験だった。人並みに、村おこしという言葉は知っていた。私が育った福岡県の隣県、大分県の1村1品運動、同じく大分県湯布院のまちづくりなどを耳にはしていた。しかし、村おこしも、過疎地域も、私の研究とは別の世界にあった。それから8年。過疎地域活性化運動の現場、智頭にここまで深入りしようとは予想だにできなかった。

明けて1993年の4月上旬、約束した耕読会のため、再び、杉の木村を訪れた。道端には、背丈ほどの雪がかいてあった。雪の中から顔を出したフキノトウがまぶしかった。

耕読会では、一応、1冊の本を選定したものの、主として、自己紹介を兼ね、私自身の専門分野であるグループ・ダイナミックスについて話をした。それまで、企業、学校、病院といった組織の研究をしていたので、大きな組織を動か

すためには、組織を構成する個々の小集団を活性化するのが重要であること、また、創発的な小集団の動きによって、大きな組織に新しい流れを生み出すことができることなどを、私自身の研究を例に引きながら説明した。この話は、「智頭町活性化プロジェクト集団（CCPT）」という、まさに創発的小集団をつくり、地域の体質変革に挑戦している人たちの関心を引いたようだ。

半年前は、右も左もわからなかったが、今度は、少々、ゆとりももてた。また、半年間に仕入れた若干の知識のおかげで、1人1人から聞く話も、前よりは理解できるようになった。それにしても、この熱っぽさは何か、どのようにして形成されたのか。一体、どんな人物が、何をしようとしているのか。組織が活性化するとき、その裏で、命がけとも言える、ものすごいストーリーが展開されるのを見てきていた。きっと、自分が目の当たりにしている、この熱っぽさの裏にも、ものすごいストーリーがあるのではないか。もし、そうならば、ぜひ、そのストーリーを調べてみたい——そんな希望とともに、2回目の智頭をあとにした。

その希望は、寺谷氏はじめCCPTの方々の協力を得て、数ヵ月後の夏にかなえられた。1993年7月、「2人の好対照なリーダー」をはじめとするCCPTのメンバー10数人から話を聞くことができた。後述するように、2人のリーダーが活性化運動に立ち上がったのが1984年。それから、ちょうど10年の時間が流れていた。この10年の運動と自らのかわり、そして、その背景となる村の歴史や現状について、町役場の職員、自営業を営む人、婦人会のリーダー、主婦など、さまざまな人の話を聞くことができた。その貴重な話、それから、寺谷氏によって整理、保存されていた膨大なファイルをもとに、次に紹介する「活性化運動の推移（1984—94年）」をまとめた。

3 たった2人から始まった——活性化運動の推移（1984—94年）

ここでは、まず、（1）智頭町における活性化運動の最初の10年間について、主として、運動の推進主体の立場に立って記述し、（2）そのグループ・ダイナミックスの特徴を考察する。さらに、（3）今度は、直接、活性化運動の

ターゲットとなった集落住民の立場に身を置いて、活性化運動が集落に与えたインパクトに関する記述を補足し、(4) そのインパクトを、再び、グループ・ダイナミックスの観点から考察する。

(1) 活性化運動の推移 (1984-94年)

①核集団となる2人の出会い

ここに紹介する一連の地域活性化運動は、前橋登志行(1984年当時48歳)と寺谷篤(当時36歳)という持ち味を異にする2人の偶然の出会い(1984年)に始まる。まず、出会いに先立つ前橋と寺谷の生い立ちについて簡単にふれておこう。

前橋は、中学卒業後、父親が始めた製材所の手伝いに加えて、炭焼き、山仕事、雑貨品行商に従事した。そのかわら、青年団や消防団の活動にも参加し、バスケットボールや駅伝等に活躍、青年団長、子供会会長、町体育指導員にもなっている。このような青年時代の後、前橋30歳の時、父親が経営する製材所の倒産という苦難が訪れる。しかし、前橋は、この苦難を乗り越え、自らの製材所を起こし、現在に至っている。前橋の製材所は、関西に大口の納入先を持つため、前橋は、頻繁に関西と智頭を往復している。前橋は、製材所経営のかわら、消防分団長、地域の公民館長、小学校PTA会長、町PTA連合会長、地区公民館長、財産区議員、等を歴任、スポーツ、祭り、PTA活動、等に企画力を発揮した。このように、前橋は各種の伝統的地域活動団体の役職についてきたわけであるが、従来、このような役職は、主として、地元の資産家、有力者によって占められてきた。そのような慣行にもかかわらず、資産家や有力者の家系ではない前橋が各種の役職に推されたことは、前橋の人望の厚さと行動力が地元住民に高く評価されていたことをうかがわせる。

一方、寺谷は、高校卒業後、民間企業に1年勤めた後、町内の郵便局に再就職、仕事のかかわら、青年団活動に参加、バスケットボールや演劇に活躍した。また、このころ、NHK「青年の主張」中国地方大会で優秀賞を受賞したり、総務庁第6回「青年の船」に乗船するなど、すでに、行動力と発表力の片鱗を見せている。寺谷は、25歳の時、自らの希望により中国郵政局(広島市)に転



前橋登志行（右）と寺谷篤（左）——1984年，2人が出会い，立ちあがった（2000年7月撮影）

出，中国郵政局在任中，広島郵便貯金会館の運営，岡山郵便貯金会館の施設構想づくり，職員の教育訓練，コンピューター導入等に携わり，企画力，行動力に磨きをかけていった。しかし，転出後5年，突然，肝炎にみまわれ，仕事も思うようにできない焦燥感に駆られる日々が続くようになった。その後，寺谷を故郷の特定郵便局長に迎える話もちあがり，35歳の時，10年間の広島生活にピリオドを打ち，局長として帰郷した。寺谷は，帰郷直後から，広島時代に磨いた企画力と行動力を活かして，周囲の反対をも押し切り，自らの郵便局の業務改革，他の郵便局の職員をも巻き込む勉強会の開催，等を開始した。

前橋と寺谷の偶然の出会いは，智頭町山形地区が鳥取国体（わかとり国体，1985年）の空手会場に選ばれ，智頭町全体が一種独特の興奮に包まれる中で起こった。当時，地区公民館長であった前橋は，国体参加選手および観戦者への

土産品として、智頭町の名産品である杉の間伐材を利用した写真たてを制作中であり、他方、寺谷は、郵便局業務改革の一環として、杉板葉書の制作、商品化を企画中であった。2人の出会いは、寺谷が杉板葉書の制作者を求めて、前橋宅を訪問した時に始まる。2人は、同じ地区の出身でありながら全くの初対面であり、前橋が長らく親しくしていた知人の子どもが実は寺谷であるという関係を知り、2人は驚いたほどであった。2人が初めて出会ってから1週間ほど、寺谷は、仕事そっちのけで連日前橋宅を訪れ、2人は自らの人生や智頭の現状と未来について語り合った。その語り合いの中から、ごく一握りの資産家や有力者に牛耳られるまま、新しい試みの一切を拒絶する旧態依然たる地域の体質に対する不満、そして、この体質を何とか打破しなければならないという熱い思いを共有していった。

②第1期（1984—89年）

幸い杉板葉書や杉製写真たてが好評を博した国体の年（1985年）、2人は、同じく杉を利用した杉名刺の開発に乗り出した。また、翌年に設立される智頭木創舎の準備段階として、智頭木創企画（前橋、寺谷他3名による）を設立、杉名刺に続いて、杉の香はがきを開発、商品化した。1986年には、智頭木創舎が発足し、昆虫はがき、エト遊便などの木の葉書、木づくり絵本（杉板製の絵本）、等の商品を送り出した。

ここで注目すべきは、いわばインフォーマルな地域活動によって得られた物的成果やノウハウをそのまま放置するのではなく、特化された目的遂行のために長期的に存続していくフォーマルな組織を設立し、その中に物的成果やノウハウを定着させていくという方略がとられていることである。杉板葉書、杉製写真たて、杉名刺のいずれにしても、郵便局や製材所の本来の業務とはいわば別建てで、前橋と寺谷を中心とするインフォーマルな活動によって開発された商品である。その商品そのもの、および、商品開発・販売のノウハウを、智頭木創舎という、木工品に特化した企業の中に定着させているのである。この方略は、その後も、各種のイベントの成果や海外交流活動を定着させるために一貫して用いられていくことになる。

杉の持つ優しさがモチーフ

大好評です

杉を使った特産品

植物も人間と同じように体温を持っています。人間と同じように感情を持っています。優しく握すれば優しく応えてくれる植物の温度に直に触れてみてください。

木

の持つ温かき、杉の優しさを生かした特産品があります。町の木であらう杉は、日常生活で様々なアクセントとして、置きながら存在感のある木製品たちを作り出してきました。「智頭木倶楽部」や「智頭ウッドクラフト研究会」といった杉を愛する人の手によって、お茶や茶托、小物入れなどの実用品以外にも、子供向けのおもちゃなど実に多種多様な製品が作り、特産品として多くの人に愛されています。優美で明るく、温かな印象と独特の芳香で親近の心を相ませてくれる智頭杉。この杉の木にこだわり、町づくりをしていく人々の心意気が、こんなやさやかな民芸品からも、ひしひしと伝わってきます。

To further enhance the use of cedar, Chizu has embarked on a plan to promote its use in products associated with one's daily life. Through such efforts as the Society of Wood Crafters and the Chizu Cedar Creative Centre, numerous unique uses for Chizu's cedar have been developed.



12

前橋、寺谷らが実施した「木づくり遊便コンテスト」や「智頭杉『日本の家』

住まいへの新しい扉を開く 智頭杉「日本の家」コンテスト

「村おこし」の大胆な企画として、「日本の家設計コンテスト」を行いました。智頭杉を使った木造住宅の設計コンペを実施し、その中から選んだ優秀作品二点を、設計から施工まで全て請け負うという大がかりなものです。智頭杉の磨き丸太をどこかに必ず使うこと、すべて国産材を使用することを条件とした、全国レベルの設計コンテストです。予想以上



の反響で、質の高い提案をいただき、智頭杉の良さとローコスト住宅が改めて見直されました。

コンテストの成功は、それまで素材として出荷されていた智頭杉に付加価値を付け、ブランド化する計画が大きな一歩となり、智頭町建築事業協同組合の設立へと進展、「杉の町智頭」は活力あふれる町として歩み続けています。

設計コンテスト」は、今や、町役場発行のパンフレットを飾る。

ここまでの活動によって形成された前橋、寺谷の核集団、および、その核集団に協力する少数の人たちは、1987年から1989年の3年間、智頭杉の高付加価値化を目的とする3つのイベントを次々に実現していく。その第1弾は、1987年に行われた「木づくり遊便^{ゆびん}コンテスト」である。このコンテストでは、杉板葉書のデザインが全国から募られた。538件という多くの応募作品が寄せられ、特選入賞他約20点の入賞者とともに授賞式が行われた。コンテストに寄せられたデザインは、女性3名で発足した「智頭ウッドクラフト研究会」の手によって商品化されていった。

3つのイベントの第2弾は、1988年に行われた「智頭杉『日本の家』設計コンテスト」であった。このコンテストでは、杉の特長を活かし、日本人の生活様式の変化にも応えうる木造建築家屋の設計図を全国から募った。応募作品は148件に及び、著名な審査委員による審査を経て、特選作品（農山村用、都市部用各1件）他10件の入賞作品が選ばれ、盛大な授賞式が開催された。授賞式に出席した特選受賞者の1人、河原利和は、「コンテストの主催者は、智頭町役場と林業関係者の代表と思っていた。まさか、住民主体の小集団組織が、これほど大規模なコンテストを企画し、仕掛け、実行し、成功させたとは想像もできなかった」と記している（河原・石川、1990）。入賞作品をはじめとする設計図は、コンテストの翌年に設立された建築供給組合に貴重なノウハウとして蓄積されていった。

3つのイベントの第3弾であると同時に、杉板葉書、杉製写真たてに始まる「智頭杉の高付加価値化」を軸とする第1期の総決算とも言えるイベントが、1989年に行われたログハウス群の建設であった。また、後述するように、このログハウス群建設は、智頭杉の高付加価値化を軸とする活動が展開された第1期（1984—89年）の最終段階であるとともに、学問・科学および異文化とのふれあいによる人づくりを軸に展開された第2期（1988—94年）の初発段階としても位置づけることができる。ここでは、まず、第1期の最終段階としてのログハウス群建設に焦点を当てる。

1988年、「智頭杉『日本の家』設計コンテスト」の推進中、前橋と寺谷の核

集団を中心として、智頭町の中でも最も山深いところにある集落、八河谷集落にログハウス群を建設しようという企画がもちあがった。ここで、八河谷集落が選定された理由を説明するには、若干の年月を遡らねばならない。1986年、智頭木創舎設立の同年、4人の町会議員と寺谷も加わるかたちで、八河谷集落の一隅に「杉の木村」というイベント・ゾーンがつけられ、都市と農村の交流をテーマとする春秋のイベントが何回か行われた。過疎に悩む村落のシンボルとして、智頭町最深淵部の八河谷集落が選定されたのである。しかし、結果的に、この一連のイベントは、雨が降れば中止せざるをえなかったり、参加者も思うように集まらなかったりで、必ずしも成功しなかった。このような過去の経緯があって、1986年当時の本来の目的——地域活性化のモデルとすること——を実現するために、八河谷集落がログハウス群建設の舞台として再浮上したのである。また、当時、鳥取県知事が提起していた「ジグ起こし」⁽¹⁾の具体例を作りたいというねらいもあった。

ログハウス群建設の企画、計画立案は、1988年半ばからスタートした。まず、ログハウス建設のノウハウを習得するため、2名の青年がカナダに1ヵ月派遣された。また、後に述べる経緯で準核集団の一員に加わる岡田の人脈により、カナダの高校教師でログビルダーでもある女性、ジュディ・アップが、建設指導者の候補として浮かび上がり、懸命に来日交渉が行われた。実際の建設作業に当たる人々は、5日間の作業従事に対して、完成から向こう5年間、年3日、無料で利用することができるという条件で、全国から新聞により募集した。また、完成後のログハウスの管理・運営については、地元八河谷集落の住民に産業組合を結成してもらい、それに管理・運営を委ねるという方針が立てられ、八河谷集落の代表者との折衝が行われた。

以上のような準備のもとに、1989年夏、朝日新聞の小さな紹介記事に心動かされた68人の参加を得、ジュディ・アップの指導、核集団および協力者の懸命の努力によってログハウス4棟が建設された。このログハウス群「杉の木村」は、紆余曲折を経ながらも、杉の木村産業組合（後述）による管理・運営に移行し、さらに、その後、ログハウス2棟も増設され、現在では、年間15,000人

の来訪者を呼び込むまでに至っている。また、別荘としてログハウスを建築し、頻繁に「杉の木村」を訪れる人も数人現れた。今では、「杉の木村」は、八河谷住民の誇りにすらなっている。

③第2期（1989—94年）

まず、第2期において前橋、寺谷とともに準核集団を構成することになる岡田憲夫（当時41歳）が、第1期の終わり頃、この地域活動に関わりを持つに至った経緯から述べよう。「智頭杉『日本の家』設計コンテスト」が行われた1988年、核集団は、地域活動の中に国際交流の要素を取り入れようと考え、その手始めとして、地元の大学である鳥取大学の外国人留学生を智頭に招待し、地元の子どもたちとの交流会を開催するという企画を立てた。そのために、寺谷は、当時、資金面で助成を受けていたある財団の研究者と連れだって、鳥取大学を訪問した。しかし、数人の教官に留学生を紹介してくれるよう協力を依頼したものの、はかばかしい返事を得ることができず、最後の1人として訪れたのが工学部教授（社会システム開発論専攻）の岡田であった。岡田は、寺谷の依頼に即座に賛同、協力を約束した。その時、寺谷は、岡田が過疎地の地域計画をも研究テーマとしていることを知り、岡田に自らの地域活動のアドバイザーになってほしいと依頼した。

岡田は、その後、何度か智頭を訪れ、それまでの地域活動の実績を知り、また、当時、核集団とそのサポーター約30名によって設立された「智頭町活性化プロジェクト集団（Chizu Creative Project Team; 略称CCPT）」のメンバーの熱気に触れる中から、次第にこの地域活動を指導するとともに研究フィールドとすることを決心していった。ただし、岡田の決心を躊躇させたものが1つあった。それは、核集団に見られた政治（町政）志向の側面であった。もちろん、このことは、それまでの地域活動が町政（例えば、町長選挙、町議会選挙）に打って出るための手段であったという意味では毛頭ない。ただ、都市とは違って、人口1万余りの小さな町村にあっては、地域活性化を志すような人間にとって、町政への進出は、伝統的には、むしろ常識的な選択肢の1つであり、ここに登場する人々もその例外ではなかったというに過ぎない。しかし、岡田は、自ら

の参加が政治的に利用されることを断じて拒否、もし、政治志向を払拭しないならば自分は参加しないと、核集団に政治志向の放棄を迫った。これに対して、核集団は、政治志向の放棄を決断、以後、町政とは一線を画す形での純粋な住民運動路線を歩み続けることになる。政治的権力とは一線を画す住民による政治が志向されるようになったとも言えよう。

岡田の参入後、前橋と寺谷の核集団は、従前にも増して「核」集団として成熟していったが、同時に、岡田と寺谷との学問・科学を仲立ちとする強い信頼関係も形成されていった。したがって、前橋と寺谷の核集団に岡田を加えた、いわば準核集団が地域活動、すなわち、CCPT活動の中心になっていったと言えよう。一方、岡田の参加直前のCCPT設立(1988年)によって、核集団ないし準核集団をサポートする約30名の人々は、個人的協力の域を越えて、1つの集団のメンバーとして所属意識を持つに至った。

岡田は、まず、CCPTがログハウス群建設によって活性化しようとしていた八河谷集落の実態調査(1988年夏)に着手した。この実態調査は、八河谷集落住民はもちろん、八河谷集落から町外に離れていった元住民をも調査対象とする徹底的なものであった。調査には、岡田の研究室の学生が総動員で当たった。しかし、調査結果を一言で要約すれば、「八河谷集落を離れていった人々に、再び帰郷する意思はほとんどなく、放置する限り、八河谷集落は過疎化の一途を歩む」というものであった(岡田・高野, 1989)。地元住民に対する調査報告会(1989年)は重苦しい雰囲気にも包まれたと言う。しかし、岡田は、とにかく、これが現実であり、現実を認識することからすべてを始めなくてはならないと、主張した。また、前述のとおり、岡田は、すでに進行していたログハウス群建設計画に対しても、種々のアドバイスを与えるとともに、自らの人脈により、ログ・ビルダーでもあるカナダ人女性高校教師の来日交渉に尽力した。

1989年のログハウス群建設以降のCCPT活動は、そのウエートを物づくりから人づくりへと移行させる。とりわけ、異文化および学問・科学とのふれあいによる人づくりがクローズアップされてくる。まず、異文化とのふれあいに



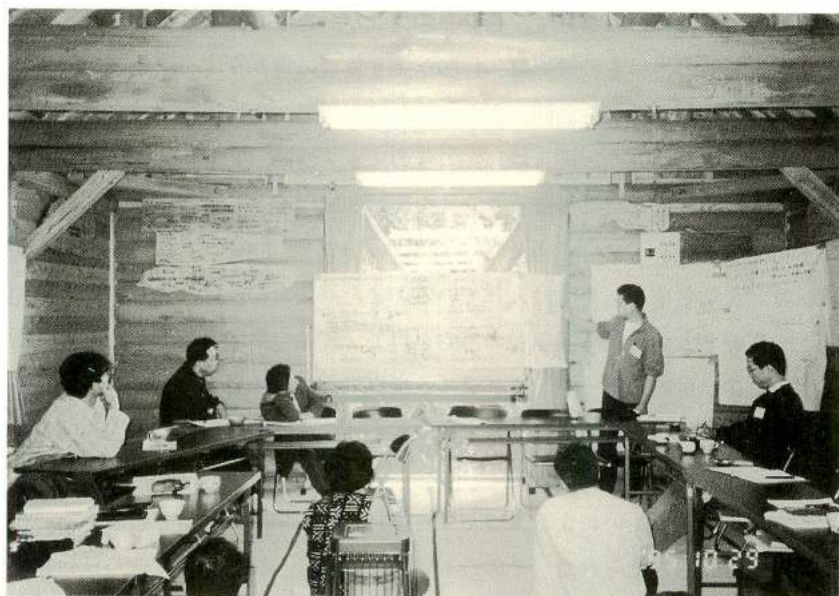
CCPTのメンバーを中心に23人がカナダ訪問（1992年）

については、1988年のCCPT設立に引き続いて、智頭町活性化基金を設立し、それを財源とする青年の海外派遣を開始した。具体的には、ログハウス群建設のために来日したカナダ人女性高校教師の勤務校に、智頭町の高校生13名（1990—92年の3年間）を派遣した。この高校生派遣は、1993年より、地元の智頭農林高校が国際交流支援協議会を設置して継承、同校PTAや鳥取県教育委員会もそれを公認するに至っている。高校生と並んで、同期間に、智頭町出身の大学生5名、および、青年社会人11名を、欧米、オーストラリア、東南アジアに派遣した。とくに、最初の青年社会人2名の派遣は、地元住民やマスコミの注目を浴び、体験談を聞くための講演会も多数開催された。彼ら2名は、その後、CCPTのメンバーに加わっている。また、青年社会人の海外派遣は、1993年に、青年海外支援協議会に継承されている。さらに、海外派遣された青年5名は、1993年、智頭町未来人集団を結成、智頭町出身大学生の海外派遣を受け継ぐとともに、次第に、CCPTから親離れし、独自の活動を模索しつつある。

青年の海外派遣のみならず、CCPTメンバーを中心とする人々自身も海外との交流を進めている。彼らは、1989年より旅費の積み立てを開始、1992年には23人の一行がカナダを訪問、また、それに応えて、翌1993年には、カナダ人16人が智頭町を訪れた。彼らは、2001年のスイス訪問、2006年のオーストラリア訪問を目標に、すでに旅費積み立てを開始している。さらに、前述した鳥取大学留学生を招いての子どもとのふれあい（1988年）に続いて、1990年から、オレゴン大学学生4名を受け入れている。また、1991年には、オレゴン大学の学生や高校・大学の英語関係者の協力を得て、智頭の民話を英訳し、その英訳を用いた中学生のスピーチ・コンテストを実施、最優秀者をオレゴンに派遣している。このコンテストの実施は、1993年より、前述の智頭町未来人集団の手に委ねられている。

異文化とのふれあいによる人づくりと並行して、学問・科学とのふれあいによる人づくりも進められた。その最も顕著な活動は、1989年より毎年秋に開催されている2泊3日の「^{さんか}杉下村塾」(吉田松陰の松下村塾の松を杉に置き換えた名称)である。この塾では、地域づくりに関連する多角的なテーマが取り上げられ、講師陣も、岡田らの人脈により、多彩な大学人、知識人が年々参加するようになり、1993年には、CCPTメンバーを中心とする受講者27名とほぼ同数の講師が参加するに至った。また、杉下村塾より規模は小さいが、地域の知的土壌づくりを意図した「耕読会」と呼ばれる半日程度の読書会が、1991年より、年4回のペースで、10年間継続の目標のもとに開催されている。1990年からの3年間、他の地域からの地域リーダーが一堂に会す「地域リーダー養成講座」も開催された。

このような学問・科学とのふれあいの中から、寺谷は、自らの企画・計画立案の体験に基づき、1つの斬新なディスカッション手法——四面会議システム——を考案した。この手法については、すでに、「土木計画学研究・講演集」にも報告されているが、総合管理、人的支援、物的支援、広報・情報という4つの役割を配置して企画を掘り下げていく参加型の計画手法である。この手法は、現在も、CCPTメンバーが各種の企画・立案を行うときに頻繁に用いら



第7回 杉下村塾 (1995年10月)

れている (寺谷・岡田, 1991)。

以上述べたように、1988、89年以降の第2期は、主として、物づくりよりも人づくりに重点を置いた活動が展開されたわけであるが、それと並行して、第1期の物づくりに重点を置いた活動の成果を定着させるための活動も行われている。具体的には、1989年に建設され、八河谷集落住民から成る杉の木村産業組合に管理運営が委ねられたログハウス群「杉の木村」をさらに整備充実するため、鳥取大学教官有志の出資によるセミナーハウスの建設 (1990年)、杉の木村を流れる河川の親水公園化 (1991年)、テニスコートの併設 (1992年) が行われている。

1989年のログハウス群建設のノウハウは、その直後、CCPTメンバーの1人を中心として企業化された。また、毎年夏、参加希望者を募って、CCPTによる1週間のログハウス制作講習会が開催されてきたが、1994年から、この講習会も上記企業に継承された。



親水公園

最後に、ここで紹介している10年（1984—94年）の終わり頃に始まった動きについて、2点だけ述べておきたい。第1は、智頭町全体に関わるCCPT活動の経験を踏まえて、寺谷が、その特定郵便局を拠点に自らの居住集落（早瀬集落）において開始した活動である。具体的には、同集落の特産品を住民とともに開発し、郵便局を通じた商品として流通経路に乗せたり、同じく住民の協

力のもとに、同集落に紫陽花1万本を植えたり、ボランティアの除雪隊を発足させたりした。第2に、岡田および岡田と親交のあった関正和（当時、建設省河川環境対策室長）による啓発・感化、あるいは、CCPTメンバーである鳥取県河川担当職員の影響を受けて、河川を中心とする環境問題に対する関心が高まった。そして、最近でこそ当たり前になりかけてきた「多自然型河川整備」の鳥取県版とも言うべき、「じげの川整備事業」のモデルが、智頭町のそこかしこに作られた。さらに、1992年には、「ふるさとの川を育む会」が発足、1994年には、智頭町・県土木部・住民の三者一体で組織する「親水公園連絡協議会」が発足した。このように、活性化運動の余波は、人とふれあえる河川を目指す社会システムづくりにまで及んでいる。

（2）活性化運動の主体（CCPT）に関する考察

以上紹介した1984—94年の活性化運動を、グループ・ダイナミックスの視点から考察してみよう。具体的には、第1期（1984—89年）に関しては、核集団（という集合体）と大多数の地域住民から成る地域集合体の関係に焦点を当て、第2期（1989—94年）に関しては、核集団、CCPTという2つの集合体と地域集合体の関係に焦点を当てて考察する。図2-2は、その概要をまとめたものである。

①第1期——前橋と寺谷の出会いからログハウス群「杉の木村」建設まで

この時期、まず、前橋と寺谷による核集団が形成され、数人の協力者とともに、1つの集合体として浮上してくる。その過程は、あたかも、深く大きな沼の静かな水面に、1つの気泡が出現し、その小さな気泡が、それを再び飲み込んでしまおうとする沼全体の力に抗して、1つの気泡としての存在を必死に維持していくかのようなのであった。実際、長い歳月の間に定着した地域の体質、すなわち、新しい変革の試みの一切を拒否する地域集合体の保守的集合性は、あたかも大きな沼のように、突如出現した集合体を再び自らの中に飲み込み、もとの静寂さを取り戻そうとした。ある者は無視することによって、ある者は冷ややかな眼差しを向けることによって、また、ある者は露骨な圧力をかけるこ

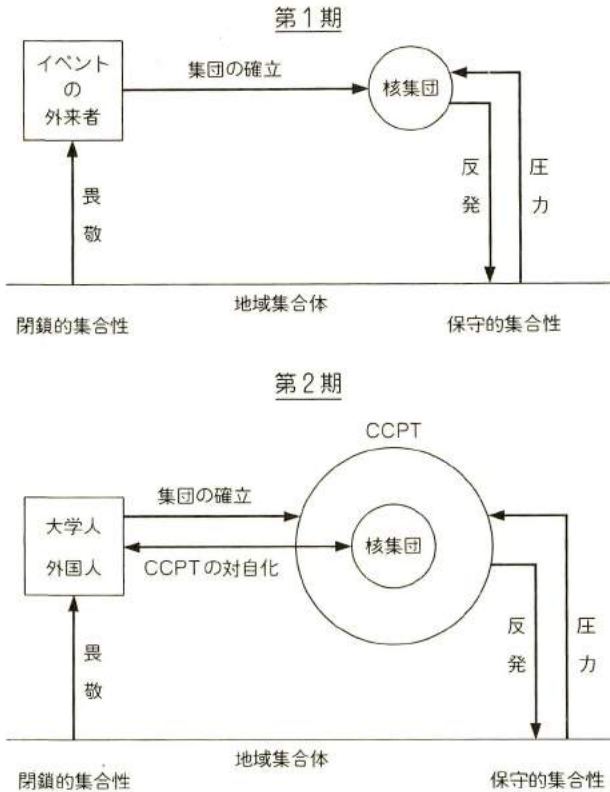


図2-2 智頭町における地域活性化10年にみられる集合性の構図

とによって、新しい集合体の出現を「一時の間違い」にしようとした。その中において、新しい集合体は、地域の伝統的体質に対する義憤を一層強くし、かつ、したたかな戦略性にも訴えながら、1つの集合体としての存在を強化していった。「(当時は)自分でも狂気を演じていたと思う」という寺谷の回想は、そのような状況下の心情をよく伝えている。

この時期における核集団の行動の特徴として、彼らが行った3つのイベントの最初の2つが、いずれも広く全国から応募者を募るコンテストであったことに注意したい。繰り返し述べるように、彼らを取り巻く地域住民のほとんどは、彼らを見無視するか、冷やかな目で見るとか、あるいは、彼らの「傍若無人の奇

行」を止めさせるべく圧力をかけるかのいずれかであった。おそらく、彼らにとって、地域住民は、「ぬかに釘」のことわざに言う「ぬか」、しかも、とげ混じりの「ぬか」にも思えたのではなからうか。そのような「ぬか」に釘を打ち込むためには、なまじっかの釘では通用しない。誰もが注目せずにはいられないような釘を打ち込まねばならない。そのような釘を打ち込んでこそ、自らの集合体の存在も強化される。その点、全国の多くの応募者の中から選ばれた「優れた」受賞者を、その「優れた」作品とともに一堂に集める授賞式、また、それに至る募集・審査の過程は、住民の注目を十分引きつける「釘」になりうる。マスコミの報道がそれに拍車をかけたことは言うまでもない。

受賞者や多くの応募者は、閉鎖的な山間地の住民にとって、いわば「外の世界」に住む人たちである。では、住民は、「外の世界」を、どのようなものとして捉えていたのだろうか。この質問に答える鍵は、地域集合体の「閉鎖的」集合性にある。狭い山間の地に自閉した日常生活を送ることは、その結果として、自閉する地域の外に広大な「外の世界」があることを自明なものとしていく。さらに、「外の世界」が広大であれば、その世界には、おそらく、自らの地域ではとても出会えないような優れた人物もたくさんいるはずだということもまた、自明のこととなる。つまり、地域集合体の閉鎖的集合性は、その裏返しとして、「優れた人物もたくさんいるに違いない広大な世界」という「外の世界」観を構築する。その広大な「外の世界」に住む多くの人々の中から選ばれた優れた受賞者や、その選考に当たった著名な審査者が、自分たちの狭い地域に集まれば、それら受賞者や審査員は、一種畏敬の目で見られることになる。したがって、このようなイベントは、いやが上にも注目的になる。引いては、そのようなコンテストを実現した核集団は、もはや否定しがたい存在として確立されていくことになる。同様のことは、2つのコンテストのみならず、多くの外来者や外国人指導者を巻き込んで実施されたログハウス群建設についても当てはまる。

翻って考えれば、このような「外の世界」を利用したイベントを企画しえたのは、おそらく、前橋、寺谷のいずれもが、智頭の一般住民に比して、「外の

世界」に精通していたことと無縁ではあるまい。前述のとおり、前橋は、関西に仕事上の大口得意先を持ち、しばしば関西と智頭を往復しているし、寺谷は、約10年に及ぶ広島勤務の経験を持つ。2人は、地域集合体に属するのと同時に、「外の世界」の人々の集合体にも属していた。したがって、「外の世界」の人々の集合体の一員として、地域集合体の集合性のあるものについては、それを外部者として認識することができたのであろう。地域集合体の「閉鎖的」集合性は、彼らが、外部者として認識することのできた地域集合体の集合性の1つであつたに違いない。当時、前橋が寺谷に語った言葉、「智頭の中だけを見て動かそうとしても智頭は動かない。智頭を囲む山々の稜線に、智頭をまたぐ『三⁽³⁾又(さんまた)』を架けよう」という言葉は、核集団が、地域を活性化するための「外の世界」の重要性を認識していたことを物語っている。この2人に限らず、地域活性化運動のリーダーには、一旦都会に出て戻ってきた人、いわゆるUターン経験者が多いのも、地域集合体の集合性、とりわけ、その閉鎖的集合性を外部者の目から認識できることによると思われる。

以上、第1期における核集団の確立にとって「外の世界」が有した意味について考察してきたが、第1期における今1つのグループ・ダイナミックスの特徴として、核集団にとっての主要な環境であつた「杉」の意味について考察しておこう。そもそも、前橋と寺谷は、その出会いに先だつて、それぞれ、杉を使った商品の開発に着手していた。また、既に述べたように、彼らの地域活性化運動は、ごく自然に、杉の高付加価値化を軸として開始されていった。つまり、杉は、彼らが何か事を起こそうとするとき、ごくごく自然に頼ることのできる、いわば無条件の存在であつたと思われる。それは、幕末以来の植林に始まり、昭和初期にはほぼ現在のような杉の山々の景観に至った長い歴史的伝統の産物である。智頭の人々は、文字どおり、四方八方を取り囲む杉の山々のふところにいだかれて、その一生を送ってきた。

杉は、智頭の住民を包み込む伝統のシンボルであるとともに、地域の伝統的体質、すなわち、地域集合体の伝統的集合性のシンボルでもある。山々の杉も、国有林をのぞけば、一握りの山林所有者の所有物である。明治以来、住民が生

計を立てる上で、林業への依存度は、現在とは比べものにならないほど高かった。山林を所有することは、とりもなおさず、地域の支配的地位にあることを意味していたのである。この支配の構造は、農地解放こそあれ山林解放はなかった戦後も、根強く存続している。地域を牛耳る一握りの有力者、資産家と言う場合、そのほとんどは、多くの山林を所有する者と重複する。山を持つ者と持たざる者、したがって、杉を所有する者と所有せざる者、この区別は、木材不況と言われる今日でさえ、なお、その意味を失ってはいない。

核集団が能動的企画・経営の対象とした智頭杉は、地域集合体の伝統的集合性、とりわけ、その支配の構造のシンボルでもあった。前橋、寺谷のいずれにしても、山を持たざる者であり、後にCCPTを形成する人々も、同じく、山を持たざる者たちである。そのような核集団にとって、地域を牛耳る山持ちの山から切り出された智頭杉に、新しい企画・経営の刃を入れることは、伝統的な支配の構造に刃を入れることをも意味しよう。それだけに、彼らの能動的企画・経営の姿勢は、有力者や資産家のみならず、伝統的集合性に包まれる地域集合体の人々にとっても脅威だったのである。

②第2期——ログハウス群「杉の木村」建設から1994年まで

第2期においては、核集団が徐々に獲得してきた支持者約30名と共に、「智頭町活性化プロジェクト集団（CCPT）」を設立、一方では、各種の国際交流活動を推進しつつ、他方では、都会の大学人、知識人と学問・科学を通じた交流を展開していく。また、前橋と寺谷の核集団に、社会システム論を専攻する大学人岡田を加えた準核集団が、CCPTという集合体のリーダー的役割を果たすようになる。以下、最初に、約30名から成るCCPT集合体について、この時期の特徴を考察し、引き続いて、核集団ないし準核集団について考察する。

まず、この時期におけるCCPT集合体と地域集合体の関係は、第1期における核集団と地域集合体の関係に類似していることを指摘したい。ここで、この時期、一応、CCPTという「集団」が結成されたとはいうものの、その構成メンバーは1992年に至ってようやく対外的に公表されたことに留意したい。それまでは、前橋や寺谷の行動に賛同した人が、個別的なプロジェクト遂行の

ために前橋や寺谷と行動を共にするという形態であり、前橋・寺谷を介して間接的に1つの集合体を形成していたとしても、自他共に認める顕在的な集合体ではなかったわけである。その理由は、へたに構成メンバーを公表することが危険だったからに他ならない。確かに、第1期におけるいやが上にも注目せざるをえない核集団の行動によって、核集団に関する限り、地域住民も、当初のような無視の態度はとりえなくなっていた。そのことは、核集団に対する反発が強くなってきたことをも意味している。しかし、すでに、核集団は、直接反発を向けるにはあまりにも強くなっていった。その反動として、核集団を支持し、追従しようとするメンバーたち、とりわけ、年齢や資産の面で下位の立場にある者が、反発の矢面に立たされる危険性は高く、核集団は、メンバー・リストの公表に慎重にならざるをえなかったのである。つまり、第2期、とりわけ第2期の前半においては、CCPTという集合体のほとんどのメンバーには、核集団と行動を共にしたいという願いと地域住民から疎外されることへの不安が同居していたと言えよう。

この不安が払拭され、CCPT集団の確立が達成されるプロセスもまた、第1期において核集団が集団としての確立を達成していったプロセスと類似している。ここで、第1期のイベントにおいて、「外の世界」から訪れた優れた受賞者たち——地域住民が畏敬の念を抱くような人たち——のことを思い出してほしい。第2期における外国(人)にしても、都会の大学人や知識人にしても、智頭の地域集合体にとっては、同じく、「外の世界」の人間である。しかも、テレビや映画でしか外国(人)を目にする機会がない、また、地元の大学にも、今ひとつ身近さを感じられない地域集合体にとって、外国(人)や大学人・知識人は、ごく自然に、一種あこがれと畏敬の対象でもある。したがって、そのような外国(人)、大学人・知識人と親しく交わることは、CCPTのメンバーに、自らがCCPTに所属することの正当性を見出し、自信を深めていくことを可能にしたと思われる。また、広範な地域住民も、畏敬の対象である外国(人)や大学人・知識人が、真剣かつ積極的に交流するCCPTを目の当たりにして、CCPTという集合体に対する認識を変えざるをえなかったであろう。

う。ここに、CCPTが、そのメンバー構成を公表しうるだけの強固な基盤が形成されていき、CCPT集団としての確立を実現するのである。

一方、核集団に注目すると、とりわけ、大学人との関係において、CCPTの一般メンバーに一步先行する特徴を見ることができるといえる。すなわち、この時期から、岡田を含む準核集団の中での議論、あるいは、岡田らの人脈により智頭を訪れる大学人・知識人との対話を通じて、核集団は、CCPTという集団自体のあり方を対自化するようになる。それを最もよく示しているのが、寺谷によって1990年に始められた「CCPT活動実践提言書」の制作である。毎年約200頁に及ぶ提言書の中には、前年度の活動内容が詳細に記録されているのみならず、その巻頭には、CCPTの活動に関する総括と展望が、前橋や寺谷によって記されている。ちなみに、1992年度提言書のタイトルは、「新・地域リーダー考『エディター』の提案⁽⁴⁾」、1993年度提言書のタイトルは、「ゴールは近づきゴールは遠く——新しい助走にむけて」であり、まさに、核集団のリーダーシップのあり方、CCPT集合体そのもののあり方が対自化され、議論と分析の俎上にのせられている。

(3) ログハウス群「杉の木村」の地元集落へのインパクト

ログハウス群「杉の木村」建設の経緯については、(1)項において、主としてCCPTの視点から記述したが、本項では、「杉の木村」建設が八河谷集落の住民集合体に与えた影響を考察する資料として、同じ建設プロセスに関する八河谷住民の視点に立った記述を追加しておく。それによって、CCPTによる能動的な活性化運動が、その舞台となった集落到住む人々に、どのように受け入れられていったかが明らかになる。

八河谷集落は、智頭町の北東端に位置し、山間の地、智頭の中でも最も山深いところにある。冬は雪深く、交通も途絶えがちである。過疎化は顕著であり、1960年頃250人以上だった人口は、1994年現在、61人にまで減少、そのほとんどが60歳以上の高齢者であり、小中学生はわずか1人しかいない。

先にも述べたとおり、八河谷集落を地域活性化のモデル・ゾーンに選定し、

そこを活性化しようとする最初の試みは、1986年、4人の若手町会議員によってなされた。八河谷集落住民は、「杉の木村連絡協議会」を結成、町会議員の1人の紹介によって、関西のある都市の生協とつながりができ、都会の人を集落に招いてさまざまな交流イベントを催した。しかし、当初は、集落住民ほとんどの協力も得て、「村おこし」関連の賞を受賞するほどであったが、2年も経たないうちにマンネリ化し、また、屋内施設がないにもかかわらず雨が多いという当地の気候的悪条件も重なり、活動はしりすぼみになっていった。

そのような中、CCPTの前橋と寺谷が、八河谷集落の有力者の1人A氏を訪れ、ログハウス群建設の計画をもちかけた。前橋とA氏は、木材取引を通じて長年の知り合いであり、寺谷は、A氏の知人の子どもでもあり、寺谷を幼い頃から知っていた。また、1986年の智頭木創舎設立に伴い、前橋と寺谷が、八河谷集落の人たちに、杉製の葉書や絵本を制作するための糸のこ作業を紹介し、A氏、S氏ら5名が「杉の木村木工組合」を設立して糸のこ作業に従事するようになったという経緯もあった。A氏、S氏は、それぞれ、前述した「杉の木村連絡協議会」の会長、副会長でもあった。

最初、A氏は、ログハウス群建設の計画を聞いても、その実現性には半信半疑であったが、それまでの活性化イベントがしりすぼみになり、その打開策もなかったところから、前橋と寺谷の申し入れを了承した。その時、前橋と寺谷は、ログハウス群が建設された後は、たとえ集落が二分されようとも、その管理・運営に携わる意欲のある八河谷住民だけで「杉の木村産業組合」を作ってもらい、その産業組合にログハウス群を無償譲渡したいという方針を伝えた。併せて、今後、A氏がCCPTに対する八河谷住民の窓口となることを要求、A氏もそれに同意した。

前述のとおり、ログハウス群は、CCPTの懸命な努力によって1989年の一夏をかけて建設された。また、カナダ人ログビルダーが建築指導者として来村、集落住民の家にホームステイをしたり、全国からログハウス建設のために多数の人々が来村するなど、集落は多大のインパクトを受けた。ログハウス群完成後は、A氏ですら予想もしなかったような多数の人々がログハウスを利用に来

村する、マスコミでも大きく報道されるなど、もはや、「杉の木村」を抜きにしては八河谷集落を語りえないまでになった。

ログハウス群建設後、ようやく産業組合が結成され、ログハウス群の管理・運営に当たったが、産業組合に名を連ねたのは、A氏、S氏をはじめ、集落の役職経験者を中心とする八河谷住民の約半数であった。つまり、ログハウス群をめぐる、集落が2つに割れたわけである。ただ、産業組合に入らなかった半数の人にとっても、「杉の木村」の持つ勢いはいかんともしがたく、表だった対立には至らなかった。

このように、CCPT主導で建設されたログハウス群を、産業組合を結成した八河谷住民が譲渡してもらうというように、八河谷住民のログハウス群に対する姿勢は、受け身のそれであった。また、多数の外来者を相手にするような事業は、八河谷住民にとって全く初めての経験であり、その運営・管理も、CCPTからみれば、満足できる水準にはほど遠かった。実際、CCPTは、ログハウス群建設に続く「杉の木村」の拡充計画を提案するとともに、ログハウス群の管理・運営についても、ことあるごとに注文をつけざるをえなかったようである。

しかし、建設後4年目の1993年、八河谷住民の中に、初めて、積極的な動きが生じた。それまで「杉の木村」に食堂施設はなかったが、農業改良普及所の人から、食堂施設を作ってはどうかとのアイデアと、もし、集落住民全員がそれに賛同するのであれば補助金ももらえる可能性があるという示唆を得た。そこで、これを機に、A氏とS氏は、未加入だった世帯を精力的に説得、集落のほぼ全戸の産業組合加入を達成、資金を供出しあって食堂施設を建設した。その背景には、「杉の木村」が多くのお客様を呼び続けているという動かしがたい現実、自分たちが管理・運営しているとは言え、「杉の木村」の中に自分たちの手によって作られたものは何もないという物足りなさ、CCPTからの注文を排除して、自分たちだけで管理・運営をしたいという希望、などが交錯していた。

(4) 活性化運動の対象となった集落に関する考察

以上述べたように、現在では、ログハウス群「杉の木村」の管理・運営は、地元八河谷集落のほぼ全戸が加入する産業組合によって行われている。では、いかなる集合体のいかなる集合性を媒介とすることによって、このような現状に至ったのか、また、現在、「杉の木村」は、集落集合体の集合性においていかなる位置を占めているのか、これら2つの点について考察してみよう。

CCPTによるログハウス群建設の申し入れから、その建設、譲渡を経て、集落住民による運営・管理に至る過程において、専ら顕在化したのは、集落集合体の血縁的・地縁的集合性であった。ちなみに、八河谷集落の血縁関係は、A氏の属する家系とS氏の属する家系の2つに分かれるが、両家系の間にも婚姻関係があるので、集落全体が1つの血縁関係にあると言ってもよく、その意味で、集落の血縁関係と地縁関係は、ほぼ重なり合っているとと言える。ログハウス建設後に産業組合を設立し、その管理・運営に当たったのは、A氏やS氏をはじめとする血縁的・地縁的集合体のリーダー的人物であった。

血縁的・地縁的集合性への依存は、集落住民が食堂施設の自力建設に至るプロセスでも、再び顕在化する。CCPTの経営的手腕により、「杉の木村」は集落住民が予想もしなかったような多くの人々を吸引する場となった——もう、後戻りすることなど考えようもない、前向きの大きな流れが出現してしまっていた。A氏やS氏は、産業組合に未加入の住民を加入させるべく、精力的に説得活動を展開する。A氏の言葉を借りれば、「なだれ現象」——影響力のある未加入者の賛同を得ることによって、それ以外の人々を一気に賛同者とする——を起こしたわけである。つまり、産業組合の立ち上げ、産業組合の集落全体への拡大という2つの段階の両方において採用された方略は、まさに集落集合体の血縁的・地縁的集合性に基づく方略であった。

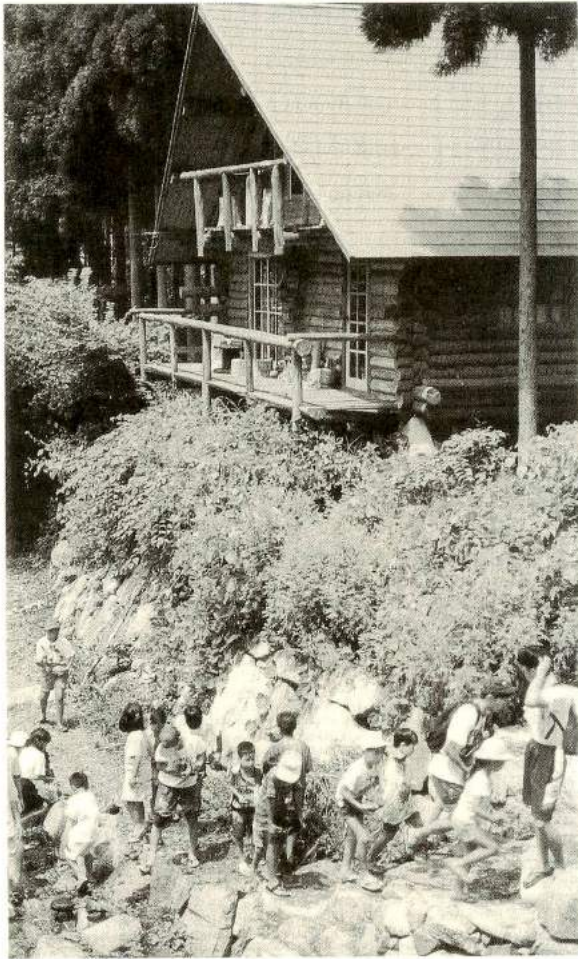
では、現在、「杉の木村」は、集落集合体の集合性の中に、どのように位置づけられているのだろうか。「杉の木村」を訪れる多くの人々の目には、集落住民が行なっていることは、民宿経営と大差ないものに映る。実際、筆者も、当初はそう思っていた。しかし、彼らが、「杉の木村」の管理・運営に費やす

労力の代価として得ている収入を調べるうちに、その額が、民宿経営という営利行為と呼ぶにはあまりにも少ないことに気づかされた。集落住民の中には山林所有者もいれば、かつての木材景気のときに得た収入で関西に賃貸マンションを所有する者もいた。第一、彼らには、農業という、それだけで生計を立てることのできる本業があり、その本業から得られる収入に比べれば、産業組合を通じて得られる収入は、あまりにも少ないアルバイト代としか言いようがないほどであった。

実は、「杉の木村」で住民が行なっていることを端的に指す言葉が、集落住民自身のボキャブラリーの中に発見された。それは、「総事（そうごと）」という言葉であった。総事とは、集落の住民が総出で行う、無償の共同作業である。例えば、共有林の手入れ、集落の掃除、道路の補修、村祭り、葬式、等が、従来行われてきた総事の代表的な例である。かつては、これらの総事に参加できなかった人に対しては、別途、労働作業への参加が要求されたり、罰金が課せられたりもした。しかし、過疎化の進行に伴い、八河谷集落では、1980年代の中頃から、総事はほとんどとりおこなわれることがなくなっていた。

筆者らが、総事という言葉に注目したのは、「杉の木村」での作業を集落住民がそう呼んでいたからではない。「杉の木村」における作業を総事と呼んでいた人は、誰もいなかった。住民のほとんど全員とのインタビューを含む数ヶ月に及ぶ現地調査において、筆者らが耳にした数多くの語彙の中で、「杉の木村」における彼らの活動をイメージさせる言葉として、筆者らが、いわば偶然に注目した言葉が、総事という言葉であった。「杉の木村」における作業は総事ではないのか、という仮説をもって、A氏から再び話を聞いたときのセリフは、われわれの仮説を支持するものであった——「そう、今の八河谷にとって、総事と言えるのは『杉の木村』だけかもしれない」。

ここに、C C P Tによる能動的な活性化運動の成果である「杉の木村」が、その舞台となった地元集落の住民によって、彼らの伝統的な行動である総事として取り込まれていったことが明らかになった。岡田の言葉を借りれば、「地域活性化のモニュメント」として建設された「杉の木村」は、「総事」を行う



八河谷集落につくられたログハウス群「杉の木村」には年間15,000人以上の外来者が憩う。

場として、集落集合体の中に土着化していったのである。したがって、八河谷住民がログハウス群に対して示す反応や、産業組合の運営・管理の現状は、CCPTが期待したものとは言い難い。例えば、前述のCCPTによる「杉下村塾」、「耕読会」といった学問・科学とのふれあいは、「杉の木村」を開催場所として行われるにもかかわらず、八河谷集落からの参加者は皆無である。

しかし、忘れてならないのは、「杉の木村」で行われている総事は、あくまで、「新しい」総事であるという点である。その総事は、CCPTという能動的な経営感覚の持ち主によって創出された総事であり、また、年間1万5千人を越える外来者を相手にした総事でもある。それは、単に、消滅しかけていた総事の復活にとどまらない。それは、従来の総事が、集落「内部」における共有財産の維持・管理、あるいは、集落住民「内部」における互助のための総事であったのに対して、はるかに集落「外部」に開かれている。八河谷の集落集合体もまた、その伝統的体質としての閉鎖的集合性を有している。そうだとすれば、「杉の木村」をめぐる新しい総事には、その閉鎖的集合性にいささかでも変化のきっかけを与える可能性が秘められているのではなかろうか。

4 私と智頭（その2）——サポーターの1人に

以上の10年史（1984—94年）の第一稿を書き上げたのは、ヒアリング調査から帰って、約2ヵ月後であった。そのとき、私なりの期待を込めて、次の予想じみた文章で原稿をしめくくった。

「地域活性化という（地域全体の）集合性の再構築過程には、あまりにも対照的な2種類の集合性の相剋が必要条件であるように思われる。1つには、少数の人間からなる集合体の先鋭的な集合性、もう1つは、多数の人間からなる集合体の、長い歴史に裏うちされた集合性である。智頭町活性化の10年は、前者が後者の力に抗して、その存在を確立していった過程であった。しかし、同時に、前者は、非常に緩慢ではあるが、確実に、後者の変容をもたらしつつある。10年という時間は、日々先鋭化を突き詰める前者の集合性を記述するにはあまりにも長く、その影響を受けて変化する後者の集合性を記述するにはあまりにも短い時間なのかもしれない。

智頭町の地域活性化は、これまで紹介した10年の活動を基に、新しい段階に突入していった。それは、先に図示した集合性の構図の延長では、もはや描ききれない新しい段階のように思われる。すなわち、CCPT集合体と地域集合体の圧力・反発の構図は、そのウェートを下げつつある。また大学人・知識人にしても、「外の世界」の人間としてのウェートを減じ、（たとえ、身近な内部にいてもなお）広範な人々に対自化の場を提供しうる存在として再定義されつつある。そして、これらの変化は、おそらく、CCPT集合体の集合性の変化と相即的に進行しつつある。

あくまでも1つの可能性に過ぎないが、CCPT集合体が、1つの可視的「集団」としての様態から、より境界があいまいな、より緩やかな連結によって維持される様態へと変化するかもしれない。しかし、仮に、「集団」としての可視性を減じたとしても、あたかも変幻自在の軟体動物のように、地域コミュニティのひだの中にしみ込み、そして、岩をもうがって伸びる木の根のように、縦割り行政システムの壁を突き崩して、その中に浸食していくならば、そこには、新しい住民自治に向けての1つの具体的な方向性が提示されてくるであろう。もし、そうなれば、それは、一山間過疎地の現象と言うにとどまらず、現在の日本社会が直面している大きな課題の1つ、すなわち、新しい政治・行政システムの構築にとって、1つの先駆けをなすものと言え言えるのではなからうか。」

第一稿を書き上げるや否や、原稿を寺谷氏にファックスで送った。数十枚のファックスの途中に、はや、寺谷氏から電話が入った——「私たちの物語が、次々、ファックスから出てきています。」その声に、書いてよかったと思った。その後、原稿は、ヒアリングをした人たちと私の間を数回往復、ようやく最終稿ができあがった。もちろん、筆を進めるイニシアチブは私がとったが、まさに、CCPTの人たちとの合作であった。その原稿は、翌年の提言書に掲載された。

それまでも、1枚にまとめられた活動年表はあった。それに、1984年以来、CCPTが毎年製作してきた提言書もあった。しかし、CCPT以外の人が読んでもわかるには、前者は、あまりにも要約されすぎており、後者は、あまりにも詳細かつ膨大な記録であった。その点、10年史は、てごろな物語——CCPTストーリー——であった。それにしても、10年史に書かれたことに熟知していたのは、CCPTのメンバーと岡田先生だけではなかったか。CCPTメンバーの家族でさえ、はたして、どこまで知っていたのだろうか。「いろんなことを活発にやっているとは聞いていたが、どんなことをやっていたのか、これを読んでわかった」——CCPTの活動に理解ある鳥取市在住の人からも、こう言われたことがある。

しかし、この原稿によって、最もインパクトを受けたのは、ほかならぬ私自身だろう。期待したとおり、杉の木村で接した、あの熱っぽさが生まれるには、

ものすごいストーリーがあったのだ。CCPTの人たちから聞いた話は、単なる研究資料のレベルを越えていた。「研究なんかとは関係なく、自分の人生にとって、いい話を聞けました」——ヒアリングから帰ってすぐ、岡田先生への電話で、こう報告した。「そうでしょう、よくわかりますよ」という返事が返ってきた。

1993年、ヒアリングのために智頭を訪れたとき、1つのプロジェクトが芽を出しつつあった。智頭に到着した日、寺谷氏が、開口一番——「地域の人間と外部からの研究者が交流できる館（やかた）をつくろうと思うんです」。私は、夏かぜをこじらせ最悪の体調だったが、その言葉は、胸にピーンと響いた。「いいですね。すばらしいアイデアだと思います。開かれた大学などと言われるけれども、そういうことをやっていくことこそ——」——ほとんど動いていない頭でも、そのくらいのセリフが、すぐ飛び出した。その後、寺谷氏は、脈のありそうな人を見つけては、「一口50万円として、20人で、1000万円集まるのだから——」と、館の夢を説いていた。ヒアリングを終え、京都に帰った私は、早速、一口を送金した。ぜひ、実現してほしい。後日談だが、寺谷氏は、「あの先生の一口で、もう、後に引けなくなりました」と笑っていた。

10年史の執筆後、私と智頭、正確には、私とCCPTの人たちの関係は、確実に深まった。直接会う機会がないときでも、寺谷氏は、電話やファックスで、智頭の動きや自らの抱負を語ってくれるようになった。次第に、私も、個人的なコメントをさしはさむようになった。

「自分の読みを越えて、自分の読み以上の事が、今までにないスケールで展開していくんです。その展開のステップは大きく深く、ステップが始まる前には予想できなかった動きです。そのステップが、一段落しかけたときに、やっと、次のステップが読める、そんな動き方になってきました」——これは、1994、95年ごろ、寺谷氏の口からしばしば聞かれたセリフである。そのセリフには、1984—94年までの約10年を1つの大きな区切りとして、そこからの変化と拡大のきざしが現れていた。CCPTという小集団が、猪突猛進、活性化のイベントを仕掛け、活性化に向けて住民をつき動かしていく段階を越えて、

その次の新しい段階が始動しつつあった。その後、CCPTという集団は、ゆるやかなネットワークと化し、行政の中に、そして、住民の中に、そのネットワークの四肢を伸ばしていく。次に、その経緯を紹介しよう。今度は、私自身の目で見えた経緯である。

5 行政との融合（1994—96年）

1994年7月6日、寺谷は、京都大学の岡田（1991年に鳥取大学から京都大学に移籍）の研究室を訪れた。1984年に、寺谷が前橋と出会い、旧態依然たる町の保守的・閉鎖的体質に対する不満と、それを打破する改革の意思を共有して以来、ちょうど10年の年月が経っていた。CCPTによる地域活性化運動の実績は、かなり広範な人々の認めるところとなっていた。では、CCPTの活動は、今後、何を目指すべきか——寺谷は、岡田と杉万に、10年を振り返りつつ、CCPTの活動が大きな節目を迎えていることを訴えた。

これを機に、CCPTのメンバーは、それまでの自らの活動を厳しく問いなおし、自らのさらなる一步の踏み出し方を模索し始めた。メンバー個々人の人生にも踏み込んだ、歯に衣を着せぬ激論が交わされていった。このようなCCPTメンバーによる自らの活動の厳しい対自化の中から、次の一步が創出されていった。

その一步は、次の4つのプロジェクトに結実していく。すなわち、①寺谷（特定郵便局長）と、同じくCCPTのメンバーである小林憲一（当時、智頭町役場総務課長）を軸に、郵便局と町役場という異質の行政機関が協力して、新しい高齢者福祉のシステム——「ひまわりシステム」——が構築された。また、②智頭町の長期的ヴィジョン（理念）が、寺谷と小林に加えて、助役をはじめとする町役場の職員、岡田他の専門家により、まさに官民共同で作成された（智軸づくり）。さらに、③CCPTという「民」によって引き起こされた、新しい「官」の動きは、智頭町内部にとどまらず、隣接する用瀬町、佐治村を含む3ヵ町村による共同企画イベントへと発展していった（はくと・はるか・関空シンポジウム）。そして、最後に、④岡田の参画以来、CCPT活動の中心をな

してきた、「科学の視点」に立脚した地域経営を、より深化させるとともに、研究者と住民の直接的なふれ合いの場、および、CCPTの活動拠点となる場をつくるために、「日本・地域と科学の出会い館」が建設された。

以下、これらの4つの動きを紹介しよう。

(1) 「ひまわりシステム」の構築

「ひまわりシステム」の誕生は、「まちづくりプロジェクトチーム（以下、まちづくりPTと略す）」による提案に端を発する。この「まちづくりPT」の設立を提唱したのは、CCPTのリーダー寺谷と、CCPTのメンバーであり、町役場の総務課長を勤める小林の2人であった。寺谷と小林は、毎年2回、町長と助役、そして、町内の郵便局の各局長が集まって行われる「まちづくり協議会」に着目した。まちづくり協議会は、半ば形骸化していた。その協議会の席で、2人は、「役場と郵便局の若手メンバーを集めて、タイアップチームをつくってみてはどうだろうか」と提案した。この提案は、役場と郵便局の双方にとって、メリットがあった。役場にとっては、役場に、新しい風を吹き込むきっかけになる可能性があった。一方、郵便局にとっては、自治体行政との連携は、郵政事業の変革を求める社会の要請に応えるための必要条件であった。寺谷と小林は、まちづくりPTが、役場と郵便局の職員にとって、互いに刺激しあえる職員教育の場となること、両者の協力によって、新しい住民サービスを提供できるようになること、また、異なる行政機関が連携するモデルになること、等を期待していた。「町を変えていくには、役場を変えていくしかない」——寺谷と小林は、こう考えていた。「まちづくりPT」設立には、職員の中から、地域プランナーを育てるという人材育成の観点も含まれていた。

こうして、タイアップチームの設立が決定し、役場から、各課横断的に5人、郵便局から、智頭町外から通勤している、内務職員2人と外務職員2人の計4人が、チームメンバーに指名された。1994年8月、役場と郵便局という、同じ行政組織でありながら、かつ、物理的にも目と鼻の距離にありながら、今まで決して交わることのなかった2者が、初めて同じ席についた。この時、役場と

郵便局のメンバーは、お互い、ほとんど初対面であった。郵便局側のメンバーとして、意図的に、智頭町外からの通勤者が選ばれていたためだ。そこには、智頭の内部者だけではなく、外部者の目からも、地域を捉え直したいというねらいが込められていた。

初会合以来、月に1回、しかも2時間だけ、という厳しい制約条件を設定して、会議が続けられた。司会、議事録の書記は、役場側と郵便局側が、交互に務めた。会議の冒頭では、前回の会議で課された検討課題に対する経過報告を行い、議事を絞って討議に入った。会議の終わりには、次回までに、誰が、何を検討しておくかを明確に決めた。第2回目の会議には、実に、30数項目にもわたる企画が提案された。それらは、すぐ実行可能な事項と、時間をかければ実行可能な事項に分類された。ここで紹介する「ひまわりシステム」(この時点では、買物代行システムと呼ばれていた)は、当初、時間をかければ実行可能な事項に分類されていた。しかし、寺谷は、その提案を受けたとき、郵便局の集配業務を活用したシステムを構築すれば、すぐに実行可能だと考えた。寺谷は、町長、助役、小林を交えたトップ会談において、このシステムの構築を、最優先事項として、早速、チームメンバーが実行に移すことを提案した。このように、寺谷と小林は、まちづくりPTのメンバーに、自由な発想を促す一方で、必要に応じて、ある程度の優先順位をも示し、メンバーをリードした。

ここで、「ひまわりシステム」の内容について説明しておこう。「ひまわりシステム」とは、郵便局の外務職員が、配達途中に1人暮らしの高齢者を訪れて、「御用聞き」をするというものである。具体的には、予め、高齢者に、特別な旗を渡しておき、用事があれば郵便受けに旗を立ててもらい、それを見た外務職員が、薬、日用品、食品などの買物を代行する。しかし、実際に実行してみたところ、御用聞き的な利用もさることながら、毎日訪れて話相手になってくれること自体が、大変喜ばれていることがわかった。「旗が立っていれば訪れるのではなく、逆に、旗がなければ、どうしたんだろう、せめて声をかけるだけでもと思い、訪れるようになった」と、ある外務職員は語っている。外務職員が、自主的に、階段の手すりをつけたり、風呂場の修理をしたりしていると

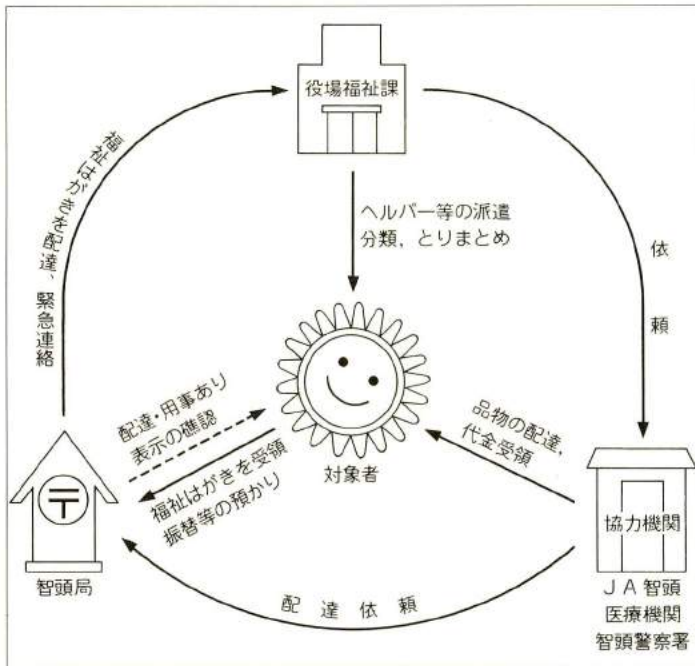


ひまわりシステム——郵便さんは毎日まわる、お年寄りにひまわりの笑顔を。

いう、心温まるエピソードも聞かれる。

このシステムが成功した理由の1つは、まず、サービスを希望する高齢者を、事前調査によって、明確化したことである。以前、同じ様な取り組みとして、「愛の一声運動」が、郵便局で実施されたことがあったが、これはうまくいかなかった。その反省が、ひまわりシステムには活かされている。すなわち、第1に、愛の一声運動は、あくまで、精神的な奨励運動に過ぎず、制度づくりを伴っていなかった。そのため、ちょっと忙しくなると、声かけは、どうしても二の次になってしまいがちであった。第2に、愛の一声運動では、サービスを受ける側の老人に、事前の調査や連絡がなされていなかった。そのため、サービスを希望しない高齢者までもが、すべてサービスの対象者に含まれてしまった。外務職員の側からみれば、本当にサービスを必要とする人の顔が見えない運動となってしまったわけである。

「ひまわりシステム」には、マスコミや全国の郵便局などから、多数の取材や問い合わせが寄せられた。高齢化社会においては、都市部でも過疎地でも、独居老人に対するケアをどうしていくかは重要な問題である。「ひまわりシス



ひまわりシステム

テム」に対する関心の高さは、この重要な問題に対する具体的な解決策の1つに「ひまわりシステム」がなりうることを示唆している。

さて、時間を少々さかのぼり、「まちづくりPT」が、いかにして、このシステムを立ち上げていったのか、また、その過程で、どのように人的ネットワークを広げてきたのかを述べておこう。

前述のとおり、「まちづくりPT」は、役場からの5人と郵便局からの4人で構成されたが、その中で、それぞれのリーダーとして、中心的役割を果たしたのは、智頭町役場地域開発課係長、智頭郵便局局長代理の2人であった。他の役場側のメンバーは、それぞれ違う部署に属していた。また、郵便局側も、労働組合である全通とのパイプ役になれるメンバー、実際に外務職員として配達に携わっているメンバー、内勤の職員というように、1人1人が異なる人的ネットワークを持っていた。

まず、はじめに、彼らは、次のように考えた。外務職員が、老人宅を訪れ、薬や日用品の購入を依頼されたとして、では、どこで薬や日用品を調達するか。支払いや事務処理の効率性を考えれば、なるべく、特定の機関に集中した方がよい。そこで、智頭町立病院と農協（JA）に依頼しようということになり、リーダー2人が、折衝に当たった。幸い、両機関とも、主旨に賛同し、協力を快諾してくれた。

続いて、「まちづくりPT」は、モデル地区の選定を行なった。いずれ、このシステムを全町にまで拡大するにしても、配達の仕事にどのくらいの負荷がかかるのか、実際にどれだけのニーズがあるのか、などを確かめておかねばならない。そこで、福祉課勤務のメンバーと保健婦のメンバーが、民生委員や社会福祉協議会の協力を得て、事前調査を実施した。その結果を基に、実験的に、町内6地区のうち富沢地区を対象にサービスを試行することになった。まず、1人暮らしの高齢者宅を訪れ、サービスの内容について説明し、サービスを希望するかどうかを調査した。調査の結果、12軒の高齢者が、サービスを希望した。次に、目印となる旗とポストを製作した。この試行段階で、初めて、「ひまわり」というネーミングが用いられた。これには、「毎日まわる」という意味と、お年寄りをひまわりにみたくて、社会が暖かく見守るという意味が込められている。ここで、1つの問題が生じた。目印となる旗とポストは、もちろん、目立つものでなくてはならないが、逆に言えば、高齢者の1人暮らしであることを表示することにもなり、その結果、犯罪を誘発しかねないという問題である。しかし、メンバーが、この件で、警察に相談に行こうとしていた矢先に、警察の方から協力の申し出が入り、その問題は解決された。その後、現在に至るまで、心配されたような犯罪は起こっていない。

1995年4月、「ひまわりシステム」の試行が開始された。出発式の様子は、日本海新聞が取材し、共同通信を通じて全国に報道された。この年の10月には、もう1地区で、試行が開始された。そして、1996年4月からは、智頭町全域で実施されるようになった。

「ひまわりシステム」は、役場、郵便局の両者に、大きな影響を与えた。ま



1995年4月、ひまわりシステムの試行開始

ず、郵便局の方からみていこう。メンバーの1人である智頭郵便局副局长は、次のように話している——「現在行なっている『さわやかサービス』という職員研修運動（寺谷が中心となり、八頭南部会9郵便局に導入した研修運動）が幸いしている。とはいえ、当初は、局員たちは、かなり不安であった。実際、担当している全戸をまわりきれぬのかという不安や、郵便配達本来の業務に支障が生じるのではないかと懸念が、よく口にされた。しかし、ひまわりシステムの開始以来、1つ1つの問題に対して、皆で話し合い、解決に努めてきた。その結果、「ひまわりシステム」の導入により、郵便局内に、さらに活気が出てきた。従来、内勤の方が外勤よりも上、という意識があったが、このサービスの実施により、外務職員1人1人が誇りを持ち、仕事に取り組めるようになった。こちら側の得た利益は実に大きい」。

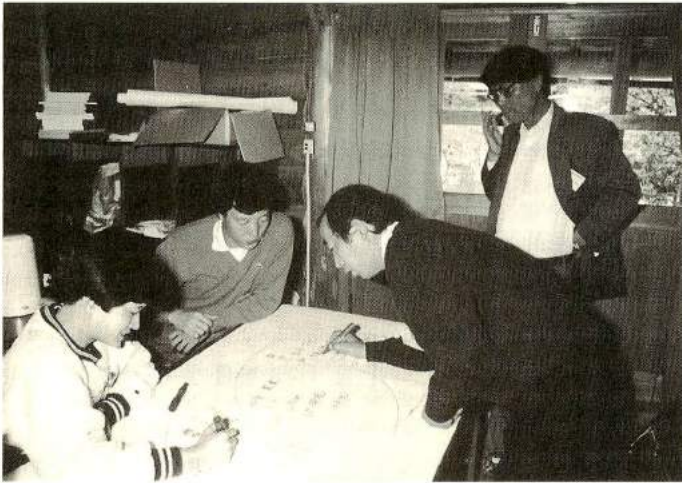
同じように、いや、それ以上に、役場の受けた影響は大きい。役場と郵便局は、同じ行政組織とはいえ、その立場は、大きく異なっている。郵便局は民営

化、分離・分割化という存亡の危機に直面している。一方、役場には、そのような危機感はほとんどない。それだけに、役場の職員は、よほど自覚的に、接客態度、電話の対応、効率的な業務遂行方法などを、他に学んでいかなければ、自らが向上することは望めない。今度は、役場側の意見として、小林の言葉を紹介しておきたい——「まちづくりPTに参加する中で、郵便局の活気が、役場側のメンバーたちにも及んできた。もし、これを、役場内だけでやっても、結局、なれ合いで、たいしたことはできなかったのではないか。他の組織を見て、自分の組織を見直すという点からも、郵便局とのタイアップには、大きな意義があった」。

「ひまわりシステム」の実現によって自信をつけたメンバーたちは、第2回目の会議のプレーストーミングで発案した項目の約8割を、2年間で達成した。「ひまわりシステム」は、中央行政組織のレベルで考えると、郵便局（郵政省）、町役場（自治省）、病院（厚生省）等が互いに縦割りの壁を取り払って、高齢者のための福祉システムを作ろうとしていることになる。中央では、なかなか進まない縦割り行政横断の新しい試みが、この山間の過疎地域で始まったわけである。

（2）智軸づくり

地域の進路が、行政のレベルによって左右されるのは言うまでもない。CCPTの中でも、「町を変えるには、役場を変えなければならない」との認識が、次第に強くなっていた。「智軸づくり」は、まさに、役場を変えていくための事業である。具体的には、住民による地域づくりをサポートできるような、地域プランナーとしての資質を持った職員の集まりに、役場を変えていく事業である。地域づくりには、各論に先立って、どのような地域を目指すかという、理念が必要である。理念の構築過程に参加すること、あるいは、理念を基に地域を見つめていくことは、地域プランナーの育成にとって、極めて重要である。「智軸づくり」は、智頭の理念、すなわち、智頭の軸——智軸——を定めようとする事業である。



杉下村塾では、閑空プロジェクト、智軸づくりについても議論された。

この事業が発想されたのは、1994年10月の杉下村塾（49頁を参照）の時であった。塾では、さまざまな講義や報告に加えて、グループに分かれてのテーマ別討議がある。後述する「閑空プロジェクト」のテーマについて討議していたグループから、「そもそも智頭の理念は何か」という問題が提起された。このグループの中には、「智軸づくり」プロジェクトに参加することになる人物が、含まれていた——鳥取在住の経営コンサルタント、神戸在住の地域づくりコンサルタント、CCPTのメンバーでもある智頭町役場地域開発課課長補佐の3人である。この問題提起を聞いた寺谷は、小林に、役場の中に、理念づくり、すなわち「智軸づくり」のプロジェクト・チームをつくることを提案した。

1995年1月14日、第1回のプロジェクト会議が開催された。メンバーは、指導者として、岡田、および、杉下村塾に参加した経営コンサルタントと地域づくりコンサルタントの計3名、町役場からは、助役のM氏、総務課長の小林、地域開発課課長補佐の3名、コーディネーターとして寺谷、そして、今回のプロジェクトにおいて、生徒とも言うべき立場になる7人の役場の若手職員であった。この7人は、小林が、「次の時代の地域プランナーとなるような人材を」という希望を込めて人選した。小林は、直接、7人に対しても、「10年後につ

ながるような面々を集めた」と話している。

さて、ここで、もう1つ重要なポイントがある。それは、M助役が出席しているということである。これは、助役が、この一連の動きを評価した結果であることはもちろんであるが、それに加えて、次のような思惑が込められていた。それは、7人の生徒たちに対する影響である。役場内では、選挙で選ばれる町長を除けば、助役が最上位の管理職である。その助役が出席しているという事実は、若手職員メンバーに、このプロジェクトに参加することへの正当性と動機づけを与える。また、役場を変えていくということは、職員1人1人を変えていくということである。そのためには、役場職員の一員であり、役場職員のトップである助役の参加は、極めて重要である。

このような緻密な人選のもとに、第1回の会議が開かれた。それ以来、大体、月1回のペースで会合が開かれた。会議の時間帯が、勤務時間外に設定され、また、各メンバーの事情もあって、なかなか全員がそろうわけにはいかなかったが、半数以上のメンバーは、ほとんど休まず出席した。

討議は、指導者と役場職員との真剣な対話を含みながら、創造的に進められていった。第1回の会議では、「グランドデザイン」という概念が提案された。智頭のグランドデザインは？そもそも、グランドデザインとは？——このような質問が、次回までの宿題として、3人の指導者から役場職員に対して出された。第2回では、役場職員から、グランドデザインとは、「町を個人としてみたときの生活設計である」という答えがなされた。また、「杉」に関しても、白熱した議論が展開された。智頭の未来を考えると、杉をどうしていくかは、避けて通れない問題であった。議論の当初は、杉には頼らない、あるいは、敢えて杉を無視していくという意見が主流であったが、討議が進むにつれ、やはり、杉を抜きにしては智頭の未来は語りえないという意見に、自然と収束していった。最終的に、杉に対する思いは、「杉トピア」あるいは「杉源境」という表現で、智軸の中に盛り込まれた。

このように、創造的に議論が進んだのは、3人の指導者に負うところが少なくなかった。岡田は社会システム論からの示唆を、経営コンサルタントは企業

経営的なノウハウを、地域づくりコンサルタントは地域計画の視点を、それぞれ提供した。「どの先生も実践的であり、また、1つの問題に対して、3つの切り口からの意見を聞くことができたのは、大変勉強になった。行政にいる人間としてショックでもあった」と参加メンバーの1人は語っている。

会議、あるいは、それ以外の場での真剣な議論を経て、智頭のグランドデザインがまとめられた。すなわち、生活・自治（マイ・ステージ）、交流・情報（ユア・ステージ）、森林・自然（フォレスト・ステージ）という3本柱が、理念として掲げられ、これら3つを、具体的にどう実践していくかが提案された。1995年9月16日の最終会議では、住民1人1人に、智軸を語っていくことの必要性が確認された。

さて、理念は明文化されたわけであるが、「智軸づくり」を通じて意図された人づくりの方は、果して成功したのであろうか。ある職員メンバーは、こう言っている——「先生方の話は勉強になったし、ある程度仕事を離れて、他のメンバーとこういう話をできたのはよかった。いろいろな課の人間が集まって、1つの方向に向かって話し合う、こんなことがなければ、それぞれ、別々に動いていただろう。それに、7、8人の間でも、同じ理念を持てたことは、非常に大事だと思う。これからの事業の立案にも関わってくるし、積極的に動いていきたい」。

しかし、他の職員メンバーは、次のように述べている——「具体的に、どの方向に、そして、どの様に進めていくか、今までにない勉強ができた。しかし、ひまわり（システム）なんかも一緒だが、これも上から決められたメンバーだ。CCPTの方にも誘われたことがあるが、参加していない。CCPTは、公民館活動や集落のしきたりといった、今までのことをすべて否定している。それらを活かしていくことも大事なのではないか。個人的には、地域活動に積極的に取り組んでいきたいが、役場とするのだったら、通常の仕事の範囲でいいと思っている。」

このように、職員メンバーの受け止め方には、かなりの違いがある。それに対して、小林は、こう述べている——「いい刺激にはなっただろうが、まだま

だ、CCPTのレベルのまちづくり戦略といったような意識はないようだ。言われてやっと動くレベルというところか。次の展開をどうしていくかが課題だろう」。智軸プロジェクトは、これからが本番と言っても過言ではないようだ。真剣に討議して作った案を、どこまで具体化していけるか——そこに、このプロジェクトの成否がかかっている。

(3) 関空シンポジウム

1994年12月3日、智頭町民にとって百年来の念願であった「智頭急行」が開通した。特急「スーパーはくと」に乗れば、智頭町から、わずか2時間足らずで、阪神地区にアクセスできるようになった。さらに言えば、「はくと」から関空特急「はるか」に乗り継げば、関西国際空港まで約3時間——それだけの時間で世界に飛び立つことができるようになったのだ。このように、智頭急行沿線の智頭町、用瀬町、佐治村といった町村にとっては、この上ない交通手段ができたわけだが、京阪神からの利用客がいなければ、赤字路線が1つ増えるだけの話である。智頭急行を地域活性化の起爆剤にしようとの意図から開催されたのが、「関空シンポジウム」である。

初めに、「はくと・はるか・関空」という言葉を口にしたのは、岡田であった。一方、CCPTも、すでに、智頭急行開通を活性化に結びつける方途を検討し始めた。岡田も含めての議論の中で紡ぎ出された、「はくと・はるか・関空」という言葉は、寺谷の感性に響いた。寺谷は、智頭急行の開業を約1ヵ月後にひかえた1994年10月28—30日の杉下村塾において、テーマ別グループ討議の1つに、「はくと・はるか・関空」をとりあげた。そのグループ討議の中で、「関空シンポジウム」の大筋が練りあげられた。

資金面について、寺谷と小林は、中国郵政局から資金援助を得ることを考えた。早速、寺谷は、中国郵政局の課長に打診し、プロジェクトの構想を伝えた。郵政局は支援の意向を示した。こうして、1994年12月、中国郵政局の課長と智頭町役場M助役、総務課長小林との面会が行われ、郵政局からの支援が正式に決定した。

京都 — 智頭 間 (平成11年12月ダイヤ改正)

列車番号	51D	53D	55D	57D	59D	61D	61D
列車名	特急 スーパーはくと1号	特急 スーパーはくと3号	特急 スーパーはくと5号	特急 スーパーはくと7号	特急 スーパーはくと9号	特急 スーパーはくと11号	特急 スーパーはくと11号
始発	京都	京都	京都	京都	京都	京都	京都
行先	倉吉	倉吉	倉吉	倉吉	倉吉	鳥取	鳥取
運転日						◆	◆
京都 発	704	950	1221	1421	1709	1851	1853
新大阪 〃	729	1015	1245	1445	1732	1915	1917
大阪 〃	737	1021	1250	1450	1740	1922	1923
三ノ宮 〃	756	1041	1310	1510	1759	1941	1942
明石 〃	811	1057	1327	1527	1814	1957	1957
姫路 〃	834	1120	1350	1550	1836	2023	2023
上郡 〃	858	1144	1414	1613	1859	2047	2047
佐用 〃	910	1155	1426	1624	1920	2059	2059
大原 〃	921	1207	1438	1636	1932	2111	2111
智頭 着	936	1221	1452	1651	1947	2126	2126

京都 ↔ 智頭 乗車券4200円 特急指定席3120円

その翌日、寺谷は、「明日、智頭急行沿線の3町村(智頭町・用瀬町・佐治村)の総務・企画担当者会が開かれる」という連絡を受けた。寺谷は、当初、智頭町のみで実行する予定であったプロジェクトを、沿線3町村の共同プロジェクトとして実行することによって、さらに効果を大きくしようと考えた。寺谷は、急遽、その会議に参加、共同プロジェクトを提案した。これに、用瀬町、佐治村も賛同した。

1994年12月28日、3町村のメンバーと郵便局のメンバーによる会合が開かれた。小林は、それまでの総務・企画担当者会で、3町村で1つの共同イベントを起こす気運を盛り上げてきた。そして、この日、具体的な案を提案し、事務レベルの組織として、「ふるさとづくり実行委員会」を設立、2月のシンポジウム実施に向けての準備が開始された。

1995年2月5日、智頭急行開通を記念し、初めての3町村共同のイベントが開催された——「どう活かすか 智頭急行シンポジウム」と銘うったイベント



1994年12月、智頭急行が開通。「スーパーはくと」から関空特急「はるか」に乗り継げば関西国際空港まで約3時間。それを体験する「関空シンポジウム」が、智頭、用瀬、佐治の3町村合同プロジェクトとして開催された。

が、智頭町で開催された。その壇上には、パネリストとして、3町村それぞれの町村長、そして、「智軸づくり」に指導者として関わった3氏の計6人が上がり、それぞれが思うところをスピーチし、客席の住民からの質問に答えた。会場には300人という、この種の集まりでは考えられないほどの住民が集まった。

これに勢いを得た「ふるさとづくり実行委員会」は、この年のメインイベントである「関空シンポジウム」に向けての準備に着手した。このイベントは、3町村の住民100名が、はくと、はるかを乗り継いで関空を訪れ、3町村出身で関西在住の知人100名とともに、関空でのひとときを過ごすというものであった。当初は、オープンしたばかりの関空で集いを催したいと考えていたが、それに適した施設がまだ完成していなかったため、次善の策として、アジア太平洋トレードセンターで開催することに決定した。

1995年6月3日、「地球をはばたくぞ はくと・はるか・関空シンポジウム」

には、約200名が集まった。催しとしては、シンポジウムと交流会の2つが行われた。シンポジウムでは、「21世紀の総合交通安全システムと智頭急行の役割」と題して、岡田の恩師である京都大学名誉教授の吉川和広氏が基調講演を行い、地域と都市が対等の立場で連携しあう時代が来たこと、知恵を出し合っ
て智頭急行を地域に活用していかねばならないことを訴えた。交流会では、郷土芸能が披露され、3町村からの来訪者と3町村出身の関西在住者が、旧交を
温め、智頭急行開通によって両者の物理的・精神的距離が大きく短縮されたこ
とを実感した。

こうして、「関空シンポジウム」は大成功を収めた。この「ふるさとづくり
実行委員会」による3町村共同プロジェクトは、1995年度から5年間、テーマ
を変え、中心となる町村を変えて、毎年、実施された。1995年度12月には、阪
神大震災のときに救援ボランティアとして活躍した「西宮ボランティアネット
ワーク」のメンバーを智頭町に招待し、シンポジウムや交流会が開催された。
1996年度は用瀬町の番であった。用瀬町は、旧暦の3月3日に行われる流し雛
で有名な町である。流し雛とは、紙や藁で編まれた人形を千代川せんたいに流すという
古くからの伝統行事で、毎年多くの観光客を集めている。1996年4月20日に、
用瀬町が中心となって行われた3町村共同プロジェクト「清流の里・夢紀行」
には、京阪神の人たちが流し雛に招待され、ホームステイも行われた。

(4) 「日本・地域と科学の出会い館」建設事業

すでに述べたように、CCPTは、岡田をはじめとする学者グループと連携
しながら、科学、とりわけ、社会システム論の視点から地域を捉える方法を学
んできた。一方、学者グループにとっても、CCPTとの連携は、自らの研究
成果を問うことのできる貴重な機会であった。CCPTは、科学と出会い、科
学と連携してきた自らの経験をさらに深化させるために、そして、広く一般住
民にも、科学と出会う場を提供するために、「日本・地域と科学の出会い館」
というステージづくりに乗り出した。それは、日々、活動を拡大するCCPT
にとっての拠点づくりでもあった。



地域と科学の出会い館

寺谷が、この建設事業の構想を固めたのは、1994年7月6日、京都大学に岡田を訪ねてから約1カ月後、8月16日のことであった。早速、寺谷は、その構想を岡田に電話で伝えた。岡田の返事は「大賛成」であった。すぐさま、寺谷は、前橋に連絡、また、折しもCCPTの実態調査に智頭を訪れていた杉万にも話をし、賛同を得た。その後、8月30日には、CCPTの会議を開き、出資金50万円を拠出しあって、「出会い館」を建設しようという提案を行なった。まさに、電光石火の行動であった。8月31日には、調査を終え、京都に戻ったばかりの杉万から、これまた電光石火のごとく、出資金50万円が届いた。「これで後には引けなくなった」と寺谷は語っている。9月28日、CCPT臨時総会が開かれ、「出会い館」建設のための役割分担が決められた。全体的な総括は前橋、施工はログハウス建設会社を経営するメンバー、公共機関からの援助の打診は役場に勤めるメンバー、そして、調整機能は寺谷が受け持つことになった。

当面の課題は、資金と用地の確保であった。資金については、CCPTメン

パーと大学人の出資に加えて、公共機関からの助成金が必要だった。CCPTは、岡田とともに、鳥取県市町村振興課長に構想を説明し、協力を依頼した。その熱意が通じて、振興課長は宝くじ助成金の可能性を探ってみようと約束した。これ以降、振興課長は、助成金獲得に尽力を惜しまなかった。年が明けて、1995年1月27日、振興課長から宝くじ助成金の内定通知があった。こうして、建設資金2500万のうち1500万を宝くじ助成金で、残りの1000万を各自の出資金で賄うという態勢が整った。助成金申請の過程で、「出合い館」の設計は、「智頭杉『日本の家』設計コンテスト」(1988年、44頁参照)の特選受賞者で、以後CCPTの一員となった河原が担当することになった。

用地の確保については、前橋、寺谷、ログハウス建築会社を経営するCCPTメンバーの3人が動いた。まず、彼らは、早瀬集落在住の元小学校長N氏に協力を依頼した。N氏は、構想に理解を示し、候補地を紹介した。しかし、その候補地は、地権者の事情で断念せざるをえなかった。その後も、用地探しは困難を極めたが、寺谷の郵便局の近く(早瀬集落)にさら地が見つかった。CCPTのねばり強い努力は、地権者の心を動かした。1994年11月7日、地権者から借用を認める旨の連絡があった。12月17日、早瀬集落の総寄り合いにおいて、住民に「出合い館」建設が発表された。住民は、拍手でそれに応えた。

こうして、1995年2月には、資金、用地両方の見通しがつき、本格的な設計作業へと進んでいった。6月の終わりには、地鎮祭が行われ、構想からわずか1年後の8月19日、基礎工事が始まった。決して十分とは言えない、厳しい予算的制約の下での建設であった。基礎工事、建設施工を請け負ったCCPTメンバーにとっても、また、そのメンバーに無理を承知で協力を要請する寺谷にとっても、胃の痛むような日々が続いた。

9月16日、都会ではみられないような棟上げ式が、盛大に催された。周辺から、200人を越える住民が集まり餅まきが行われた。工事は順調に進み、1995年12月16日の完成式を迎えることができた。完成式では、連話講座と称して、大学人・住民15人の講師による連続講演が行われ、その終了後には、全員で同じ鍋をつつきながら、「出合い館」という共有のステージの誕生を喜んだ。

最後に、少しだけ、「出会い館」の中をのぞいてみよう。「出会い館」は、ログハウスの技術を利用し、杉の丸太の特徴を活かした暖かい感じの建物だ。玄関に入って左側は、1階の炊事場、風呂、トイレ、2階の和室、洋室という居住・談話空間になっている。それに対して、右側は、尖った三角屋根の、一風変わった構造である。この三角屋根は「くさび」をイメージしたもので、閉鎖的になりがちな地域に、先鋭的な科学のくさびを打ち込むという意味が込められている。右側部分の1階は、「才縁巢（サイエンス）工房」と呼ばれ、さまざまな講演や討議が行われる生涯学習の空間である。

1996年には、杉下村塾が「出会い館」で開かれた。だれのものでもない、しかし、だれのものでもある——「出会い館」は、共有主義（コモニズム）の具現化だ。地域の人々が、地域を訪れる人々が、誰かと、何かと、新鮮な出会いを経験できる、そんな共有のステージが智頭に誕生した。

6 私と智頭（その3）——集落の中に

1996年6月13日、前橋、寺谷、小林の3氏は京都を訪問、岡田先生、私と会合をもった。3人は、寺谷氏が不眠不休で作成した企画書を持参していた。その企画は、智頭町にある89の集落によびかけ、行政のサポートのもとに、最小コミュニティ単位である集落ごとの地域活性化運動を展開しようという企画であった。やる気のある集落を募り、やる気のある集落から着手してもらう。着手した集落は、10年間の計画を立て、知恵と汗と金を出し合って、計画を実行する。そんな能動的な集落をつくっていかうという企画だった。

この集落単位の活性化運動には、「ゼロ分のイチ村おこし運動」という名前がつけられていた。ゼロ分のイチは、ゼロ（無）からイチ（最初の有）を創造する、いわば無限の跳躍を指す言葉である。1995年、岡田先生がウォータールー大学（カナダ）から名誉博士号を授与され、その記念講演を智頭で行なった。そのときの演題が「ゼロ分のイチ」。それ以来、ゼロ分のイチは、CCPTの共通語になっていた。

智頭町「日本ゼロ分のイチ村おこし運動」企画書

1 趣旨

智頭町の高齢化率は24%、加速度的に高齢化が進展している。人口も1万人まで減少、その1万人をさるのも時間の問題である。智頭町を、地域経営の視点で、鳥瞰的に捉えてみると、智頭急行の開通、鳥姫線の高規格化など、外との交通アクセスは、鳥取県の他の市町村と比較してみても、条件は整備されている。しかし、外とのアクセスが整備されるということは、反面、容易に地域外の力に影響されるということでもある。何ら魅力を持たない町は、単に、通りすがりの町となり、ずるずると外の力に引き寄せられ、求心力を失ってしまう。

しかし、その町が、マチとしての機能を持ち、誇り高い自治を確立するならば、21世紀において、「智頭町」に確固たる位置付けを与えることができよう。そのための小さな大戦略は、集落の自治を高めることにある。智頭町「ゼロ分のイチ村おこし運動」の展開によって、地域を丸ごと再評価し、自らの一歩で、外との交流や絆の再構築を図り、こころ豊かで誇り高い智頭町を創造できると考える。

「ゼロ分のイチ村おこし運動」としたのは、0から1、つまり、無から有への一歩こそ、建国の村おこしの精神だからである。この地に共に住み、共に生き、人生を共に育んでいくことの価値を問う運動である。この運動は、智頭町内の各集落が、それぞれの持つ特色を1つだけ掘り起こし、外の社会に開くことによって、村の誇り（宝）づくりを行う運動である。

2 この運動の柱

- (1) 村の誇り（宝）の創造——村の特色を1つだけ掘り起こし、誇りある村づくりを行う。
- (2) 住民自治——自分たちが主役になって、自らの一歩によって村をおこす。
- (3) 計画策定——ある程度長期的視点で、村の行く末を考え、村の未来計画を立てる。そして、その村なりの特色ある事業を計画し、実行する。
- (4) 国内外との交流——村の誇りをつくるために、意図的に、外の社会と交流を行う。
- (5) 地域経営——生活や地域文化の再評価を行い、村に付加価値を付ける。

3 各振興協議会へのメリットの提供

- (1) 智頭町の認定法人——智頭町役場と村おこし事業の窓口を務める。
- (2) 活動経費の支援——活動の2年間は50万円のソフト事業費（運営費）を助成する。

- (3) リーダーの民主的選出——住民の総意によって3年間の任期でリーダーを選出する。
- (4) 村おこしのための運営団体の組成——各種団体等を全て包含した組織とする。
- (5) アドバイザーの派遣——今年度は2集落に専門のアドバイザーを派遣し、次年度からは町職員を派遣する。
- (6) 各種情報の提供——智頭町役場は各振興協議会との交流やまちづくりのための情報を提供する。

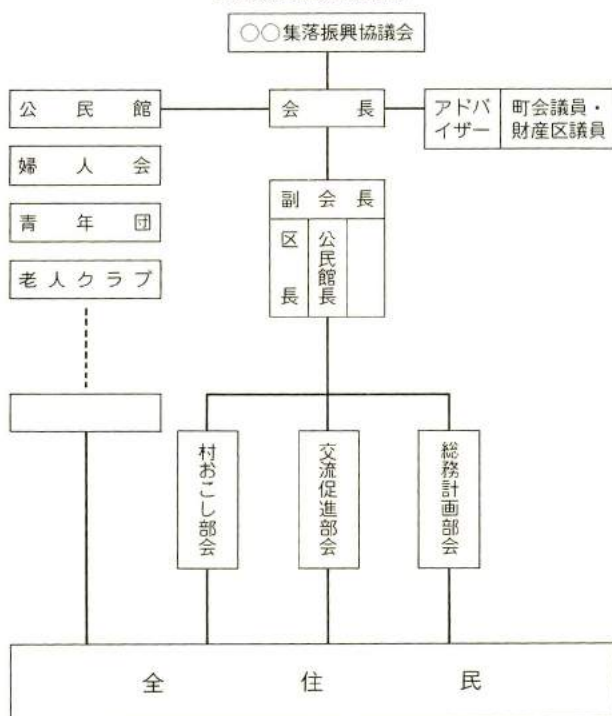
それまでCCPTがやってきた運動を、行政の力を借りながら、各集落に落とし込んでいく企画、すなわち、集落の「CCPT化」——私は、企画書を見て、すぐ、そう感じた。基本的に、賛成だった。すごい企画だとさえ思った。地方分権、地方自治などと口では言うが、単に、霞ヶ関の中央官庁から都道府県や市町村の行政組織に、権限や財源を委譲すればすむものではない。住民1人1人が、自らの地域の現状を見つめ、将来に向けての選択肢を考え、そこから自らの将来を選び取っていく姿勢、これなしには地方分権も地方自治も、絵に描いた餅になってしまう。そして、この姿勢こそ、CCPTが、それまでの運動で身をもって訴えてきたものに他ならなかった。

しかし、長年の中央主導の体制に慣れきった日本人にとって、この姿勢を身につけることは必ずしも容易ではない。明治以来の近代化、戦後の経済成長は、中央主導のもとに行われた。しかも、その中央主導の近代化と経済成長によって、貧困からの脱出が達成され、物質的に豊かな社会が実現した。また、近代化と経済成長の過程における懸命な試行錯誤、そして、成功経験によって、日本的ともいえる中央主導の社会システムは、きわめて完成度の高い社会システムに成熟している。それだけに、中央主導から地域主導へのギアチェンジは、かけ声だけでできるほど容易なことではない。

ここは、住民が、一步一步、自治を学習していくよりすべはない。そして、今、手元にある企画は、その学習のための社会システムを構築する企画であった。まさに画期的。しかし、――。

しかし、それにしても、少々、「押しつけ」が過ぎるのでは。企画書によれ

集落振興協議会組織図



ば、集落活性化運動に着手する集落は、全戸からの賛同と年会費5,000円を集めた上で、「集落振興協議会」を設立しなければならない。行政が音頭をとってやる以上、集落側にも何らかの組織を設立する、ここまでは理解できる。しかし、企画書には、上記の企画に引き続いて、集落住民が自主的に設立する集落振興協議会の規約、その条文の1つ1つまでが定めてあったのだ。

その「集落振興協議会規約」は、

第1条（目的） 私たちは、自らの一歩により汗をかき、知恵を出し、力を合わせて、村の誇り（宝）づくりを行うため本協議会を設立する。

で始まり、第2条に、基本方針として、前述の「2. この運動の柱」と同じ内容をうたった後、

- ・会長宅を事務所とすること

- ・全住民が集落協議会の構成メンバーであること
- ・集落協議会の活動はボランティア活動であること
- ・役員として会長・副会長（複数）・事務局長・部会長・会計・監査をおくこと
- ・役員の任期は3年であること
- ・役員は総会で選出されること
- ・3つの部会（第2条の3を担当する総務計画部会・4を担当する交流促進部会・5を担当する村おこし部会）を置くこと
- ・町役場との窓口になること
- ・役場が派遣するアドバイザーを受け入れること、全戸から年会費5,000円以上を徴収すること

などを定めていた。

さらに、この規約には、「集落振興協議会運営要綱」が続く。それには、

- ・集落協議会には、「〇〇の会」という略称をもつけること
- ・集落協議会が開く会議は、役員会（部会長以上）・部会・全体会の3つとすること
- ・会議の召集は、会長が行うこと
- ・会議の議長は、役員会と全体会では（議題となる事業を担当している）副会長が、部会では部長が務めること
- ・会議の進行は、次のようになされること
 - 1 開会の辞（役員会と全体会では担当副会長、部会では部長）
 - 2 あいさつ（役員会と全体会では会長、部会では担当副会長）
 - 3 事業内容説明（どの会議でも部長）
 - 4 協議
 - 5 決議
 - 6 あいさつ（役員会と全体会では会長、部会では担当副会長）
 - 7 閉会の辞（役員会と全体会では担当副会長、部会では部長）
- ・会議開催の連絡や事業実施の広報（集落内放送を含む）は、役員会と全体会では事務局長と次長が、部会では部長が行うこと
- ・集落協議会全体の調整には担当副会長・事務局長・次長、部会の調整には担当副会長と部長が当たること
- ・年会費は前期（5月に3,000円）と後期（10月に2,000円）に分けて徴収すること
- ・年会費の集金や配布物の配布には、月当番が当たること
- ・アドバイザーが必要なときは、会長が役場に要請すること

などが、細かく定められている。

以上の規約と運営要綱は、決して、規約をつくるときの単なるひな型、モデルではない。つまり、規約をつくるときの参考にしてください、というアドバイスではない。そうではなくて、集落活性化運動に着手するためには、以上の規約と運営要綱をそっくりそのまま、自らの集落の規約として宣言しなければならない。これが、前橋、寺谷、小林3氏の企画だった。

仮に、ある集落が活性化の必要性にめざめ、集落協議会のような組織をつくるとしても、その運営ルールは、その集落の自由にゆだねるべきではないか。しかし、企画書の趣旨は、この規約と運営要綱を受け入れなければ、集落協議会としては認めないということだ。そんな押しつけをされたら、いくら活性化の必要性を感じていた人も反発を覚えるのではないか。もし、私が居住する町内会に市役所からこんな企画が打診されても、きっと、そっぽを向かれるだろう。とくに、自主的に自らの地域のことを考え、行動を起こすような人ほど、強い反発を感じるだろう。

「企画の方向性には大賛成ですが、少々、押しつけが強すぎるのでは。」私は、率直に、感想を述べた。しかし、前橋氏ら3人は、「こうでもしなければ、集落というのは変わらないもんですよ」と、笑顔さえ浮かべながら言った。「ほくも、杉の木村の経験があるから——」と、岡田先生も3人をフォローした。

7 ゼロ分のイチ村おこし運動

智頭町は、1914（大正3）年の町制施行以来、1935（昭和10）年には、^{やまがた}山形、^{なぎ}那岐、^{はじ}土師、1936（昭和11）年には、^{とみざわ}富沢、1954（昭和29）年には、^{やまさと}山郷の旧村を合併して現在に至っている。これら6つの旧町村は、互いに山で隔てられ、異なる流域（谷筋）に位置するという地形によって、今でも、それぞれが、地区としてのまとまりを維持している。さらに、1つの地区には、10から25の集落が存在し、1つの集落は、8戸から190戸の世帯からなっている。1つの集落の家々は、軒を並べて、あるいは、1つの明らかなまとまりをもって並んでいる。それは、昔ながらの村落共同体を想像させる風景である。

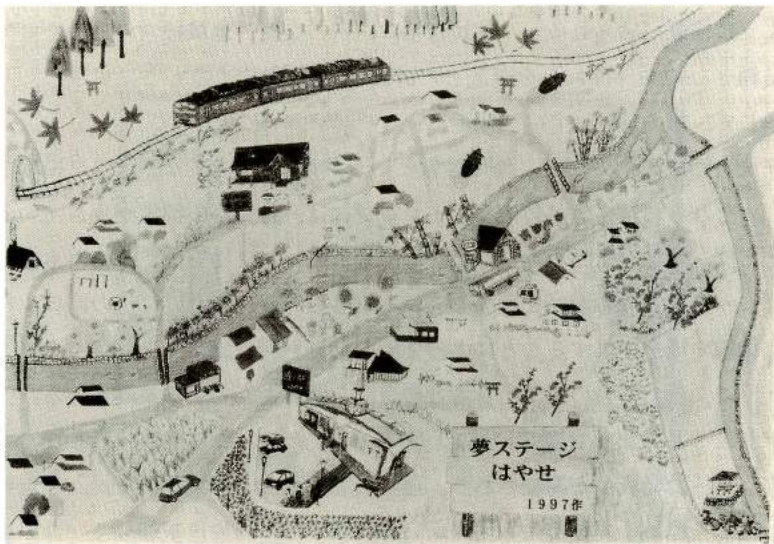
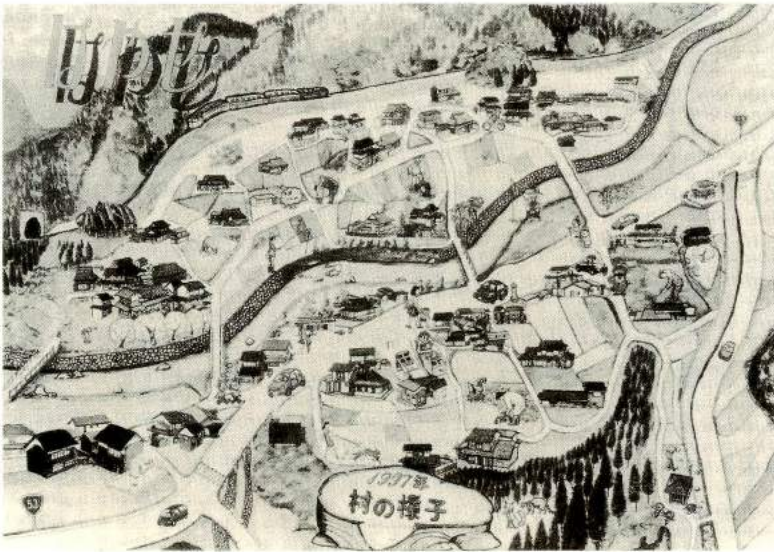
従来、集落は、文字どおり、1つの村落共同体として機能してきた。道、田畑、山林等の維持・管理や、祭り、結婚式、葬儀などは、集落総出で行われた——それらは、総事と呼ばれた。そこには、単に、総出で仕事をするというだけでなく、日々の生活を営む上で欠くことのできない集落の存在、住民が一体感を分かち合える集落の存在があった。

しかし、戦後の経済成長の過程で、集落は、村落共同体としての性格を失っていった。過疎化が進行する中で、集落に住み続ける人々も、近郊の都市（智頭町の場合は、約40kmの距離にある鳥取市）や町の中心部に通勤するようになり、いわゆる兼業農家が増えた。今や、集落は、所得を得る場としても、また、人間関係を得る場としても、以前のような重みを持たなくなった。確かに、現在でも、いくつかの総事は続いている。しかし、その総事は、副次的な地位に格下げされた集落の総事に過ぎない。昔ながらの「1軒1人役」（各世帯から1人が総事に参加しなければならないとするルール）も、その義務感だけが重くのしかかる。

住民にとって副次的になった集落に、今なお、残存するのが、保守的な体質である。戦後、農地解放はあったが、山林解放はなかった。多くの山林を所有する資産家は、木材不況が続く現在もなお、集落の意思決定を牛耳っている。集落の活性化につながるかもしれない意見も、一握りの資産家や有力者が首を縦に振らない限り、葬り去られてしまう。この新しい変化を拒絶する「田舎のいやらしさ」は、多くの若者に、ふるさとを捨てさせる。そして、多くの住民に、「長いものには巻かれる」の処世術を身につけさせる。

このような集落の現状に、くさびをうちこみ、集落をよみがえらせようとする運動こそ、「ゼロ分のイチ村おこし運動」である。その意味で、集落の復権をねらった運動だとも言える。初年度の1997年には、7集落が10年間という長丁場の運動に立ち上がった。さらに、1998年度には2集落、1999年度には1集落、2000年度には4集落が新たに参加した。

「ゼロ分のイチ村おこし運動」は、すべての人にとって初めての経験であった。まず、集落の住民にとって、自らの集落の将来ビジョンを自ら描くなど、



ゼロ分のイチ村おこし運動——早瀬集落の住民は集落の今（上）と10年後のビジョン（下）を絵にした。花桃やあじさい、ログハウス風の公民館、道の駅……それらは一歩一歩実現されつつある。

今まで想像もしなかったことである。将来ビジョンも、短期・長期の計画も、役場が考えてくれるものだった。第一、身近な集落の意思決定でさえ、資産家や有力者のお墨付きなしにはできなかったのだ。

行政も、しかりである。短期・長期の計画は、コンサルタントの手を借りて、行政が作成すべきものだった。その作成過程において、住民の意見を聴取することはあっても、あくまでも、計画作成の主体は行政であった。住民主体の計画作成と言われても、あまりの勝手の違いように、とまどうばかりであった。

さらに言えば、コンサルタントにとってすら、集落活性化運動は、全く初めての経験であった。従来のコンサルテーションは、行政を相手に、良質の計画を作成し、提出することであった。住民が、とつとつと、しかし、主体的に行う計画作成を、脇役として見守り、援助することなど、従来のコンサルテーションの範疇には含まれていなかった。

すでに述べたように、この運動には、5本の柱——村の誇り（宝）づくり、住民自治、計画策定、国内外交流、地域経営——がある。この5本の柱は、次のように位置づけられる——住民自治、国内外交流、地域経営の3つを直接的な目標としつつ、これらを徹底した計画性（計画策定）のもとに実践し、それを通じて、村の誇り（宝）を創出する。

住民自治、国内外交流、地域経営という共通の（直接的な）目標を掲げながらも、それらに対する具体的なチャレンジには、各集落の個性が現れている。たとえば、地域経営という目標に対しても、キャンプ場をつくる集落もあれば、そば、みそなどの特産品を開発している集落もある。また、都市の高校生に農林業体験の場を提供することによって国内交流を図る集落もあれば、インターネットによって都会の集落出身者との交流を深めようとする集落もある。

年度末3月の第1日曜日には、「ゼロ分のイチ村おこし運動」に参加している集落の活動発表会が開催される。運動に参加している集落の住民、老若男女がホールを埋める。小学生も何人かいる。さらに、運動に参加していない集落の人、町外の人も含められている。年々、発表する集落が増え、スライドやパソコンを使ったプレゼンテーションも上手になり、熱気あふれる発表会になって

いる。1999年度末の発表会では、「『ゼロ分のイチ村おこし運動』とは、一体、何なのか」という根源的な問いをめぐる座談会形式で発表する集落も現れた。

「ゼロ分のイチ村おこし運動」に参加している集落の活動については、岡田・杉万・平塚・河原（2000）を参照されたい。

8 私と智頭（その4）——理論

「ゼロ分のイチ村おこし運動」への助走が始まって半年くらいたった1996年12月8日、前橋氏の還暦祝いの会が、地域と科学の出会い館で開かれた。会もたけなわのころ、今後の抱負を語る中で、前橋氏が言った——「ゼロ分のイチは、CCPTの第2幕だ」。智頭という町を舞台に、CCPTという小集団が、猪突猛進、身をもって能動的な地域づくりを実践してみせた最初の10年が、第1幕。そして、今、第2幕では、最小コミュニティ単位の集落に、その能動的姿勢が移植され、住民自治の根を張りつつある。

私の不安は杞憂だった。いや、杞憂だったどころか、「押しつけ」は必要だったのだ。はたして、あの規約や運営要綱の押しつけがなかったら、集落振興協議会という制度を、文字どおりの新しい制度として、集落に導入できただろうか。新しい制度の導入は、決して、白紙の上になされるのではない。すでに、長年にわたって存続してきた伝統的な制度——寄り合い、常会などの制度——がある。しかも、伝統的制度は、そんなに「やわな」制度ではない。親も、祖父母も、曾祖父母もしたがってきた。そして、今の自分も、少々不平をこぼしながらもしたがっている。

もしも、「ゼロ分のイチ村おこし運動」の理念が提示されただけだったら、その理念は、いつしか古い制度に巧妙にからめとられたのではないか——まさに、長いものに巻かれてしまうように。そして、「ゼロ分のイチ村おこし運動」は、新鮮でも、また、革新的でもないものとして、とっくに失速していたのではないか。「ゼロイチは、水戸黄門の印籠ですよ。ほくと同じように、自分の集落はこのままじゃいかん、自分たちが動かないといかんと思っている、同じ世代の連中がいるんです。でも、その連中を思いどおりに動かしてくれるほど、

集落の体質は甘くない。だから、立ち上がろうとする連中のために、印籠が要るんです」——この寺谷氏の言葉を理解できるようになった。また、各集落をまわりながら、「その連中」の熱気に触れることもできた。

寺谷氏の言葉が理解できるようになったころ、大澤真幸氏の社会学的身体論に出てくる「贈与と略奪」の概念が頭をかすめた。「そうか、あの押しつけは、CCPT（とりわけ、前橋氏と寺谷氏）から役場へ、そして、集落住民への贈与（の試み）ではなかったのか。いや、さらにさかのほれば、2人が1984年に立ち上がって以来、智頭で展開されてきたことは、CCPTから一般住民、町役場への、人やイベントや建物の贈与ではなかったのだろうか。その贈与は、幸運にも、住民や役場によって略奪された（住民や役場が略奪してくれた）。この贈与と略奪の成立、しかも、連続的の成立が、次第に智頭の規範を変化させつつあるのではなかろうか」。

贈与と略奪。これをキー概念としながら、CCPTの足跡と現状を読みなおしてみた。そして、1993年、八河谷集落に3カ月住みついて、現地調査を行なった森永壽（当時、私の研究室の大学院生、現在、鳥根県中山間地域研究センター）を指導して、ひとつの論文を書き上げた。本章第4節は、その論文の主要部分である。同時に、その論文に書いたことを、杉下村塾でわかりやすく説明、ディスカッションの俎上にのせた。本章第3節には、そのディスカッションを収録した。まず、第3節のわかりやすい解説とディスカッションをお読みいただき、さらに正確かつ詳細な論述に関心のある方は、第4節に進んでいただきたい。

第3節 概念を共有する——智頭での対話

研究者が新奇なことば（概念）を口にする。わかりやすく説明する。「それって、こういうことですか?」「いや、ちょっとちがう。」また、別の角度から、別のことばで説明する。「ふーん、じゃ、その考え方で行くと、私たちがやってきた活動は、こう捉えていいんですね。」「そうそう。——いや、ちょっと待

て、本当にそれでいいのかな？」——こんな対話に熱が入り、あっという間に数時間が経過する。対話は、決して、直線的には進まない。紆余曲折。しり切れトンボに終わることもある。しかし、その対話の余韻は、次に会うまでの間、智頭に住む人と智頭を訪れる研究者双方の頭の片隅に残り、次回の対話へと熟成していく。

本節で紹介する対話も、そんな日常的な対話の一コマである。智頭町活性化プロジェクト集団（CCPT）は、1989—98年の毎秋、2泊3日の「杉下村塾」を開催（49頁参照）。毎回、智頭町内外で自らの地域を変革していこうとする人々、地域の問題に関心を持つ研究者や地域プランナー、約30名が集い、大いに語り合った。ここに紹介するのは、1997年11月21—23日に開催された杉下村塾での議論の一部である。議論の材料は、本章第4節のオリジナル論文。

まず、杉万が、贈与と略奪という概念を、交換という概念と対比させながら説明し、これまでの智頭町における活性化運動を、贈与と略奪のプロセスとして整理した。これを糸口に始まった議論は、3時間に及んだ。以下の議論における発言者は、本章第2節に登場する、岡田憲夫、寺谷篤、河原利和の3名に加えて、古川弘典（『ひまわりシステムのまちづくり』の出版社「はる書房」代表）、加藤晃規（当時、大阪大学工学部助教授）、松尾容孝（当時、鳥取大学農学部助教授）、西川公一郎（智頭町役場、CCPTのメンバー）。

なお、ここに収録したのは、3時間に及ぶ議論の中ほど、約1/3である。その全体は、「平成9年度CCPT活動実践提言書」（ホームページ <http://www.hi.h.kyoto-u.ac.jp/users/chizu/>）に掲載されている。

キーワード——贈与と略奪

杉万 まず、この論文のキーワード。それは、「贈与と略奪」です。贈与・略奪の反対語は何か、それは「交換」です。我々、日常的には圧倒的に交換。例えば、ものの売買。このコップ、「これは500円です」ときて、「はい、500円」とお金を払う。あるいは、道でひっくり返ったお年寄りがいるとき、立ち止まって抱き起こしてあげる。そうすると、にこっと笑

って、「ありがとう」と言ってくれる。これも交換ですね。抱き起こすという親切な行為と、「ありがとう」という感謝の言葉が釣り合っている。しかし、交換が釣りあわないこともある。抱き起こしてあげたのに、お礼も言わずに行ってしまう。なんて失礼なヤツだと思うわけです。でも、失礼なヤツだと思うってことは、「抱き起こす」という行為と「相手からの笑顔、お礼」を、ひとつの物差しの上に乗つけられるから、そう思うわけなんです。これは10 cm、あれは5 cm、だからこれの方が長い。自分は10 cmの行為をしたのに、なんで相手は5 cm（あるいは、0 cm）のことしかしてくれないんだろう。つまり、交換というのは、等価交換になっているかどうかではなく、共通の物差しの上に乗っかるということが大事なんです。物々交換というのも一緒に、私のこのコップと寺谷さんのあの灰皿、私は灰皿が欲しい、寺谷さんはこのコップが欲しい、だから交換する。その価値は、これを作るのに費やした時間に対応しているかもしれないし、あるいは、もっと単純に、それぞれ500円見当のものだからと、値段に対応しているのかもしれませんが。しかし、いずれにしても、物差し（時間、値段など）がある。

しかし、「贈与・略奪」には、この物差しが無いのです。すると奇妙なことになる。贈与と言っても、お中元、お歳暮のことではないですよ。あれは交換の最たるものですね（笑）。結婚式の時に仲人をしてくれた。お礼にお歳暮を贈る。これは、仲人の労とお歳暮の交換です。

「贈与」というのはですね。例えば、この灰皿があって、「寺谷さん、タバコすいたそうだなあ。この灰皿をとってあげたら、ありがとうって喜ぶんじゃないかなあ」と期待したら、交換になってしまいます。そういう気持を持ったら贈与にはならない。つまり、贈与というのは、相手の表情なんか見ない、相手の反応なんか予期しない。相手にとってプラスであろうとマイナスであろうと関係ない。捨てるがごとく行われなければいけない。ぼーんと置き放つ、こういう感じでやられなくちゃいけないのです。まさに自分がそこに置きたいから置いたんだ、あるものを作りたいから作った

だけ。とにかく自分が、ここに作ることがいいと思ったから作ったんだ、ここに置くことがいいと思ったから置いたんだ。受け取るか受け取らないかなんて関係ない。(灰皿を、バーンとおいて)これが贈与なんですね。

次に、「略奪」というのはどういうことかと言いますと、「お———— (ガバッと灰皿をとって)」。これですね。「おおお、いいもんあった、これ俺の。絶対、俺の。」これが略奪ですね。だれがくれたかとか、だれに作ってもらったかとか、まったく眼中にない。贈与と略奪、そこにはこれとあれを比較する物差しなんて全然ない。で、今回のこの論文を要約しますと、おそらくCCPTの13年間を語る上でのキーワードは、「贈与・略奪」なのではないかということです。略奪なんて言うのと、えらく物騒ですが(笑)。

前に話した例からもわかりますが、贈与する側から見れば、贈与は、一種の賭なんですね。だってそうでしょう。他人の前に置いたところで、これがどうなるか、まったくわからない。他人が目線を向けるかどうかもわからない。ましてや、それが相手にホントに喜んで受け取ってもらえるかなど、まったくわからない。ですから完全に賭なんです。さらに言うと、今、私が灰皿の例で実演しましたが、ある種のとげとげしさを感じたと思うんですね。取ってあげる、それに対し「ありがとう」、そんな安定感はないんです。とげとげしい。つまり、贈与・略奪は、ある意味で、戦争です。世界を異にする人間の間の戦争でもあり、賭でもある。

しかし、しかしですね、これがいったん成功したときには、贈与した側にも、略奪した側にも、大きな変化が起こる。それはどういう変化か。贈与した側は、両義性が克服されて、一義的な、我々が普通住んでる世界になる。我々が普通に暮らしている世界は一義的ですね。両義性にさいなまれることは、あまりない。その理由は、我々が、常々、贈与と略奪を成功させているからです。贈与・略奪は、他者との間に行われる。非常に短い時間のことを、ギリシャ文字を使って Δt (デルタt)と書きますが、ちょっと先の自分は、ある意味で、他者なんです。 Δt だけ未来の自分に贈与

する。 Δt 秒だけ過去の自分の贈与を略奪する。これが連鎖をなしていく。我々はいろいろなことを考えている。皆さんも、今、いろいろなことを考えていると思うのですが、 Δt 秒ごとに別々のぶつぎりを考えているのではなく、まとまりのある思考をしている。連続性のある思考をしているはずです。それは、現在の自己と、未来の自己（他者）の間で、贈与・略奪の連鎖が作られているからなんです。

それから、会話、これも微視的に見ますと、贈与・略奪の連続です。例えば、朝、寺谷さんに会ったとき、「おはようございます」って言ったとします。そしたら、寺谷さんが「なんか今日はえらい調子良さそうですね」、私が「まあまあですね」。こういった、たわいもない会話。これも贈与・略奪の連鎖なんです。それは、贈与・略奪が失敗した場合を考えてみると、よくわかります。寺谷さんが、「なんか今日はえらい調子良さそうですね」と言う。もし、私が、「え、調子がいい？ それ、どういう意味？ 胃の調子がいいということですか？ あるいは、僕は、元来、肩こりなんだけど、今日はこってないという意味ですか？ それとも、珍しく二日酔いではないということですか？」などと、応えたとしましょう。そうすると、寺谷さんは、きっと、「そんな面倒なことを考えて言ったんじゃない、ちょっと挨拶しただけです」と、げげんな顔で言うに違いありません。ということは、「調子良さそうですね」という贈与を、僕が略奪しなかった、ということです。贈与・略奪が挫折したわけですね。会話がうまく進む時というのは、略奪側が、贈与側のセリフを、自分のセリフの前提にしている時なんです。寺谷さんが言った「調子良さそうですね」というセリフを無条件の前提として、次のセリフをはく。寺谷さんは、その私のセリフを無条件の前提にして、次のセリフをはく。このように、略奪というのは、贈与側の前提を自分の前提に据えるということです。前提が変われば、同じことでも、その意味が変わってきます。贈与・略奪の略奪側への効果は、贈与側の前提を略奪側が自らの前提にしてしまうことです。

その点、交換というのは非常にあっさりしている。物々交換をしても、

抱き起こしてありがたいと言われても、それで終わり。一件落着すれば、交換によって、こちらの前提が変わったり、(すぐ後で述べるように)両義性が克服されたりということは起こらない。交換で何が起こるかという、物差しの信頼性がちょっと強まる、ちょっとですね、そういうインパクトだけです。

一方、贈与側に対する贈与・略奪の効果とは、意味の両義性が克服される(つまり、意味が一義的になる、それが何であるかが確定する)ということです。意味の両義性の克服というのは、自分の将来に対する読みとか、今の自分のあり方への確信が深まるということです。将来のことをどんなに読んで読んで読みまくっても、やはり、将来は一義的には読めません。所詮、将来は不確定だからこそ将来。将来が確定すれば、それは現在、あるいは過去なわけですから。不確定であるということが将来の定義。将来を読んで動いていくというのは、どんなに読んだって、どんなに戦略的に動いたって、不安定さ、不確定さを伴う。その不確定さが克服される。これでいいんだ、もっとこの線で先に進んでいいんだ、という確信が持てる。安定性を得ることができる。贈与・略奪が成功すると、贈与側は、そんな状態になれるわけです。

智頭で起こった贈与・略奪

杉万 この辺から当事者にも登場していただきまして、進めていきたいと思えます。まず、智頭町の活性化で忘れてならない特徴の1つが、最初、2人の人物から始まったということですね。「ひまわりシステムのまちづくり」の中で、私が執筆した章に、「たった2人から始まった」というタイトルを付けましたが、2人の間で規範が創出されたわけです。規範という言葉。この論文のタイトルも規範形成。規範というのは、とりあえず、1種の雰囲気みたいなものだと考えていただいて結構です。ただ、規範にも大きく2種類あって、1つは、あえて言葉で表現すれば、「何々すべし、何々するべからず、何々した方がいい、何々しない方がいい」と表現でき

る規範です。この手の言葉で表現できる規範を、「べし規範」と呼ぶことにします。もうひとつは「何々がある、何々である」という「である規範」です。

普通、規範（ルール）と言うと、赤信号ではとまるべしとか、たばこのポイ捨てはするべからず、といった「べし規範」を思い浮かべますね。でも、もう1つの規範、「である規範」もあることに注意してください。例えば、この部屋（杉下村塾が行われているログハウスのこと）は、我々にとって、勉強するところ「である」。しかし、これはそんなに一般的な「である規範」ではない。今ここにいる人にとっては、確かにそう「である」かもしれないけど、例えば、夏休みにここへ来てキャンプをする子供たちにとっては、ここは寝るところ「である」。ここが勉強するところであるという「である規範」は、我々という限定された集団の規範です。

話を元に戻しますと、約13年前から、2人の間で、いろんな規範ができていった。最初の頃、前橋さんと寺谷さんの間でどういった規範ができていったのか。そこから考えていきましょう。

1つは、「智頭の中だけを見るんじゃなくて、智頭をほんの一部とするような、もっと広い視野の中で智頭を捉え、智頭を企画的な思考で変えていこう、マネージメントしていこう」。おそらく、そういう規範ができていったんでしょうね。私にとって印象的なセリフだったのは、前橋さんが寺谷さんに言った言葉です——「智頭だけを見て智頭を動かそうとしても、智頭は動かない。智頭を囲む山々の稜線に、智頭をまたぐ三又をかけよう。智頭だけじゃなく、もっとずっと広い世界をみて、その中で智頭を変えていこう。」（→前節55頁）

また、非常に興味深いのが、こうして2人が出会ってから実施した3つのイベント、「木づくり遊便（杉板はがき）コンテスト」（→前節44頁）、それから河原さんがグランプリを取った「日本の家・設計コンテスト」（→前節44頁）、それから、今、私たちがいる「杉の木村」の建設（→前節44～46頁）。奇しくも最初から、みんな「杉」なんですね。杉の高付加価値化

です。また、イベントをやっつてすべて終わりじゃなく、それぞれ「落としどころ」を作っていく。寺谷さんたちの言う「落としどころを作る」とは、イベントを単発的な打ち上げ花火に終わらせるのではなく、イベントの成果として得られたノウハウを、必ず、現地の産業とか、もっと定常的な活動に落としこんでいく、定着させていく、そういう意味です。

3つのイベントのすべてが、杉を中心に進んでいっている。やっぱり、杉というのは、まさに地域のシンボル、無条件のシンボルだったと思うわけですね。しかし、杉は、智頭のシンボルであると同時に、伝統的支配のシンボルでもあった。国有林を除けば、ほとんどの杉は、大きな山持ち、資産家の私有物。その私有物である杉に、能動的な企画のメスを入れていこう、これが最初に寺谷さん、前橋さんがやり始めたことでした。そういう少数の山持ちに牛耳られてきた、それを前提にして生きてきた人々に対する、大きな挑戦でもあった。だから、初期の、2人には、大きな圧力がかけられた。長い間、静けさを保ってきた、智頭という沼があって、そこに、前橋さん、寺谷さんによって、気泡がぼこっとできた。しかし、沼は、その気泡を飲み込んで、また、もとの静かな湖面に戻してしまおうとした。そんな力が、すごく働いていたと思うんですね。ある人は無視し、ある人は圧力をかけて、「あれは一時の間違いだった」ことにしようとした。

智頭を、もっと広範囲な視野の中で捉えるという規範。伝統的体質のシンボルである杉に依存しつつも、それに新しい企画のメスを入れていこうという規範。これらの規範が、その後、住民や行政に贈与されていく。

ここで、最初の頃について、寺谷さんにうかがってみましょう。

寺谷 最初の頃はそうありたいという願望。もう少し心の中を言えば、くそやっつたれという気持ち。自分でもあそこは狂気を演じていたというように思います。倒すか倒されるか、五分と五分という覚悟でした。

杉万 何かの会合の受付のところで、「馬鹿が2人通ってる」と言われたそうですね。

寺谷 ええ、有名コンサルタントの人が言ったのは、世の中を動かすの

は、馬鹿か、よそもんか、若者（わかもん）か、だと。僕らは、端から見たら、馬鹿だったみたいですね（笑）。

杉万 結局、こういった過疎地を変えていく場合、過疎地だけじゃなくて、いろんな企業を変えていく場合でも、学会を変えていく場合でも、敵というのは、必ずしも、刃を持って挑んでくるわけではないんですね。岡田先生との論文の中にも書いたんですが、昔は貧しさの中の過疎だったわけですけど、今は違う。むしろ、都会よりもリッチ。おいしい空気をすって、おいしい野菜を食べて、車も2～3台あって、都会よりもリッチなくらいですね。リッチな中の過疎。昔のように貧しさを克服するために、というわけではない。そのような中で、何が敵だったかという、ひとつは、「余計なことをするな」という声ではなかったか。「そんなことしなくても十分ハッピーなんだ、少なくとも不幸せじゃないんだ、余計なことをするな」という声、これが敵だったと思うんですね。同じことは、我々の身の回りでも、組織の雰囲気を変えていこうとする場合でも、言えるような気がしますが、その辺、岡田先生、どうですか。

岡田 「べし規範」と「である規範」という話がありましたが、私のような第三者が、インターフェイスみたいにして入っていくと、「あそこは何々でいくべきであるという‘べし規範’がある」という‘である規範’（‘べし規範’があるという‘である規範’）に直面することがありますね。

杉万 今の岡田先生のご指摘は、規範を考える上での重要な点に関連していると思います。つまり、規範、例えば、戦争すべしという規範が確立されている状態というのは、普通思われているように、ほとんどの人が、戦争すべしと思っている状態ではないのです。そうではなくて、「ほとんどの人が、『(自分は必ずしも、戦争すべしとは思わないが、)ほとんどの人は、そう思っているだろう』と思っている状態」なのです。これがものすごい強制力、あるいは行動を起こさせたり起こさせなかったりする力になるわけです。おそらく2人が、ことを始める前というのは、「余計なことをするもんじゃない。人口は少しずつ減っていくだろうけれども、そこそこハ

ッピーではないか。ほとんどの人がそう思っているであろう」と、みんな思っていたんですね。住民それぞれが持っていた思い込み、幻想みたいなものではありますが、その圧力たるや、ものすごかったわけです。

寺谷 ひとつの言葉で言えば、「なんにもならんことはするなや」と。常に言われましたね。無駄なことをするなよ、お金儲けにもならない、と。社会も言いましたけど、親族も言いましたね。それでも人口はどんどん減っていく、明日は誰かが出ていく。そういう状況の中なんだけれども、なんにもならんことはせんようにしてくれ、と言う。それは社会全体のものすごい規範だった。

岡田 私には、敵の顔は全く見えなかった。刃を持って向かってくる積極的な敵は非常にやりやすい。実際の敵は、非常に消極的でね、先生がおっしゃった意味合いよりも、もっと消極的、何にもしてくれるな、やってくれるな、と。しかし(!)、今のままで十分満足だとは言わない(!)。かき混ぜてもらっては困る。関西弁で言えば、「めっちゃわるーない、そんなにわるかない」。しかし、今のままでいいんだとは言っていない。

寺谷 選択性がない。自分が見ると危機的状況だったんですね。敵は特定の人間ではなかった。それは、地域全体が持っていた規範であることに気づいた。持てる者と、持たざる者の規範の不合理性だった。そういうものに対する憤りがありました。

河原さんが参加された「日本の家・設計コンテスト」のとき、森林組合長を末席に据えたんです。実行委員長を上座に据えて、座席表を作って場所を指定して、末席に据えた。これに対しては、参加したみんなの考えていることが、露骨に顔に現れたですね。お前ら、なんちゅうことをするんか、と。あえてやってるから、こっちは心地よく見てるんですけど。決してその人が悪者ではないわけです。旦那さんであるとか、権力者に対する迎合意識。長いものにまかれろ意識。これに対する反逆、これを、座席表にした。

今、「日本の家・設計コンテスト」について、私の妻は、「智頭町がやっ

たように書かれている。お父さん、これはおかしいじゃないか」と言います。もうすでに略奪されているんです。当時の町長には、いっしょにやろうじゃないか、と2度ぐらい誘った。けれど壇上に上がらなかった。智頭町役場がやったというのは問題かもしれませんが、智頭町がやったというんなら、それでいいのではないかとと思っています。

杉万 そうやって、2人の間でできてきた規範が、いよいよ贈与・略奪の連鎖に乗って行くわけですけども。

岡田 そのころ、寺谷さんのことは知らなかったですね。風評は聞いてましたけれどもね、変な人がおると(笑)。

寺谷 岡田先生とは、1988(昭和63)年4月20日にお会いしたと思います。「日本の家・設計コンテスト」が動き出したのが、1988年2月の最終の週だった。杉の木村のログハウス事業をやる1年前、1987年に「木づくり遊便コンテスト」をやって、その次に何をやるかということで、住宅をやるということになりました。家具という案もあったんですが、なかなか人材がくれんだろう、住宅だったら工務店があるということで、住宅をやった。そして、その次に、杉の木村のログハウス造りです。岡田先生には、1988年の夏休みに杉の木村に入ってくださいました(→前節47頁)。八河谷の公民館で、村の人たちにもてなしていただくということで、村の人たちと学生との交流会をしました。杉の木村のイベントの企画は、7月頃に始めて、9月には骨格ができていた。その時、相談にのっていただいた。

杉万 前橋さん、寺谷さんからの贈与の第1号は、2人からCCPTのメンバーへの贈与だったわけですよね。CCPTメンバーに、2人が創った規範が贈与されていった。うまく略奪した人が今もCCPTに残っている。その1年ぐらい後に、岡田先生が入ってくる。前橋さん、寺谷さんによって、岡田先生という身体が贈与されたわけです、CCPTメンバーにね(笑)。贈与も3つある。身体を贈与する、事物を贈与する、言葉(意味)を贈与する。

寺谷 私の認識では、岡田先生が、体を持ってきてくださったのはもちろんですが、一番は、ものを見る眼・知識を略奪させていただいた。

杉万 その辺、複雑ですね。寺谷さん、前橋さんという2人は、岡田先生をCCTメンバーに贈与しつつ、前橋さんと寺谷さんは、岡田先生から知識を略奪していく。

寺谷 略奪させていただきながら、最後には、それを戦略化していく。

杉万 そのアウトプットを、また、住民に贈与していく。

古川 前橋さんと寺谷さんの出会いの場面では、贈与と略奪が、同時に起こったと考えていいのでしょうか。

杉万 違うと思うんです。実は、今日は、話を途中から始めている。前橋さんと寺谷さんの間で規範ができましたという時点から、話を始めています。実は、そこに、岡田先生が入ってきて、規範の再構築がなされるわけですが、それにもまだ触れてない。できたばかりの規範は、おそらく、当事者にとって、まだ不安定な規範だったはずで。それが、贈与・略奪によって、贈与する側は確信を深めていくし、略奪した側は、前提が根底から塗り変わっていく。その話をしているわけで、前橋さんと寺谷さんが出会い、最初の規範が、どうやってできていったかというところは、まだ触れていないのです。そこは、後回しにしたい。そこには、贈与・略奪とは違うプロセスがある。(注：贈与・略奪とは違うプロセスとは、本章第4節の用語を使うならば、間身体的連鎖を通じて抑圧身体が構成されるプロセスのこと)

寺谷 私と岡田先生との間には、贈与・略奪の関係では割り切れないところがあるように思えるのですが。

杉万 私も、おそらく、そうだろうと思います。というのは、岡田先生と寺谷さんの2人、あるいは、岡田先生、寺谷さん、前橋さんの3人の中では、当初、寺谷さんと前橋さんの2人が創出した規範とは、また異なる規範が創出されているからです。今まで話した、贈与・略奪は、あくまでも、創出された規範が伝達されるプロセスを記述する概念なのです。贈与・略

奪という伝達がなされると、贈与側の両義性が克服されること、また、略奪側の思考や行為の前提が、贈与側の規範によって塗り替えられることを説明してきました。規範が創出される、まさに、その瞬間のことについては、まだ、触れていないのです。

加藤 贈与・略奪は、不等価交換という言葉に置き換えることはできないのですか？

杉万 できないと思います。不等価というのは、等価でないということが明らかな場合です。これは1000円なのに、こっちは100円。これは不等価交換ですよ。でも、お金という尺度（物差し）がある。抱き起こしたけど、お礼も言わずに、つんとして行っちゃった。これも、不等価交換。道徳的価値という尺度にのせて不等価交換。要は、物差しがあるか否かということ。仮に、1000円のもの100円のもので交換されたとしても、お金という共通の物差しに乗っけることができるのであれば、交換と考えます。物差しなしの贈与・略奪とは違います。

岡田 贈与・略奪は、同時に起こるのか、順序があるのか。というのは、同時に起こる場合と順序がある場合とでニュアンスが違うんですね。例えば、贈与する、それを受けて誰かが略奪する。この場合は、非常に消極的と言いますか、略奪するという言葉とは裏腹に、非常にこう、ある状況を受容してしまうというか。

杉万 交換というのは、基本的に、同時的。交換が終われば、まさに一件落着。しかし、贈与・略奪というのは、ある程度、時間性が出てくる。贈与して略奪する。そこで終わりじゃなくて、インパクトを両方に残す。成功する確率はフィフティー・フィフティーなんですよ。贈与したものが略奪されるか、その保障はどこにもない。

岡田 贈与に略奪がついていかなければ、結果的に、それは贈与じゃないのですね。

杉万 そのとおりです。だから、贈与する、略奪すると言うよりも、「贈与-略奪が成立する」と言うのが、適切だと思います。

古川 一般に、贈与しつづけるということもあるわけですよ。

杉万 はい。それは、次の話のポイントです。予告編、ありがとうございます。
ます。(笑)

寺谷 個人間の交換というのは、暗黙の了解というのがある。「これとこれ、交換しようよ」「いいいいいよ」というように。しかし、贈与・略奪には、暗黙の了解というのがない。人間の持っている私的な能力の差によって、贈与・略奪が起こる可能性に違いがあるのではないか。つまり、能力のある方から能力がない方に、贈与・略奪が起こる可能性が高いのではないか、と思います。

杉万 いや、そうとは限らないと思いますね。とにかく話がまったく通じない、訳の分からない人って、いますよね。こうだこうだと言って、他人の言うことなどには、聞く耳を持たない人。そういう場合、もう、こちらの方が折れざるをえなくなって、しょうがない、あの人の言うことは、一応、認めて、先に進もう、となるかもしれません。そうしないと、話が先に進まない。その場合は、その訳のわからない、頑固者の贈与が、ある程度は、まかり通っているわけです。そうなるかどうか、やはり、フィフティー・フィフティーではありますけど。

松尾 あの、いやらしい言い方ですけども、いくらエネルギーをお持ちでも、誰にでもできるわけではないですから、誰かに期待して贈与されようとする場合には、人を見て贈与されます(贈与を受けます)よね。ということは、それ自体が常に、相手と同じ物差しの上ののって交換することになるのではないですか。

杉万 それは、次の、「なぜ贈与の‘連鎖’が起こらざるをえないか」という話に関係してくる重要な点です。贈与・略奪は、ワンペアでは完結しえないものなんですよ。つまり、何か必ず不完全さを残す。その不完全さを隠蔽するためには、連鎖が長くなっていかないといけない。ここ2、3年の智頭の動きを見ますと、贈与・略奪の連鎖が長くなったことがわかります。それまでは、割と短い連鎖の贈与・略奪だったが、行政に浸透するこ

とによって、贈与・略奪の連鎖が、強烈に長大化している。長大化すれば、当然、一番最初に贈与した人は誰だかわからなくなります。贈与・略奪、贈与・略奪、贈与・略奪……と10連鎖目ぐらいで動いてる人は、もう、そもそも、最初に贈与を開始した人が誰であったのかなど、考えてない。そんなこと、どうでもいいわけです。でも、見事に、この人も、最初の人
が贈与した規範を、自らの前提として動いてしまっている。

岡田 先生が先ほどおっしゃったように、訳のわからん人の言っていることを、条件付きで受け入れて会話を先に進めますよね。その人の贈与を略奪する。

杉万 採用するということですね。

岡田 それで、あるとき、その人の言っていたことがわかった。その時はどうなるんですか？ 当人同士の間では、ある共通の認識が獲得されたということがわかる。

杉万 その話は、規範の本質の話と絡んできます。「規範（に従っていること）自体を自覚できる」とは、どういうことなのか、という話です。今のところ、一応、規範を一種の雰囲気のようなものと定義して話を進めていますが、本当を言えば、ちょっとお茶を濁しているんですね。つまり、どういうふうにお茶を濁しているのかと言えば、まず規範というものがあって、それにみんな従うという図式を使って、お茶を濁しているわけです。この図式は、規範に関する、我々の普通の感覚でもあります。しかし、規範というのは、そうはなっていないんです。自己言及的になっているんです。つまり、規範は、そもそも、人々の動きによって作られたものであるにもかかわらず、あたかも、人々の動きに先立って存在し、人々の動きが正当であるか否かを判定するかのよう
に作動するのです。おみこしワッショイに喩えて言いますと、規範というおみこしは、そもそも、おみこしを担ぐ人々の動きによって、高い場所に支えられているにもかかわらず、あたかも、人々が担ぐ前から、その高い場所に存在していたかのように、そして、担ぐ人々に対して、担ぎ方の善し悪しを判定するかのよう
に、作動

するのです。これを、担いでいる人々から見ますと、自分たちが担いでいるおみこし自体が、自分たちに担ぎ方を指示してくる、という（人々が、おみこしを経由して、人々に指示するという）自己言及の構造になっています。今の岡田先生の質問は、この自己言及の構造自体を認識するというフェーズの話なんですね。この質問について本格的に答えるためには、お茶を濁している部分を、ちゃんとやらなきゃならなくなる（笑）。

古川 岡田先生の言われたことは、先生の言葉で言えば、少し時間差をもって、両義性が克服されたということでもいいんじゃないですか？

杉万 両義性の話とはちょっと違うんですね。両義性というのは、規範を認識しなかったって、根元的にある。

古川 その場その場で贈与・略奪の関係が納得されていなくても、3回目になって3回前の贈与が略奪される、ということもあるのじゃないか？ ひとかどの人物同士が会って、贈与・略奪しあうというのは、ありそうな話ではないですか。

杉万 贈与・略奪というのは、ある規範に含まれている集合体があって、それとは全く違う規範に含まれている集合体がある、という場合に起こるんですね。こっちの前提は、あっちの前提ではないというような。前提が通じ合わないような。そんな場合に、こっちの集合体から、あっちの集合体に対して贈与が起こりうる。そして、略奪が起こるかもしれない。例えば、最初の前橋さんと寺谷さんの出会いの中から、新しい規範が創り出される、そして、創出された規範が、旧態依然たる規範に含まれた集合体（住民や行政）に対して、贈与され始める。

古川 2人の「である規範」が、双方向的に贈与・略奪しあったという解釈は？

杉万 そういう考え方もできますね。例えば、寺谷さんが、中国郵政局で包まれてきた規範があって、他方、前橋さんが、いろいろ苦勞された人生の中で包まれてきた規範があって、ここに、贈与・略奪が双方向的に行われた。そう考えることもできないわけではない。実際、そういう面があっ

たと思います。しかし、今までの話は、2人の間で、新しい規範ができたところを、スタート点にしています。

古川 先生の話で大変わかりやすかったのは、昔からの「べし規範」というのがあって、その全体の「べし規範」の中に、前橋さんと寺谷さんの集団ができてきて、新しい「である規範」が、泡として創出された。

杉万 そうですね。大きな智頭という規範の中に、新しく小さな規範の「かや」が、ポツと創出された。

古川 その規範が創出される場面について、話してください。

行政への浸透——贈与・略奪の連鎖の長大化

杉万 いやー、困りましたね。私は、今、また裂き状態になっています。

古川さんは、最初の2人の出会いのことを話せと言われる。他方、贈与・略奪の連鎖が長大化した、それから先のことも話さなければならない。両方を、同時にしゃべるわけにはいかないですからね。

まずは、贈与・略奪の連鎖が長大化していく、そのプロセスを追ってみましょう。最初は、前橋さんと寺谷さんの間で作られた規範の、CCPTの人達に対する贈与でした。それから、だんだん、スケールが大きくなっていく。町中をよそ者（外国人や都会の研究者など）が歩くようになる。それを仕掛けている連中がいる。しかも、彼らが、ぼろぼろに失敗しているのならいざ知らず、かなりの成功を納めていくわけですね。そのよそ者を使って、イベントをやること自体、CCPTから一般住民への贈与なんです。そういうことが、まがりなりにも成功し、それをみんなが認めていく。それが略奪の過程。こうやって、住民の規範の前提が、だんだん変わっていく。

略奪の典型例は、今、私たちが杉下村塾をやっている、この「杉の木村」だと思っんです。もし、これが等価交換だったら、どういうシナリオになったか？ 例えば、こういうストーリーでしょう。前橋さんと寺谷さんが、綾木さん（前節59頁のA氏）のところを訪れる。「この八河谷集落の

奥の方に、岡田先生という人の協力を得て、カナダ人を呼んで、ログハウスを作りたい。」「それはいいことだね。是非やってくれ。わしらは、知恵はないけれど、労力を出すよ。」「造り終わったら、皆さんで、管理運営してください。」「うん、やりましょう。」それで、一緒に、一夏かけてログハウスを造る。八河谷集落の人も、農作業の合間をぬって手伝う。CCPTの人達も一生懸命やって、ログハウスができる。できたら、綾木さんが、「約束どおり、八河谷集落の人達で自主運営をしていきたいから、ノウハウを教えてください。」それでやり始める。もし、等価交換で進んだならば、例えば、こんなストーリーになったでしょう。しかし、実際は、そうではなかった。全く逆。つまり贈与・略奪。では、寺谷さんに、当時の事実を語ってもらいましょう。

寺谷 最初は、村の皆さんを全部集めて、町会議員と私で対話をしていったのですが、窓口を持たずに対話するというのが、非常に難しいということがわかりました。本当にしんどい。何日かけても、全員のコンセンサスがつかれない。「まあ、CCPTでやりましょう」ということにしたんですけど、CCPTの中では、前橋さんから、ずいぶん抵抗がありました。あんな住民の中に入って何になるんだ、と。しかし、計画書を作った後、報告したときに、「前橋さん、とにかくやりましょうや」と言いました。智頭町で、ひとつのモデルになるし、鳥取県の西尾知事が言う、ジゲ起こしの1つのモデルになるからやりましょう、と。そういう確信を持ってやりました。

それから、もう1つは、CCPTの中にも「何で、一生懸命造ったものをただであげなきゃならないのか」という人たちがいまして、これは、大変な議論になりました。多数決の結果、無償で譲渡しようということになりました。綾木さんをターゲットにしたのは、あの人は、「むらおさ」であるからで、旧態依然のリーダーシップ力を使おうとしたわけです。すべて、綾木さんを窓口にしていくのが、我々の作業をやりやすくするし、一番よいと思った。あの人を詰めさえすればいいですからね。「何で！約束

しとったのに。あんたせんじゃねーか」とかね。それだけの信義をもたれた方だとわかっていました。年齢も、私の父親みたいな関係でしたから。父には何も親孝行はできなかつたけれど、人間的に、私の父親と同じなんだと感じました。この人となら、できそうな気がした。ここまでできたから、綾木さんに、窓口になって八河谷集落をまとめてもらえんדרかうかと思いました。そこで、相談に行ったわけです。「そりゃ、いいことだな」と言われましたが、「いいことは、わかるんだけども、せにゃいけんことは、わからない」というところがあったし、「そんなものもらって、どうなるか」という発言もあって、いろいろ話し合いました。結果的には、強引に押し切ったというところがあるんです。まあ、半信半疑だったのでしょう。そんなことができるわけじゃないか、人が来るわけじゃないか、まして、外国人が来るなんて、さらさら考えられない、と。半信半疑というより、疑心暗鬼だったですね。

杉万 寺谷さんが、金槌でトントンやってたときに、――。

寺谷 ああ、そうですね。ログハウスの1つ、「杉(サン)ハウス」の立ち上げはできていたが、屋根ができてなかつたものですから、CCPTが総がかりでやろうじゃないかと、やってたわけです。僕は釘とか金槌というのは、どうも――。しゃべるのは、得意なんです(笑)。まあ、それで、金槌を持って、釘をたたいておったわけです。そしたら、手を叩いたわけです。それで「あいたー」と言ったら、みんな、「どしたー」と言いますわね。で、「手をたたいたー」と言ったら、「おまえ、金槌なんか持つからいけんのんじゃ。とにかく、みんなの周りを見とけー」と、こうなった訳なんです。で、見てるだけでは心苦しいし、掃除でもしようと思ひまして、綾木さんに話しかけたんですよ。「綾木さん、このログハウスをみんなが使うようになれば、これでやれると思う。みんなが、これだけ頑張ってくれるのはうれしいと思うし、綾木さん、よかつたなあ」って、本当に心から言ったのです。そうしたら、綾木さんが、どう言われたかつていうと、「人が来るようになったら感謝する」って。これには、愕然としました。

まあ、そりゃ、そうだろうな、というか、うーん、なんか、こう、振り返りにあったような、非常にさみしい思いがしたんです。けれども、まあ、こういうことしか言えない、そういう社会しかないのかな、と逆に考えましたね。多くの人たちが入ってこられるようになったら、みんな、僕に頭を下げて、ありがとうと言われるだろうと思ってましたけど、そうではなかった。さすがに、早く出て行け、とは言われなかったけれど。今は、そこそこ、ありがとう、というところまでは来てますけど――。

杉万 そうですね。略奪すると、もう、これは僕のもの、とね。

寺谷 ワシのもの(笑)。

杉万 けれども、それによって、彼らの「当たり前」が変わっていったと思うんです。寺谷さんにとってみて、まだ満足できる状態じゃないけど。この杉下村塾にも、八河谷集落からは誰も参加しないという状態ですから。まあ、でも、私は、彼らの前提に、大きな変化があったと思うんです。この杉の木村のプロジェクトがなかったら、とても起こりえなかったような変化が起こっている。非常に小さいけれども、CCPT的な方向を持った変化だと思うんです。

寺谷 ここ(八河谷集落)に入って、住民の方々と向き合って、紆余曲折しながら立ち上げながら、過疎の現状を私たちが学習したことによって、これから先生に解析していただく、智頭町の「ゼロ分のイチ村おこし運動」(→前節89頁)の大きな大きなベースを作ることができました。普通に考えたとき、住民運動、社会運動の中から、ここまで立ち上げるということは、ほとんどの方々ができないだろうと思うんです。村の人たちの表情なり、最近の綾木さんが、「杉の木村の八河谷です」と誇り高く言えるようになったこと、そういうプレゼントができたのは、私自身の人生の誇りにしているところであって、それは、すごいことだなと思っています。自分の村を紹介するときに、「芦津(集落)の隣の八河谷です」としか言えなかった人が、「杉の木村の綾木です」と、堂々と、鳥取県下であろうとどこであろうと、言えるようになった。そういう「誇り」を持たれるようになった

たことがすばらしい、そういうふうには思っています。

杉野 今、寺谷さんがおっしゃったことは、贈与・略奪が成立した場合に起こる変化ですね。

寺谷 百戦百勝という想いがありました。すべてのイベントについて、緻密なる計算をして当たったわけです。必ず勝ち取る。それは、先生がおっしゃった、前提が完全に切り替わっていくような、百戦百勝をするための緻密な計算です。岡田先生に会う前は、そのことを言わずに、カリスマ的な手法でやっていたわけです。ところが、岡田先生がいらっしやって、それはああなんじゃ、こうなんだと、全部べりべり破られるので、すべて言わなければならないようになったのです。この計算は、こういうふうにして、こういうステップを踏んで、こういうふうにすれば、こういうふうになるんです、と。だから、先生に会って、言葉をものすごく言わなくてはならないようになったんですね。それまでは、前橋、寺谷の言うことだから、何となく信じておればいいんだと言っていた。そういう雰囲気でも事をやっていたから、ある意味では、非常にごまかしていたわけです。自分らを信じないものは救われぬ、といったような態度で接していましたから。声の色も、顔の表情も。そういう形で人を引き込む、そういうものを演じてました。でも、岡田先生がべりべりと剥ぐ。「何で、先生、ちよくちよく手弁当で智頭に来て、僕を剥がれるんですか。私がなくなります」と言いました。「私は、緻密な計算でそれを演じてました」と。夜遅かったんですが、「先生、とにかく鳥取に早く帰りましょう」と言うと、先生が怒り出すんですね。講義を聴いて、まあ一杯飲みますと先生も気持ちよくなれます。で、「11時だから、先生、帰りましょう」と言ったら、機嫌がとたんに悪くなるんですよ（笑）。私は飲みませんから、車でお送りしようとしたら、そのとき、「あなたが学ぶべき人は、前橋さんだ。学ぶべきは人徳です」と。そう言われましてね、改めて送らせていただいた。ああ、そうだったか、と気づきました。

それでそのあと、前橋さんに、あるところで、「前橋さんは、人徳があ

っていいですね」と言葉をかけましたら、前橋さんが、すごく怒りだしましてね。「徳というものは、ふって沸いたり、生まれながらにして持っているものではない。瞬間瞬間に戦って作り上げるものだ。よく人に言われるんだけど、篤さんにだけは言っとく。徳が、自然にふって沸くと思ったら、おおまちがいじゃ！！」と食ってかかられたんですよ。ぐっと応えましたね。そうか、そういう捉え方をしているはいけんのだ、と。自分自身、徳のない人間なので、そこで戦わなきゃいけないのだ、とわかったんです。戦うのは、人とじゃなくて、自分だということが、わかったのです。

杉万 岡田先生、どうですか。何か一言。

岡田 今の話はよくわかんないですね。どんなこと、しゃべったんだか(笑)。ただ、とにかくお互いに相手がよくわかんないうちに、CCPTであるわけではないけど、CCPTではないとも言えない、そういう微妙な関わり合いでしたね。

杉万 河原さんも頻繁に来られていたんですね、杉の木村を作ったときに。

河原 僕は、「日本の家・設計コンテスト」でグランプリをとって、表彰式でおいしいお酒をいただいて、一泊しまして、帰る間際に、寺谷さんだったか前橋さんだったか、お話をいろいろかがいました。僕は、てっきり、こういうイベントは、役場がやるか、森林組合がやるかと思っていたんです。帰り際に、一般の住民の方の集団がやっているということを知って、これは面白い集団だと思って、杉下村塾に来るようになりました。

杉万 今の話も、この論文のどっかに出てくると思うんですけど。西川さんは、そのころ？

西川 私は青少年海外派遣の第1期生です(→前節48頁)。そのころ、私は、こういうことには全く興味がなかったんですが、役場の職員を海外派遣しようということで、白羽の矢が僕に立った。変な郵便局のおっさん(寺谷のこと)が、ゴミ箱に座ってると思っていた。椅子がないから(笑)。そしたら、郵便局長さんがやってきて、「やってみるか」と言われた。面白そうだから、やってみた。略奪して自分のものにした。居ながらにして、いろ

んなことが勉強できる、いいなあ、居心地いいなあ、と思っています。

杉万 今日の話の続きですが、結局、贈与・略奪は、単発あるいは2発ぐらいただと、どこかで破綻をきたすんですね。贈与・略奪しようと思っても、純粹な贈与・略奪、つまり、先ほど灰皿の例で示したような相手の顔も見えない贈与・略奪というのは、非現実的なんです。最低限相手の顔ぐらい見ないと。誰に贈与しようかくらいは考えるわけです。2つの集合体の間くらいでは、完璧な贈与・略奪が行われることは、まずなくて、どうしても不完全さを残す。贈与する側が、確信、自信、誇りを得、略奪した側は、贈与した側の前提を、自らの前提に取り込んでしまう効果、これが不完全に終わるんですね。では、どうしたらいいかと言うと、相手が見えないようになればいいんです。贈与は、どっかから来ていて、たまたま僕に贈与した人は、どこかで贈与を始めた人の代理人みたいなもの、となればいいんです。例えば、送り主の書いてない手紙を、田中一郎さんという郵便局の人が持ってくる。けれど、その手紙が田中一郎さんが書いたものとは、ちっとも思わない。どっかから来てるんですね。出すときもそうです。私ที่บ้านに「出しといてくれ」と頼んでも、家内は手紙を読むわけない、ずっと先の方が読むわけですね。これを、何ステップも踏む。この構造なんです。贈与・略奪の連鎖が、ずうっと続いていくと、今さっき言った効果が、かなりパーフェクトに実現されるんです。

つまり、この人（贈与・略奪の連鎖の途中にいる人）からみれば、もっと向こうに、本当の送り主であると同時に、最終的な受け手がいる、つまり、発信源でもあり、かつ、受信源でもあるような源がある、こうなればいいわけです。自分は途中の代理人みたいな役割で、ここで終わらない、ずーと向こうまで行く、こういう1つの幻想ですね。こうなると、ある意味で、さっき言った贈与・略奪の完成された図ができるんですね。そのためには、贈与・略奪の連鎖が長くならないといけな。連鎖が長大化していくと、もう、この人（源）は見えない。見えないんだけど、明らかに、ここ（源）から来た前提を、皆、自らの前提の中に取り込んでいる。こういう

1つの大きなシステムができあがる。これが、ここ2、3年間に生じた、CCPTと行政とのタイアップです。これを、私が、行政への「浸透」と書いたら、寺谷さんに、行政との「融合」にしてくれと言われてまして、「ひまわりシステムのまちづくり」では、そういうふう書いてます。

行政というのは、長い歴史の中で、住民の中に、ものすごい網の目を構成している。そこにCCPTが入っていく。そうすると、その網の目のことによって、CCPTの規範を流していくことができる。流していくためには、まずもって、CCPTから行政への贈与・略奪がなければいけない。その贈与・略奪の連鎖が、行政の網の目のことによって、長大化すると、住民にとって、自らの取り入れた規範的前提がどこから来たかなど、どうでもよくなる。前橋さんがどんな人か、岡田先生に会ったことがあるかなどということ、あまり重要性を持たなくなってしまうわけです。

3年ぐらい前は、ここ（最初の行政への贈与）が、なかなかうまくいなくて、無理矢理こじ開けて贈与したりしましたね。

寺谷 前の町長との関係ですが、十何年前、CCPTをつくった当時、町会議員をしていて、「前橋いうのは何や、CCPTをつぶしたる」というような意思を表明された。「なら、つぶせるもんなら、つぶしてみい。最初のうちは止めることができるけれども、絶対、流れは止めることはできん。やってみい」と言うて、前橋さんとその人が、大きな勝負をされたわけです。そういうのを聞いていた。

その町長は、町長になる前、議長になりたいと言って、金を配って捕まりました。そういうことに対して、私自身も大変な憤りを覚えた。それで、ずーっと、それまでの状況や、いろんな力を、半年にわたって分析していました。そして、1994年、CCPTの主だったメンバーが集まって、当時、竹下総理のほめ殺しという戦略がありました（笑）、殺してはいけん、褒め活かそうと決めたのです。それから、前橋、寺谷が戦うことは、なんぼでもやるけれども、戦って町が良くなるのか。若い人たちや、役場の職員も含めて、これだけその気になってきているところで、露骨に戦ったと

ころで何が生まれるのか、何も生まれん。ということで、褒め活かそうという作戦に、みんなが合意したのです。

そして、彼のことがわかった。「局長はしゃべるし、書くし、表現する。わじゃ、ペンを持ったとたんに書けなくなる」という話があったんですね。あっ、これだ、ということで、小集団をたくさん作って、徹底的にやっぺいこうと思いました。それと、郵便局の国際ボランティア貯金で、海外派遣というのが市町村長を対象にあるから、フィリピンに行ってもらおうとしたんです。しかし、1994年8月25日に、「町長から断られました」と連絡が入った。それで、総務課長に、「お前、あれだけ約束して、町長に海外に行ってもらって、若い人たちのために感じてもらおうと思っったのに、町長が断ったとは、どういうこった」と言ったら、「議会を開かなきゃいけんから行けない」という理由だった。そこで、町長に、「人がここまで努力したのが、わからんのか!!」と言ったら、「悪かった。お前らが、そんなに努力してくれていたのに、申し訳なかった」という答えがあった。そこで、「まあ、町長、すわりんさいや」と、対面に座って、「町長、実は、役場と郵便局の職員の『まちづくりプロジェクトチーム』が考えた、代行システム（『ひまわりシステム』のこと）という、お年寄りをフォローするシステムができた。町長、やろうぜ」と、全く話題を180度変えて言ったところ、町長が、いきなり、「おお、そりゃええ、やろうぜ」という話になって、そこで話をつけました。

杉万 「ひまわりシステムのまちづくり」には、裏本がいますね（笑）。

寺谷 みんな言っちゃいましたけど、そういうことです。

ゼロ分のイチ村おこし運動

杉万 ついでに、どの辺が一番大変でした？（笑）

寺谷 1996年5月24、25、26日の3日間、2晩寝ずに、私は、「ゼロ分のイチ村おこし運動」の企画書を作りました。プロジェクトチームが、その前年の9月に発足したんですが、半年たっても動かない。そこで、5人い

ればできる、5人決めよう、と言って、町長に委員を選んでもらって、4月21日から動き出して、5月24—26日、不眠不休で作り上げたわけです。6月13日に、岡田先生と杉万先生をお伺いして、京都で会議を開き、さらに確信を深めました。帰って、6月中に議会にもかけたわけです。しかし、なかなか通らない。7月には5回も議会が開かれたが、でも、だめで、これはなんでかと思ったら、役場にとっては、諸刃の剣であることを、総務課長が知っていたのです。

杉万 総務課長というのは、CCPTのメンバーですね。

寺谷 そうです。ゼロ分のイチのすごさは、そこなんです。それで、これは住民運動を起こさなければいけないと思いました。そこで、私は町会議員を集めたんです。智頭町はどうあるんか、集落はどうなるんか、皆さん方は何をせにゃいけんか。「出会い館」に集まっていたら、これを認知してもらわねば、智頭町は大変なことになる、と危機感をはっきりデータで示しながら話した。でも、聞いている町会議員さんの顔を見とったら、ちんぷんかんぷんのような様子でした。それから、住民の有志の方にたくさん集まっていたら、村おこしをしなければ、大変なことになると訴えました。これ（村おこし）を、みんなが持つことは、実は、伝家の宝刀、水戸黄門の印籠を持つことになる。これを持っておれば、県だろうと国だろうと、堂々と出ていけますよ、とこういう話をして、誰を攻めるか決めましたけども、それでも動かない。そこで、7月21日の夕方、助役と話し合いをしました。「助役、あんたは何をもって助役か」。そしたら、助役が、「智頭町のことを、ほんと考えなきゃいけん」と。「智頭のことを考えにゃいけんということはわかるけれども、なんでゼロ分のイチを認めれんのか。誰に問題がある。町長にはOKをとってるのに、誰が止めてるんだ」と問い詰めました。そしたら、「わかった、ワシに任せてくれ」ということになった。それで、7月22日の朝の9時、助役から電話が入りました。「局長、町長と最終的にゼロ分のイチを実施するというのを正式に決定した。後のことはよろしく頼む。おかしいことを言うようだけど、智頭町のこと

を頼んだぜ」と。こう言われまして、「私にできることなら」と応えました。これで動く、と思っていたんですが、まだ動かんのです。8月9日に、町会議員の全員協議会を開かなければ動かんというわけです。それで、また、町会議員や総務課長に話をし、8月9日に、「ゼロ分のイチ」の骨子を町会議員に説明してもらい、即座に、8月10日、早瀬集落で、役場職員に出かけてもらって集会を開き、やっと1歩を踏み出したのです。

早瀬集落のゼロ分のイチ運動

杉万 今の話は、まさに、「ゼロ分のイチ村おこし運動」の最初が、交換ではなくて、贈与・略奪に他ならなかったということを証明していると思います。今のは、行政への贈与の話でした。しかし、現在、7つの集落が、この運動に立ち上がっています。寺谷さんは微妙な立場だったと思うんですね。よろしく頼むと言われたけれども、やはり表だっては、総監督の位置には立ちにくい立場。しかし、寺谷さんが早瀬に居住されているということで、早瀬が、かなりアクティブに動きますね。早瀬集落にとっても、ゼロ分のイチというのは、贈与・略奪のプロセスだったと思うんです。今でこそ、長石先生（早瀬集落・ゼロ分のイチ運動の会長）が、生き活きと、ゼロイチ運動についてスピーチをしたり、文章もつづられているけれども、決して、すんなり等価交換で始まったこととは思えません。強烈な贈与・略奪があったと聞いていますが、その辺の経緯を。

寺谷 早瀬には、12年半住んでますけれども、言うなれば、よそ者が来た、那岐で局長になっても、もともとはよそ者だ、ということでした（注：早瀬集落は那岐地区の一集落。寺谷氏は、早瀬集落にある那岐郵便局の局長）。智頭町生まれでも、地域を越えると、よそ者だということで、非常に冷たい仕打ちを受けました。何かの動きをすれば、いろんな人からいろんなことを言われて、本当に冷たいなあ、と思いました。ものの本には、ふるさとは暖かいものだを書いてあるのに、なんて冷たいんだろうと思いました（笑）。

非常にびっくりしたのは、子どもが1歳になるかならんかのときに、おしめの干し方を褒めてもらったんですね。おしめがきれいに干してある、と。そこまで言われて来ると、まあ……という気持ちがありました。なんかイベントでもやろうものなら、電話はかかってくるし……。集中砲火です。変な人が来た、変わり者だと言われました。

今から4年か5年前に、公民館長をしろと言われたんです。それを、意地悪で指名された、と私は思いました。「誰がしたるもんかい。これまでの仕組みでは、副館長が館長になっとったのに、何でワシがせにゃいけんのか」と、みんなの前で言ったわけです。私も手を回して、助役から、「ゼロ分のイチを立ち上げるから、局長は、唯一のプランナーで協力してもらわにゃいけんから、村に引っ張ってくれるな」と話してもらったのです。そういうことをしながら、ゼロ分のイチを早瀬の中に落として、この冷めた空間を、いかにほほえみの空間にするかということが、私の人生のものすごく大事なことだと思ったわけです。結果として、それはできました。で、公民館長も、2年前に大下さんが、局長がここまで苦しんどるのにさせるわけにはいかん、と。村を立ち上げるということに対して、局長の努力はようわかるし、ワシが局長の代わりにさせてもらうつもりでやらせてもらう、ということで、公民館長を受けていただき、2年間、公民館長をされました。その際、「私を排他する人を、排他してはいけませんよ」と言いました。公民館長というのは、村のみんなが認めあえる社会を作っていくのが仕事だと思う、これから私は、村の1人1人が認め合うことのできる仕組みをつくっていきたくないので、私の立場を理解してほしい、と言いました。まだ、ゼロ分のイチについて公に言えなかった段階でしたけれども、私は、そういう構想を立てているので、ご理解いただきたい、ということ、長石先生(83頁、元小学校校長N氏)、服部さん、大下さん、私の4人で、1995年12月の終わり頃、出会い館の2階で話しました。

杉万 初期の頃、なかなか長石先生が会長就任を引き受けてくれなくて、いらいらしていた時期がありましたね。

寺谷 ええ。私は、4年前、公民館長をしろと言われたとき、頭に来るし、誰が聞いてくれるかなあと思ったら、長石先生は聞いてくれる何人かの1人だったですね。長石先生のところに行ったとき、「先生は70歳にもなられるのに、村のことはひとつもせず、智頭町の音楽活動をされてきたのは、ようわかるけれど、この村が死んでいくところを放っておいて、どう思っ
ていらっしゃるんですか」と、お茶をよばれながら、説教したんですよ。そしたら、長石先生は、「その通りで申し訳ない」と（笑）。本当に、そう言われましてね。それで、今では、親子みたいな関係なんですけども。1日、顔を見ないと寂しいような関係に、すっかりなっていました。奥さんもそうなられて。それで、雪の中を訪ねて、私はルールは破ったけれども、どうしても村の明日をつくりたいと、頭を下げに行かせていただいたわけです。そうしたら、「局長の気持はようわかっているから、村をよろしく頼む」と、そういうことを言ってもらえるようになりました。そして、村でいろんな動きが起きてきて、今では、全部手縫いでハッピーをつかったり、花を植えたり、そういう動きに変わってきたのです。

また、そういうことが、村の外から認められるようになった。那岐地区のある会社の社長さんが郵便局に来て「局長、お前のやり方は正しかった。わしゃ、間違っと思った。どういうことかというと、わしは、自分の身銭を切って世の中に奉仕しようと思っていた。お前は、自分の身銭を切らんで、みんなの金を集めて、世の中に奉仕した。それはすばらしい」こういうふうに言われました。早瀬のみんながバレーボールで優勝したり、産業祭に品物を出して7万円ぐらい売り上げた。ハッピーを着て、みんながやった。そのことに対して、その方は、翌日の朝礼で、「あれだけババラケの早瀬がまとまって、村というものを考えていくようになった。これはすばらしいことだ」と話されたと聞きました。そのことを長石先生に言ったんですよ。「ババラケな早瀬が、あれだけまとまったという話を、社長さんが朝礼で話されたそうですよ」と言ったら、長石先生が、「大きなお世話だ」と言って（笑）。「だけど、先生、褒めてもらってるんだから、いいじゃな



ゼロ分のイチ運動で「あずま屋」も誕生（早瀬集落）

いですか」と言ったりしたんです。

杉万 すごく印象的だったのが、早瀬集落のゼロ分のイチ運動が始まった頃、まだ、雰囲気すごく静かなときに、横で見させてもらったんですが、時計が夜11時を回った頃、80歳ぐらいのお年寄りが、ぱっと立ち上がって、「俺達がやらなきゃだめだ」ってね、こう宙をにらんで大声で演説をされるわけですね。あれだけの宙をにらんでの決意表明、80歳まで生きた人の力強い訴えというか。見えない壁、敵、受け身であり過ぎた過去、そういうものに対する挑戦ですよ。

寺谷 だと思えますね。80歳になっても、集落の規範に呪縛されているというのが、よくわかったですね。それをふりほどくことは、すごく勇気が

ンスのいい人だからいいけれども、有力者には従うものである、長いものには巻かれるものであるという、地域の前提は変わってないと思うんですね。河原さんが、些細な1歩を踏み出している集落と言われましたが、そんな集落は、みんな不器用だし、目に見えてどうこうというものが少なくても、なんか根底の体質自体が変わっていつているから、10年先を見通すと、かえって楽しみな感じがするんですね。

古川 早瀬に限って言えば、長石先生は大変な人物だと思いますが、大きく分けて、有力者というわけではないんですか。

寺谷 長石先生は、従来の見方では、有力者だと思います。ところが、村というのは長い間、本家・分家の関係がありまして、先生は分家ですので、本家の方がいらっしゃいますから、本家にはものが言えない。だから、先生が、すべての中で有力者かと言われれば、そうではなかったと思います。ところが、今回のゼロ分のイチの運動で中心になられた、と私は見ています。

古川 そうすると、昔の智頭、杉を中心とした社会の中での有力者ではなかった？

寺谷 そうです。私が思うに、贈与というのは、向き合わなければ起こらない、自分としてはそう思っています。上から下に、はい、どうぞ、という、そういうのでは真の意味の贈与・略奪というのは起こらない。やっぱり向き合って、本当に、こうだぞ、という一言をぶつけていく。人間の心の中にある、腹の中にある本心を、発露として出していく。それが企画であったり、言葉であったり、形であったりする。そうすると、すごく良い意味の略奪になると思います。

(議論は、まだまだ続いた。)

第4節 理論的考察

1 規範形成の理論

まず、智頭町における活性化運動を考察する理論的拠り所となった、規範形成プロセスの理論について紹介しよう。規範とは、行為を、妥当なもの、正当なものとして定位し、妥当ではない、正当ではない行為から区別する操作のことである。規範によって、妥当なものとして特徴づけられている行為にとっての、対象の妥当な同一性——それが何であるか——が「意味」である。規範には、認知的規範（前節の「である」規範）と価値的規範（「べし」規範）が含まれる。認知的規範とは、違背的な事象の出現に対して、妥当・非妥当の区別が変更される規範であり、価値的規範とは、違背的な事象が出現しても、妥当・非妥当の区別が変更されない規範である。

これまで、規範形成のメカニズムを説明した理論、とりわけ、規範的に白紙の状態から、いかにして規範が形成されるのかを説明した理論は、ほとんどない。例えば、デュルケームが提唱した集合表象は、神話、民話、思想、知識など、1つの社会の中で客観的に確認され、それが内面化している、すべての象徴、認識の働きを指している（Durkheim, 1924）。この集合表象は規範とほぼ同義の概念とみなしうるが、集合表象がいかにして形成されるかについての論述は見られない。デュルケームの流れを汲むモスコビッチの社会的表象論においても、未知の対象を、係留（分類・命名）と物象化によって、既存の社会的表象の中に位置づけるプロセスについては論述されているが、社会的表象の原初的成立に関しては何ら言及されていない（Moscovici, 1984）。構造機能主義を掲げたパーソンズにしても、社会システムを構成する要素として価値・規範・集

注：本節の前半「1 規範形成の理論」は、膨大な理論（大澤, 1990）を要約したものであり、読みすすむのに困難を感じる読者が多いと思われる。その場合には、原典にあたるのが望ましいのはもちろんではあるが、わかりやすい解説として、楽学舎（2000, 第5・7章）があることをつけ加えておく。なお、理論面の詳細に関心のない読者は、本節を飛ばしていただいてもかまわない。

合性・役割をあげ、規範は価値によって規定され、それぞれの集合性や役割を規定するとしているが (Parsons and Shils, 1951)、規範そのものの形成過程については論じていない。また、サンクションによって人々の行為が制約され、規範が形成されるというように、規範の形成をサンクションから説明する立場もある。しかし、そもそも、サンクションがサンクションとして存立するためには、サンクションの対象となる行為が、規範から逸脱していることの認識が必要であり、既に規範の存在が前提となっている。

この規範形成の原初のプロセスを論じたのが大澤の身体論である (大澤, 1990)。大澤の身体論によれば、規範は、内在的経験の中から、その経験そのものを規定する超越的身体が、内在的世界の外部に、もともと存在していたかのように構成 (擬制) されることによって形成される。この超越的身体が、内在的世界の妥当な可能的様態を指定する操作が、規範に他ならない。この超越的身体がいかにか構成されるかを理論化することによって、規範形成のプロセスを説明したのが大澤の身体論である。

以下、大澤の身体論を、本節の考察に必要な限りで要約しておこう。⁽⁵⁾

大澤は、規範形成のプロセスを、意味の成立以前の物質性の水準から論じている。この「物質性」とは、経験の可能性の構成的な制約としての自然の状態である。物質性の水準は、感覚遮断実験の報告や分裂病患者の訴えの中に現れる、事物と身体の違いもない、極限的な水準に見ることができる。したがって、ここでいう物質性とは、分子や原子などといった自然科学が対象とする自然の状態や、あるいは感性的知覚に現出する周囲世界的な自然の状態を指すのではない。

この物質性の水準において、主体が対象を知覚する、主体が対象に対して働きかけるといった、主体の対象に対する関係が成立する。これが「志向作用」である。見る・聞く・考える・想像するなどといった対象に向かう働きは、すべて志向作用に含まれる。そして、この志向作用の対象となりうると同時に、志向作用が帰属しうる物質が「身体」である。

ここで重要なことは、志向作用は、主体の側に能動性が存在するだけではな

く、対象の側にも能動性が存在することによって初めて成立するということがある。主体の能動性とは、事象を近傍に配置して把握しようとする働きであり、これを「求心化作用」と呼ぶ。また、求心化作用が帰属される（主体側の）点を「求心点」と呼ぶ。一方、対象の能動性とは、対象が求心点を他所に動かそうとする働きであり、これを「遠心化作用」と呼ぶ。また、遠心化作用が帰属される（対象側の）点を「遠心点」と呼ぶ。志向作用は、この2つの能動性によって初めて成立するのである。求心化作用と遠心化作用は、常に、同時に生じ、いわば、表裏一体の関係となつて、志向作用を構成している。

さて、この水準では、遠心化作用によって、求心点は常にどこかに動かされるため、求心点・遠心点は、常に移ろうことになる。さらに、求心点と遠心点が反転することもある。すなわち、それまで遠心点であった身体が、今度は求心点となり、それまでの求心点を求心化作用の対象とする——同時に、それまでの求心点であった身体が、今度は遠心点となり、それまでの遠心点を遠心化作用の対象とする——ことが生じうる。この反転は、いわゆる類推とは異なり、志向作用の主体と対象が、根こそぎ反転してしまうことである。

この水準——連動する求心化作用と遠心化作用、および求心点と遠心点の反転が支配的な水準——において、ある同一の対象が複数の異なる志向作用の対象となることがある。すなわち、ある1つの志向作用を、複数の身体が共有することが起こる。これを複数の身体が「間身体的連鎖」を張ると呼ぶ。

この間身体的連鎖が張られている時、1つの志向作用を共有する身体の数十分多く、個体としての各身体の相対的意義が十分に小さい場合、あたかも、対象が、個々の身体への現前に先立って存在していたかのように現れることがある。言いかえれば、ある1つの志向作用が、間身体的連鎖を張る個々の身体のいずれでもない、間身体的連鎖の全体を代表する身体に帰属するものとして現前することが起こる。この第三者的な身体は、間身体的連鎖を張る身体のいずれでもない、超越的な身体であり、意味的現前を外から指示するかのよう構成される。ただし、この超越的身体の構成は、決して必然的なプロセスではなく、蓋然的なプロセスである。

一般に、規範や意味は、論理的先行性と一般性という2つの特徴を持つが、これらの特徴は、規範や意味を指示する超越的な身体が、経験に先行するものとして構成されることに起因する。論理的先行性とは、意味や規範が、経験に対して、既に先行して存在していたかのように現れることを指す。これは、超越的身体の志向作用が、個々の身体に対する対象の現前に先立って、既に存在していたかのように構成されることに起因する特徴である。また、一般性とは、意味や規範が、無限の具体的な対象や行為を代表するかのよう現れることを指す。これは超越的身体の志向作用が、個々の身体の前を特殊ケースとして包含するかのよう構成されることに起因する特徴である。

この超越的身体は、あくまでも蓋然的にはあるが、次第に、具象的な身体から抽象的な身体へと変化し、また、そこに帰属する規範の作用圏が普遍化する。超越的身体の中で最も抽象度の低い超越的身体を「抑圧身体」と呼ぶ。抑圧身体は、間身体的連鎖を張る身体に、直接依存する形で形成される。しかし、抑圧身体的作用圏の外部には、超越性を突き崩すような、異和的な志向作用(が帰属する身体)が常に存在している。この違和的な志向作用が、抑圧身体的作用圏の内部に取り込まれる限りにおいて、——抑圧身体に帰属される規範によって、妥当とされる志向作用の1つとして組み込まれる限りにおいて——、抑圧身体の効力が維持される。言いかえれば、抑圧身体とそこに帰属される規範が、異和的な志向作用をも1つの特殊ケースとして包含しうるまでに抽象化する限りにおいて、抑圧身体の効力が維持される。

しかし、この抑圧身体の構成には、大きな矛盾が潜んでいる。抑圧身体は、求心化作用と遠心化作用の連動によって、互換的な状態にある身体達によって構成されたものである。にもかかわらず、抑圧身体は、この互換的な身体に妥当な行為を指示するかのよう現れる。つまり、抑圧身体は、身体を経験の産物に他ならないにもかかわらず、それぞれの身体を経験に先行して存在していたかのように現れ、それぞれの身体を経験の妥当・非妥当を指示するという、自己言及的矛盾がある。

この矛盾は「うそつきのパラドックス」と同一の構造となっている。「私は

うそつきである」という発話に対して、発話主体が正直者であると仮定すれば「うそつきである」という発話内容に矛盾を来し、「私はうそつきである」という発話内容を真と仮定すれば、発話主体の信憑性に矛盾を来してしまう。結局、この言明の真偽を決定することはできず、「私はうそつきであり、かつ、うそつきでもない」という、両義的な意味を持つことになる。

これと同じパラドックスが、抑圧身体的作用圏にある身体に現前する意味世界にも生じる。つまり、「Aであると同時に非Aである」という事態が現前しうるのである。抑圧身体の超越性が維持されるためには、この自己言及のパラドックスの顕在化が回避されなければならない。

そのパラドックスは、「時間」という形式が導入され、「Aである状態」と「非Aである状態」が時間に沿った振動として現れることによって、回避（非問題化）される。また、振動によるパラドックスの回避は、他者に対する一方的伝達を帰結する。すなわち、「Aの状態」が帰属する自己が、「非Aの状態」が帰属する他者に、「Aの状態」を一方的的に伝達するという形態を取ることによって、「Aでもあり、非Aでもある」というパラドックスが回避されるのである。

この伝達は、あくまでも一方的なものではなければならない。つまり、この一方的伝達が交換とは異なる点に注意しなければならない。交換においては、身体Aから身体Bに伝えられる媒体と、身体Bから身体Aに伝えられる媒体の等価性を保証する超越的身体がすでに成立していることが前提となる。これに対して、一方的伝達は、異なる超越的身体の下にある身体間で行われるのであって、他者が一方的伝達を受け入れるという保証は、どこにも無い。逆に、他者が一方的伝達をもともと了承しているのであれば、既に両者を作用圏とする超越的身体が構成されていることになり、一方的な伝達とはならない。その意味で、一方的伝達とは、伝達の主体から見れば「贈与」であり、受け手から見れば「略奪」であると言える。また、一方的伝達は1つの「賭け」にも喩えられる。この「賭け」が成功して初めて、抑圧身体は維持され、その効力が拡大される。

この贈与／略奪の成立も、抑圧身体の構成と同様、蓋然的なプロセスである。一方的伝達、すなわち贈与／略奪が生じるには、抑圧身体が、十分に抽象性を備えたものとして構成され、しかも、抑圧身体的作用圏が十分に隣接していることが必要である。

贈与／略奪が行われる際、贈与しようとする抑圧身体的作用圏と略奪しようとする抑圧身体的作用圏とが隣接した時、高い確率で、その作用圏が接続され、1つの超越的身体を共有するようになる。つまり、贈与元となる作用圏の意味が贈与先的作用圏の意味の前提として受け入れられる。すなわち、贈与が成功し、作用圏の接続が成功すれば、贈与先の意味体系は、贈与元の意味体系を前提とする形で再編成される。

抑圧身体の接続は3つ以上の作用圏の間でも起こりうる。抑圧身体の効果力が維持されるためには、贈与が繰り返され、その抑圧身体的作用圏が外部的作用圏と接続されていかなければならない。3つ以上の身体的作用圏の接続が生じる時には、贈与が何度も繰り返されるだけでなく、先行する贈与によって構成された作用圏の接続が既に生じており、それまでの贈与が、次の贈与の「文脈」として成立していることが前提とされる。

しかし、一方的伝達には、1つの根源的な困難が伴っている。それは、一方的伝達の伝達先となる他者の両義性に基づく困難である。①一方で、伝達先の身体は、意味を共有しえない他者でなければならない。②しかし、同時に、その他者は、贈与の相手として認識の対象とならねばならないし、また、贈与先の方から見れば、贈与する身体は贈与元として認識の対象とならざるをえない。このような両者の認識が成立することは、両者に共通の意味が必要であることを意味しており、したがって、①の条件と矛盾する。これが、一方的伝達の困難である。

この一方的伝達の困難性は、伝達の連鎖が長くなることによって、その顕在化が回避されうる。すなわち、複数の抑圧身体的作用圏が接続されている時、統合される抑圧身体的作用圏の集合が十分に多く、かつ、個々の作用圏の相対的意義が十分小さい場合、その連鎖の始点でもあり終点でもある身体として、

どの抑圧身体とも異なる1つの超越的身体（抑圧身体よりもさらに抽象的な超越的身体）が構成される。換言すれば、一方的伝達による抑圧身体の伝達の連鎖全体を代表するかのようには現れる超越的身体が構成されるわけである。この抑圧身体集合全体を統合する超越性を「集権身体」と呼ぶ。

こうして構成される集権身体は、抑圧身体よりもさらに抽象性が高く、したがって、規範の効力もより安定している。すなわち、求心化作用・遠心化作用の連動から直接的に構成される抑圧身体の実在性は、異和的な志向作用に攪乱される可能性に、常にさらされている。このことは基本的には集権身体にも当てはまるが、2段階の超越化を経て構成された集権身体は、抑圧身体に比べて、異和的な志向作用の攪乱に対して、より頑健である。

次項では、以上述べてきた理論によって、智頭町の活性化運動を考察してみよう。あらかじめ要約しておくならば、智頭町における活性化運動の推移は、2人の住民リーダーによって新しい抑圧身体が構成され、その抑圧身体が、その後、約十年間にわたる、住民リーダーから一般住民や町行政への一方的伝達（贈与）によって抽象化していったプロセスとして捉えられる。その一方的伝達の成功は、住民リーダーらのアイデンティティ——自分達は何に向かって進んでいるのか、また、何に向かって進むべきかについての明確な認識——を確立するとともに、一般住民や町行政の日常的思考の枠組みを再編成した。さらに、その抑圧身体の実効力は、行政組織にまで浸透し、集権身体化しつつあると考えられる。

2 活性化運動における規範形成プロセス

智頭町において展開されてきた活性化運動——3つのイベント、研究者・海外との交流、町行政との連携など——は、いずれのプロジェクトをとっても、その実現には大きなリスクをはらんでいた。前橋、寺谷らが、周到な計画を立てながら1つ1つのプロジェクトに挑戦していったのはもちろんである。しかし、仮に、プロジェクトが達成されたとしても、イベントそのものやプロジェクトの成果が、彼らが活性化しようとする地域の一般住民に、はたして受け入

られるかどうかは、決して定かではなかった。つまり、イベントそのものやプロジェクトの成果は、一般住民に受け入れられる保証もなく、いわば、前橋、寺谷から一方的に提供されたのだった。既に紹介したように、結果的に、前橋、寺谷からの一方的な提供は、おおむね、成功した——一般住民に受け入れられた。しかし、その成功は、およそ、高い必然性に裏付けられていたものではなく、まさに前項で説明した「一方的伝達（贈与／略奪）」そのものだったのである。

本項では、前項で紹介した大澤の身体論に基づき、とりわけ、一方的伝達（贈与／略奪）という概念を中心としながら、智頭町における活性化運動の推移を考察してみよう。具体的には、①前橋と寺谷による新しい規範の構成（抑圧身体（1）の構成）、②3つのイベント、研究者・外国人の贈与（の成功）による抑圧身体（2）の作用圏の拡大、③3つのイベント、研究者・外国人の贈与が一般住民に与えた影響、④前橋、寺谷らが約10年にわたって培ってきた能動的企画の姿勢とノウハウの行政への贈与（6）（それに伴う抑圧身体（3）の集権身体化）について考察する。

①前橋と寺谷による新しい規範の構成

前述のように、智頭町における活性化運動は、1984年の前橋と寺谷の出会いに始まる。寺谷は、初めての出会いから約1週間、連日、前橋と語り合い、2人は、自らの地域の活性化運動を開始することを決断する。この前橋と寺谷による活性化運動のスタートは、2人の身体を作用圏とする新しい抑圧身体（1）が構成され、新しい規範が構成されたことを示している。そのプロセスは、前項の概念を用いるならば、前橋と寺谷という身体の間で、求心点・遠心点の頻繁な反転が生じ、そこから間身体的連鎖が張られたことによって達成されたと考えられる。すなわち、2人の濃密な対話、および、連日の電話による議論（彼らは、今なおほとんど毎晩電話で会話をしている）によって、そのようなプロセスが達成されたと考えられる。「たった2人」からの出発であったが、1人ではなく、2人であったことの持つ意味は大きかった。

ここで、第2節の記述と重複するが、改めて、前橋と寺谷を作用圏とする新

しい規範によって妥当とされた行為（群）の特徴を考察しておこう。その行為（群）が、従来の伝統的規範の視点からは異和的な行為（群）であったことは言うまでもない。新しい規範によって妥当とされた行為（群）の第1の特徴として、「智頭という地域をほんの一部とする、より広範な視野の中で智頭をとらえる」という前提に立った行為（群）であるという点があげられる。つまり、それらの行為（群）は、智頭町の中だけを見つめるのではなく、智頭町外の広範囲な世界から引き出しうる力を利用して、智頭を変革していこうという発想に立脚している。実際、はじめの3つのイベントにしても、また、研究者・海外との交流にしても、智頭町外の広範囲な世界からの来訪者が、活性化の大きな「てこ」となっている。

翻って考えれば、このような広範囲な外部の世界を利用したイベントを企画しえたのは、おそらく前橋、寺谷のいずれもが、智頭の一般住民に比して、「外の世界」に精通していたことと無縁ではあるまい。前述のとおり、前橋は、関西に仕事上の大口得意先を持ち、しばしば、関西と智頭を往復しているし、寺谷は、約10年に及ぶ広島勤務の経験を持つ。2人は、地域集合体に属するのと同時に、「外の世界」の人々の集合体にも属していたわけである。したがって、「外の世界」の人々の集合体の一員として、地域集合体の性質のあるものについては、それを外部者として認識することができたのであろう。地域集合体の「閉鎖的」性質は、彼らが、外部者として認識することのできた地域集合体の性質の1つであったに違いない。当時、前橋が寺谷に語った言葉、「智頭の中だけを見て動かそうとしても智頭は動かない。智頭を囲む山々の稜線に、智頭をまたぐ『三又（さんまた）』を架けよう」という言葉は、前橋と寺谷が、地域を活性化する上での「外の世界」の重要性を認識していたことを物語っている。この2人に限らず、地域活性化運動のリーダーには、一旦、都会に出て戻ってきた人、いわゆるUターン経験者が多いのも、地域集合体の全体的性質、とりわけ、その閉鎖的集合性を外部の目から認識できることによると思われる⁽⁷⁾。

新しい規範によって妥当とされた行為（群）の第2の特徴として、それらの行為（群）が「杉」、とりわけ「杉の高付加価値化」を対象とする行為（群）で



智頭は杉のまち。しかし、杉は伝統的支配のシンボルでもある。

あるということをおこなうことができる。そもそも、前橋と寺谷は、その出会いに先立って、それぞれ、杉を使った商品の開発に着手していた。また、既に述べたように、彼らの地域活性化運動は、ごく自然に、杉の高付加価値化を軸として開始されていった。つまり、杉は、彼らが何か事を起こそうとする時、ごくごく自然に頼ることのできる、いわば無条件の存在であったと思われる。それは、幕末以来の植林に始まり、昭和初期にほぼ現在のような杉の山々の景観に至った長い歴史的伝統の産物である。智頭の人々は、文字どおり、四方八方を取り囲む杉の山々の懐に包まれて、その一生を送ってきた。

杉は、智頭の住民を包み込む伝統のシンボルであるとともに、地域の伝統的な支配構造のシンボルでもある。山々の杉も、国有林を除けば、一握りの山林

所有者の所有物である。明治以来、住民が生計を立てる上で、林業への依存度は、現在とは比べものにならないほど高かった。山林を所有することは、とりもなおさず、地域の支配的地位にあることを意味していたのである。この支配の構造は、農地解放こそあれ山林解放はなかった戦後も根強く存続している。地域を牛耳る一握りの有力者、資産家という場合、そのほとんどは、多くの山林を所有するものと重複する。山を持つ者と持たざる者、したがって、杉を所有する者と所有せざる者、この区別は、木材不況といわれる今日でさえ、なお、その意味を失ってはいない。

前橋、寺谷らが能動的企画・経営の対象とした杉は、地域の伝統的支配構造のシンボルでもあった。前橋と寺谷のいずれにしても、山を持たざる者であり、後に前橋、寺谷らとともに活性化運動を推進していく人々も、同じく、山を持たざる者たちである。そのような前橋と寺谷にとって、地域を牛耳る山持ちの山から切り出された杉に、新しい企画・経営の刃を入れることは、伝統的な支配の構造に刃を入れることをも意味しよう。それは、杉を智頭町内部（の伝統と支配）のシンボルから、智頭の内部と外部の連続性のシンボルに変換させる試みであった。しかし、それだけに、彼らの能動的企画・経営の姿勢は、有力者や資産家のみならず、地域の伝統的体質に染まった一般住民にとっても脅威だったのである。

②抑圧身体的作用圏の拡大

前述のように、前橋と寺谷によって構成され、2人の身体を作用圏とする抑圧身体は、次第に、その作用圏を拡大していった。すなわち、約30人の住民が前橋と寺谷の運動に参加し、地域活性化を目指すグループ（CCPT）が結成された。さらに、研究者岡田がそれに加わり、前橋、寺谷とともに、グループのリーダーの役割を果たすようになった。このCCPTの結成、また、岡田の参加も、彼らの間の濃密な対話を通じて達成された。そのプロセスにおいても、前橋と寺谷、約30人の住民、そして岡田という身体（群）の間に、頻繁に求心点・遠心点の反転が生じ、間身体的連鎖が形成されていったことは想像に難く

ない。

約30人の住民が前橋と寺谷を中心に集団を結成したのは1988年のことであるが、その構成メンバーは1992年に至ってようやく対外的に公表された。それまでは、前橋や寺谷の行動に賛同した人が、個別的なプロジェクト遂行のために前橋や寺谷と行動を共にするという形態であり、前橋と寺谷を介して間接的には1つの集合体を形成していたとしても、自他共に認める顕在的な集団ではなかったわけである。その理由は、へたに構成メンバーを公表することが危険だったからに他ならない。確かに、第1期における、いやが上にも注目せざるをえない前橋、寺谷の実績によって、2人に関する限り、地域住民も、当初のような無視の態度は取りえなくなっていた。そのことは、前橋と寺谷に対する反発が強くなってきたことをも意味している。しかし、既に、前橋と寺谷は、直接反発を向けるにはあまりにも強くなっていた。その反動として、前橋と寺谷を支持し、それに追随しようとするメンバーたち、とりわけ、年齢や資産の面で下位の立場にある者が、反発の矢面に立たされる危険性は高く、前橋と寺谷は、メンバーリストの公表に慎重にならざるをえなかったのである。つまり、第2期、とりわけ、第2期の前半においては、CCPTのほとんどのメンバーには、前橋、寺谷と行動を共にしたいという願いと地域住民から疎外されることへの不安が同居していたといえよう。この不安が払拭されるには、前橋と寺谷だけを作用圏としていた抑圧身体が、約30名のメンバーをも作用圏に包含するに至るのを待たねばならなかった。

次に、岡田の参加についてみれば、岡田の決断は、前橋、寺谷との濃密な対話、および、CCPTメンバーとの夜を徹した対話の連続の中でなされている。その濃密な対話のプロセスにおいては、前橋、寺谷をはじめとする約30名の身体と岡田の身体の間で、頻繁に求心点・遠心点の反転が生じ、間身体的連鎖が張られ、それまでの抑圧身体的作用圏が岡田をも含むまでに拡大していったと考えられる。その一例が、第2節でも紹介した、岡田の主張による、前橋と寺谷の町政志向の放棄であろう。これは前橋と寺谷によって創出された規範が、岡田と間身体的連鎖を張ることによって、さらに抽象化し、それによって、2



杉の木村のログハウス

人の規範によって妥当とされる行為（群）が、「町政とは一線を画す」という前提とも整合するように再編成されたことを物語っている。

しかし、ここで重要なことは、約30名のCCPTメンバーの参加や、岡田の参加による抑圧身体的作用圏の拡大に果たした、一方的伝達（贈与／略奪）の役割である。先に、前橋、寺谷と約30名のメンバー、あるいは、岡田との間に間身体的連鎖が張られ、抑圧身体的作用圏の拡大と抽象化が進行していったことを指摘した。しかし、その抑圧身体的作用圏の拡大と抽象化を決定的にした（その蓋然性を飛躍的に高めた）のが、前橋、寺谷らから一般住民になされた贈与（の成功）であった。

ここで3つのイベントのうちで、もっとも規模の大きかったログハウス群「杉の木村」建設のイベントを例にあげて、そのイベントが前橋、寺谷らから集落住民への大きな贈与であったことを示しておこう。1989年に「ログハウス群建設」の企画を立てた前橋と寺谷は、ログハウス群建設地となる集落の有力者に、CCPTの計画を説明し、さらに、建設後は、ログハウス群を集落に無償譲渡するので管理運営をしてほしいという希望を伝えた。しかし、その時の

有力者達の反応は、無関心そのもの、あるいは、余計なことはすると言わんばかりの反応であった。前述したように、多数の人力と資金を投入したログハウス群建設は、このような現地集落の中で敢行されたのである。しかし、現地集落住民の無関心は、ログハウス建設が完了した直後まで、基本的に変化しなかった。実際、ログハウス完成直後、無償譲渡の実行に入ろうとする前橋、寺谷の申し出に対応するだけの体制は、現地集落にはできていなかった。しかし、とにかく無償譲渡は、ログハウスの管理運営に関心を示した約半数の現地集落住民に対して実行された。その後の推移については、第2節で紹介したとおりであるが、このログハウス群は、予想を上回る多くの人が、憩いを求めて集まる場となった。その動かしがたい現実には、現地集落住民全体を管理運営に関与せしめただけではなく、彼ら自身によるログハウス（食堂施設）を造るに至らしめた。つまり、前橋、寺谷らによって試みられた贈与は、現地住民に略奪されることによって、成功したのである。現在では、地元住民は、ログハウス群を集落の誇りとみなすようにさえなっている。

以上と同じ贈与／略奪のメカニズムは、「ログハウス群建設」に先立って行われた2つのイベントにも見ることができる。また、同様の贈与／略奪のメカニズムは、第2期において、都会の研究者、あるいは外国人を媒体とすることによって試みられ、再び成功を収める。

要約しよう。智頭町における活性化運動の各ステップは、当事者にとって不安に満ちた挑戦の連続であった。各ステップにおいて、自らがなすべきことの妥当性には、大きな不安定さが伴っていたのである。しかし、その不安定さは贈与の成功によって克服されていった。すなわち、前橋、寺谷と約30名のCPTメンバーから一般住民への贈与が成功する（一般住民によって略奪される）ことによって、前橋と寺谷だけを作用圏としていた抑圧身体的作用圏が、約30名のメンバーをも包含するまでに拡大した。同様に、前橋、寺谷らを中心とする約30名のメンバーが、岡田とともに、一般住民に対して試みた贈与が成功することによって、抑圧身体的作用圏が岡田をも包含するまでに拡大したと考えられる。

③贈与の一般住民への影響

ここでは、前橋、寺谷らの贈与を、略奪した側の一般住民の変化に目を転じて考察してみよう。前項で述べたとおり、一方的伝達（贈与／略奪）の成功は、贈与元の規範的前提が、贈与先の規範的前提として組み込まれ、贈与先の規範が、組み込まれた規範的前提の上に再編成されることを意味している。

では、前橋、寺谷らが一般住民に対して行った贈与——3つのイベントを通じた贈与、研究者や外国人の贈与——によって、一般住民の側の規範的前提が、どのように変化し、従来からの行為はどのように再定義されていったのであろうか。

まず、第1に、「木づくり遊便コンテスト」は、杉材に関する規範的前提を変化させた。智頭において、杉の端材は、従来、商品化の対象とはみなされていなかった。しかし、「木づくり遊便コンテスト」の成功、さらには、このコンテストを機に、地元の女性3人によって発足した「ウッドクラフト研究会」の活動によって、端材も商品化の重要な素材になりうるという新たな前提が生まれたのである。

第2に、『日本の家』設計コンテストは、智頭における杉の商品価値に対する規範的前提を変化させた。杉の生育にとって恵まれた気候風土にある智頭では、良質な杉材が産出される。しかし、従来、智頭で産出された杉材は、「吉野杉」のブランドで市場に出荷されていた。「智頭杉」が1つのブランド品たりうるという前提の変化を、「日本の家」設計コンテストはもたらしたのである。

第3に、ログハウス群建設は、建設の現地集落の住民が立脚していた2つの前提を変化させた。現地集落は、山間の町、智頭町の中でも、もっとも山深いところにある集落であり、若者の流出も抗しがたいほどに顕著であった——1991年に集落のある家庭に赤ん坊のおむつが干されたが、それは集落で10年ぶりに干されたおむつであった。このような状況下においては、集落の明るい将来展望など望むべくもない。社会の動きに取り残され、さびれていく集落——これが集落の人々の前提となるのは、むしろ自然なことであった。ログハウス



ログハウス群「杉の木村」が建設された八河谷集落

群の出現、そして、年間15,000人の来訪者の出現は、この集落住民の前提を大きく変えた。これによって、現地集落の人口減と高齢化に歯止めがかかったわけではないが、「なすすべもなく、さびれていかざるをえない集落である」という前提が、何がしかの明るさを伴った前提に変更されたことは、間違いないのではあるまいか。

次に、ログハウス群の建設、およびその管理運営が現地住民に委ねられたことは、集落に残っていた「総事」に対する前提を大きく変化させた。この点については、第2節でも述べたが、改めて、贈与と略奪の観点から再確認しておきたい。本来、総事とは、集落の住民が総出で行う、集落維持のための無償の共同作業であり、具体的には、共有林の手入れ、集落の掃除などを意味していた。しかし、ログハウス群が建設された現地集落では、過疎化の進行に伴い、これらの総事は1980年代の中頃にはほとんど途絶えかけていた。

実のところ、当初、筆者は、現地住民がログハウス群の管理運営に携わっている姿を見て、それが住民にとってどのようにとらえられているのかを計りかねていた。ログハウス群を訪れる多くの人々の目には、集落住民が行なっていることは、民宿経営と大差ないものに映る。しかし、彼らがログハウス群の管理・運営に費やす労力の代価として得ている収入を調べるうちに、その額が、民宿経営という営利行為と呼ぶにはあまりにも少ないことに気づかされた。集落住民の中には山林所有者もいれば、かつての木材景気のときに得た収入で関西に賃貸マンションを所有するものもいた。第一、彼らには農業という、それだけで生計を立てることができる本業があり、その本業から得られる収入に比べれば、産業組合を通じて得られる収入は、余りにも少ないアルバイト代としか言いようがないほどであった。

ログハウス群の管理・運営を巡って、集落住民が行なっていることを端的に指す言葉が、集落住民自身のボキャブラリーの中に発見された。それが「総事」という言葉であった。筆者が総事という言葉に注目したのは、住民たちがログハウス群の管理・運営の作業をそう呼んでいたからではない。集落全住民とのインタビューを含む現地調査において、筆者が耳にした数多くの語彙の中で、ログハウス群の管理・運営活動をイメージさせる言葉として、いわば、偶然に注目した言葉が、「総事」だったのである。しかし、ログハウス群における作業は総事ではないのか、との仮説をもって、集落のリーダー的住民に再び話を聞いたときのセリフは、われわれの仮説を支持するものであった。「そう、今のわれわれの集落にとって、総事といえるのは、杉の木村だけかもしれな

い」。

しかし、忘れてならないのは、杉の木村で行われている総事は、あくまで、「新しい」総事であるという点である。その総事は、前橋、寺谷という能動的な経営感覚の持ち主によって創出された総事であり、また、年間15,000人を越える外来者を相手にした総事でもある。それは、単に、消滅しかけていた総事の復活にとどまらない。それは、従来の総事が、集落「内部」における共有財産の維持・管理、あるいは、集落住民「内部」における互助のための総事であったのに対して、はるかに集落「外部」に開かれている。このように、杉の木村の贈与は、現地住民の総事に関する前提を変化させたのである。

最後に、第4として、第2期における、都市部の研究者や外国人の贈与が、一般住民の規範的前提を変化させたことを指摘しておこう。従来、智頭町のような山間の地に、都会の研究者が訪れることはほとんどなかった。また、とりたてて観光資源もない智頭町に外国人が来訪することもほとんどなかった。つまり、従来の一般住民の行為（あるいは認識）の根底に、智頭町が都会の研究者や外国人が頻繁に訪れる地であるという前提はなかったと言える。しかし、智頭町を頻繁に訪れ、前橋、寺谷らと交流する研究者を目の当たりにしたり、あるいは積極的な海外派遣活動やそれに応えて来訪する外国人を目の当たりにして、この規範的前提に変化が生じたのである。今や、智頭町の住民にとって、都会の研究者や外国人が来訪することは、何ら特別なことではなくなっている。

④行政との融合と集権身体化

1994年以降、智頭町における活性化運動は、前橋、寺谷らを中心とする顕在的な小集団による活動から、町行政と前橋、寺谷らが融合した活動へと移行しつつある。具体的には、前橋、寺谷に加えて、町役場に勤務するCCPTメンバーが中心となり、役場職員と郵便局職員からなる、能動的なまちづくりを意図したプロジェクトチームが発足した。前述のように、「ひまわりシステム」は、このプロジェクトチームによって企画されたシステムである。また、「ゼロ分のイチ村おこし運動」も始められ、現在（2000年度）14集落がこの運動に



ゼロ分のイチ村おこし運動——しんどう新田集落の女性の会合

取組んでいる。

この行政と前橋、寺谷らとの融合は、前項の理論枠組みに基づくならば、前橋、寺谷らが10年間にわたって培ってきた能動的企画の姿勢とノウハウが、行政に対して贈与されたプロセスと考えられる。実際、行政が前橋、寺谷らとの連携に最初から積極的であったわけではない。むしろ、町長を含めた町役場の職員は、前述の杉の木村建設現地の住民と同様、余計なことはしたくないという躊躇ないしは拒否の姿勢を示していた。しかし、今や、「ひまわりシステム」や「ゼロ分のイチ村おこし運動」は、町行政の一部として正当に位置づけられ、町役場が智頭町を紹介するために作成したパンフレットにも大きく掲載されている。前橋、寺谷らからの贈与は、着実に町行政によって略奪されつつある。これまでの贈与がイベントやイベントの産物、あるいは都会の研究者・外国人の贈与であったのに対し、前橋、寺谷らの10年間の生きざまそれ自体——前橋、寺谷らという身体の同一性そのもの——の贈与が、成功への道を歩みつつある。

その贈与の具体例を見てみよう。まず、まちづくりのための能動的な企画を

意図し、町役場と郵便局が連携して作られたプロジェクトチームには、CCPTが日頃、企画・計画立案に用いてきた討議技法が贈与されている。また、プロジェクトチームは、町役場職員と郵便局職員からなり、さらに郵便局職員は智頭町外から勤務している職員から選ばれている。このような業種横断的な対話や地域外との対話は、前橋、寺谷らにとっては、10年間、日々取り組んできたことであるが、縦割り行政の特徴を持つ役場にとっては、まったく新しい試みであった。

次に、「ゼロ分のイチ村おこし運動」は、前橋、寺谷らが、自らの住む地——智頭町——を活性化するために、10年間行なってきた能動的活動が、智頭町にある約90の集落の1つ1つにおいて実践されることを意図した運動である。この運動では、前橋、寺谷らのグループが培ってきた活性化運動の姿勢とノウハウが、まずは行政に贈与され、さらに行政を通じて、各集落に贈与されている。

この「ゼロ分のイチ村おこし運動」には、これまでには見られなかったような住民の能動性が観察されはじめている。この運動の初年度、7つの集落が立ち上がった。最初、役場の説明会に出たときは、伝統的な有力者や資産家でもない自分たちが、勝手に集まり、集落の将来を云々したりしてよいものだろうかという不安を感じ、運動への参加に躊躇する人がほとんどであった。しかし、役場スタッフからの激励と援助もあって、7つの各集落では、20人前後の住民が、夜、あるいは、日曜祭日に公民館に集まり、わが集落の現状と10年後のビジョンについて語り合うようになった。女性や子どもたちも参加して、模造紙を囲み、10年後のわが集落のビジョンを絵に描くといった、従来の寄り合いでは想像もできなかった光景さえ見られるようになった。

この「ゼロ分のイチ村おこし運動」の大きな特徴は、この運動に取り組む集落住民にとって、もはや、この運動と前橋や寺谷との間に直接的な連想は成立していないという点である。しかし、この運動は、前橋、寺谷らから、町行政を経由して、集落住民に対してなされた贈与によって開始された運動である。つまり、集落住民は、13年前、前橋、寺谷によって創出され、その後拡大していった抑圧身体的作用圏に包含されたことになる。しかし、重要なのは、もは

や、その抑圧身体は、前橋、寺谷に担われてきたような抑圧身体とは異なり、はるかに、その具象性を減じている（抽象性を増している）ということである。これは、前橋、寺谷らのグループ、町役場、および「ゼロ分のイチ村おこし運動」に取り組む集落住民が、集権身体化しつつある抑圧身体的作用圏にあることを示唆している。換言すれば、13年前、前橋と寺谷という、たった2人によって創出された抑圧身体が、集権身体という次なる水準への変容を遂げつつあると考えられる。

同様のことは、先に述べた「ひまわりシステム」についても当てはまる。「ひまわりシステム」が、前橋、寺谷らから役場に対して行われた、能動的企画の姿勢とノウハウの贈与に端を発して誕生したことは、すでに述べたとおりである。しかし、現在、独居老人の家をまわり、独居老人にサービスを提供している郵便外務職員にとって、また、サービスを受ける高齢者にとって、前橋や寺谷の具象性は、ほとんど重要性をもっていない。

別の角度から見れば、前橋、寺谷らから役場への贈与が成立するという事自体、役場組織が、ある程度の抑圧身体的体質を持っていることを示しているのではあるまいか。確かに、山間地の役場といえども、地方行政組織の1つである以上、規則や公式の手続きをもとにした規範——集権身体に裏付けられた規範よりも、さらに一段と抽象度の高い規範——の作用圏にある。しかし、山間地、あるいは、「田舎」という言葉で称される地域には、少ない人口、高い地域定着率、長い伝統に根差した地縁・血縁関係等の事情に起因して、具象的であることが規範の源泉となる上で極めて重要な首長（あるいは、有力な政治家や行政マン）を有する行政が数多い。智頭町もその例外ではないと思われる。このことは、地域の活性化を志す少数の住民によって創出された規範が、都市部に比して、行政に贈与されうる可能性が高いことを示唆している。もちろん、このような少数の住民集団が新たな規範を創出し、その作用圏を拡大していくことには、幾多の困難が立ちはだかっている。また、仮に、少数の住民から行政組織への贈与が試みられても、その贈与の実現は決して容易なことではない。しかし、もし、過疎地域において、少数の住民によって新しい規範が創

出され、成功裡に行政に贈与された場合、都市部では見られないような地域の変容が達成される可能性があるのではなからうか。過疎地域について語られる場合、ややもすると、都市部に対する過疎地域のハンディだけが強調される傾向があるが、われわれは、過疎地域だからこそ芽生えうる先進性を忘れてはなるまい。実際、本稿で紹介した「ひまわりシステム」は、新しい高齢者福祉システムとして全国的な展開が試みられつつある。

注

- (1) ジゲは、自分たちの土地という意味。
- (2) 集合性とは、集合体を1つの全体としてみたときの全体的性質を指す。
- (3) 2mくらいの3本の棒の片方をくくって、三角錐状に立てたもの。通常、2つの三又（さんまた）に横棒を渡して、刈り穂や衣類を干すのに用いる。
- (4) ここに言う「エディター」とは、陣頭指揮型のリーダーではなく、人々のさまざまな活動をエディットする（紡ぐ）リーダーという意味である。
- (5) 本節は、智頭町における活性化運動という現象を、大澤の身体論に基づいて考察するものであるが、大澤自身も、すでにさまざまな文化人類学的現象（大澤、1992）や、電子メディア（大澤、1995）、オタク（大澤、1995）、オウム真理教事件（大澤、1996）等の現代社会における現象を、自らの身体論に基づいて考察している。
- (6) 抑圧身体、集権身体という用語は、前項で定義したとおり、超越性の水準を区別する用語である。間違っても、「前橋、寺谷らが住民を抑圧した」とか、「前橋、寺谷らが集権体制を作り出した」といった意味に解してはならない。
- (7) すでに述べたように、抑圧身体は、間身体的連鎖を張るいずれの個別的身体でもない、第三者的な身体として構成される。言いかえれば、抑圧身体は、その作用圏にある個別的の身体のいずれにとっても他者性を有していなければならない。もちろん、抑圧身体は、集権身体（あるいは、それよりもさらに抽象的な超越的身体）に比べれば具象的であり、したがって、ある個別的の身体とオーバーラップする形で構成される。しかし、その場合も、抑圧身体をオーバーラップさせた個別的の身体は、抑圧身体の他者性に見合った他者性を有することになる。

このことは、あらかじめ他者性——規範の作用圏の外にあるという性質——を有する個別的の身体にオーバーラップさせる形で抑圧身体が構成される蓋然性が高いことを含意している。この意味で、前橋と寺谷が「外の世界」の一員でもあったことは、彼らの個別的の身体とオーバーラップする抑圧身体が構成される蓋然性

を高めたと言えよう。

引用文献

- 安達生恒 1973 “むら”と人間の崩壊 三一書房。
- 大澤真幸 1990 身体の比較社会学Ⅰ 勁草書房。
- 大澤真幸 1992 身体の比較社会学Ⅱ 勁草書房。
- 大澤真幸 1995 電子メディア論 新曜社。
- 大澤真幸 1996 虚構の時代の果て——オウムと世界最終戦争 ちくま新書。
- 岡田憲夫・高野博司 1989 鳥取県智頭町八河谷地区実態調査報告書 智頭町活性化プロジェクト集団。
- 岡田憲夫・杉万俊夫・平塚伸治・河原利和 2000 地域からの挑戦——鳥取県・智頭町の「くに」おこし 岩波ブックレット。
- 河原利和・石川雅典 1990 ふるさと生活の再構築——鳥取県智頭町における地域活性化のケーススタディ 財環境文化研究所。
- ガルブレイス, J.K. 1960 ゆたかな社会 岩波書店。
- 国土庁地方振興局 1993 過疎対策の現況(平成4年度版)。
- 全国町村会・町村研究フォーラム 1993 地域を担う人材——人を育て、人を活かす 千里。
- 田村 明 1987 むらづくりの発想 岩波新書。
- 智頭町役場地域開発課 1996 杉源郷物語——智頭町勢要覧。
- 寺谷 篤・岡田憲夫 1991 地域活性化活動から生まれたプロジェクト企画のシステム法——四面会議システム法 土木計画学研究・講演集, 14(1)。
- Durkheim, E. 1924 *Sociologie et Philosophie*. Felix Alcan. 佐々木文賢(訳)1985 社会学と哲学. 恒星社厚生閣。
- Parsons, T. and Shils, E. A. (Eds.). 1951 *Toward a general theory of action*. Harvard University Press. 永井道雄・作田啓一・橋本 真(訳)1960 行為の総合理論をめざして 日本評論新社。
- Moscovici, S. 1984 The phenomenon of social representations. In R. Farr & S. Moscovici (Eds.), *Social representations*. London: Cambridge University Press.
- 楽学舎 2000 看護のための人間科学を求めて ナカニシヤ出版。